HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	アウシュヴィッツにかんする3つの供述書
著者	木村，和範；KIMURA，Kazunori
引用	季刊北海学園大学経済論集，70(1)：69-132
発行日	2022-06-30

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

《翻訳》

アウシュヴィッツにかんする３つの供述書

木　村　和　範（訳）*

訳者はしがき / 70
１．ヴルバ＝ヴェツラーによる報告文書（第１文書）/ 71
まえがき / 71
(1) アウシュヴィッツとビルケナウ / 71
(2) マイダネク / 93
付図１　ポーランドにおける主要絶滅収容所（1942 年）/ 99
付図２　ビルケナウ収容所の寝棚（３段）/ 99
２．モルドヴィッツとロジンによる報告文書（第２文書）/ 100
付図３　アウシュヴィッツ第１収容所（基幹収容所）10 号棟（人体実験棟）入り口 / 105
３．タボーによる報告文書（第３文書）/ 106
(1) 強制移送 / 106
(2) 収容所に入りたての頃 —「医務室」/ 109
(3) ユダヤ人 / 114
(4) 処刑 / 117
付図４　収容所のオーケストラ（パネル）/ 121
付図５　ランプ付近の監視塔 / 121
付図６　11 号棟１階（即決法廷）/ 121
資料１　1944 年 10 月 12 日付ベルン駐在アメリカ公使館特別補佐官ロズウェル・D. マクレランド発アメリカ合衆国大統領府戦争難民局長ジョン・ペール宛書簡 / 122
資料２　報告文書３篇の公開に寄せたアメリカ合衆国大統領府戦争難民局の見解 / 124
訳者あとがき / 125
１．脱走者と報告文書 / 125
２．３文書の公開 / 127
３．ドイツによるハンガリー占領とユダヤ人の強制移送 / 128
４．アウシュヴィッツ・レポートと強制移送の中止 / 130

＊本学名誉教授

【訳者はしがき】

標題を付して訳出した 3 篇は，ナチス・ドイツ下の強制収容所から脱走した 5 人の元収容者（ルドルフ・ヴルバとアルフレッド・ヴェツラー，チェスワフ・モルドヴィッツとアルノシュト・ロジン，イェジー・タボー）による報告文書（全訳）である。この文書の全文と付属文書 2 点（資料）は，Franklin D. Roosevelt Presidential Library and Museum（以下，「ルーズベルト図書館」と言う。）に所蔵されている。これらの文書は，

http://www.fdrlibrary.marist.edu/_resources/images/hol/hol00522.pdf, in: https://www.fdrlibrary.org/vrba-wetzler-report, accessed on March 25, 2022

によって閲覧が可能である。訳出に当たっては，これを底本としたが，適宜以下のドイツ語訳を参照した。Frank Baron, Früheste Berichte über Auschwitz und die Deportationen, in: Sándor Szenes and Frank Baron, *Von Ungarn nach Auschwitz. Die verschwiegene Warnung*, Münster: Westfälisches Dampfboot, 1994, pp. 107–190（https://www.researchgate.net/publication/47453471_Von_Ungarn_nach_Auschwitz_Die_verschwiegene_Warnung, accessed on June 13, 2022).

第 1 文書（ヴルバ＝ヴェツラーによる），第 2 文書（モルドヴィッツ＝ロジンによる），第 3 文書（イェルジー・タボーによる）の 3 文書は，1944 年 10 月 12 日，ベルン駐在アメリカ公使館特別補佐官ロズウェル・D. マクレランドによって，アメリカ合衆国大統領府戦争難民局長ジョン・ペールに送付された（資料 1）。戦争難民局は，これらの文書の意義に鑑みて，広くアメリカ国民に向け，同年 11 月に公開した（資料 2）。

これらの文書は，「アウシュヴィッツ・レポート」（The Auschwitz Report）などと言われている。同文書が果たした歴史的意義については，Randolph L. Braham, *The Politics of Genocide: The Holocaust in Hungary*, Condensed Edition, Published in association with the United States Holocaust Memorial Museum, Detroit, Wayne State University Press, 2000, esp. Chapter 11 (Attitudes and Reactions: International), pp. 227ff. などを参照して「訳者あとがき」で述べる。ここでは同文書によってアメリカのみならず，連合国側の時局認識が改められたと言うに留める。

第 1 文書の原文（英語版）は文字データに変換され，いくつかのサイトで公開されて，“The Auschwitz Protocol”，あるいは“The Vrba-Wetzler Report”をタグに検索すれば，ヒットする。ただし，原本にある図が割愛されていたり，その代わりに関連する写真が挿入されていたりする。そのほかにも，段落区切りが原本と異なっていたり，文章の欠落やおそらく読み取り時の誤変換によるミススペルも目に付いたりするので注意を要する。

なお，脚注および［　］内は訳者による。

写真　アウシュヴィッツ第 1 収容所（基幹収容所）ゲートの内側から

（注記）2020 年 1 月 30 日訳者撮影。

１．ヴルバ＝ヴェツラーによる報告文書（第１文書）[1]

まえがき

1942 年にスロバキアから強制移送されて，２年間，ビルケナウ，アウシュヴィッツ，ルブリン＝マイダネクの強制収容所に収容された後，幸運にも収容所から脱走に成功したスロバキア人の青年が２人[2] いる（安全のため，当分の間は名前を明かさない）。

そのうちの一人は，1942 年４月 13 日にセレッジ［ブラチスラバの東約 55㌔］[3] の一時収容所[4] からアウシュヴィッツ［クラクフの西約 60㌔］に移送され，その後，［アウシュヴィッツから４㌔～５㌔離れた］ビルケナウ[5] に送られた。もう一人は，1942 年６月 14 日にノヴァキ[6]［ブラチスラバの北東約 145㌔］の収容所からルブリン［ワルシャワの南東約 165㌔］に移送され，そこに短期間収容の後，アウシュヴィッツに移送され，さらにビルケナウに移された。

以下に掲載する報告書には，２人が収容中に体験したことの全部が書かれているわけではないが，２人またはいずれか一方がみずから受けた苦難，直接耳にしたこと，直接体験したことだけが書かれている。個人的な感想や判断はまったく書かれていないし，伝聞したことも書かれてはいない。

この報告文書は，セレッジから連行された一人のユダヤ人青年の話から始まる[7]。ビルケナウでの体験談は，２人目のユダヤ人がそこに到着したときから始まっており，したがって，報告文書は２人の供述にもとづくものである。次に，ノヴァキからルブリンに移送され，そこからアウシュヴィッツに送られた２番目のユダヤ人の話が続く[8]。

この供述書は，これまでに寄せられた信頼できる，あらゆる断片的な報告と一致するばかりか，様々な収容所への移送にかんする日付もまた公文書と一致している。以上から，この報告文書で述べられていることは，完全に信頼できるものとみなしうる。

(1) アウシュヴィッツとビルケナウ[9]

1942 年４月 13 日，1000 人からなる我々一行は，セレッジで貨車に積み込まれた。ドアが閉められて，行き先は分からないようになっていた。しばらくして扉が開けられ，スロバキア国境を越えてズワルドン[10]［クラクフの南西約 120㌔］に到着したことに気が

(1) 第１・２文書は，アメリカ大統領府戦争難民局が 1944 年 11 月に “The Extermination Camps of Auschwitz (Oświęcim) And Birkenau in Upper Silesia（アッパー・シレジアのアウシュヴィッツ（オシフィエンチム）とビルケナウの強制収容所）” というタイトルを付して公開された（資料２）。以下，「まえがき」以外の第１文書を執筆したのは，Rudolf Vrba and Alfred Wetzler と同定されている。このことについては，たとえば，Nikola Zimring, “A Tale of Darkness: *Story of Mordowicz-Rosin Report*,” in: Rudolf Vrba, *I escaped from Auschwitz*, Co-Authored by Alan Bestic, New York, 2020 (previously published in 2002 by Barricade Books, Inc.) [Vrba (2020)], p. 371 を参照。以下，［　］内は訳者による（以下同じ）。

(2) 前注に挙げた Rudolf Vrba と Alfred Wetzler。

(3) Sered’.

(4) “assembly camp”。各地で検挙したユダヤ人などを一時的に集め，強制・絶滅収容所に移送する直前に勾留するための収容所。“transit camp”（通過収容所）とも言われる。

(5) アウシュヴィッツの収容所は，アウシュヴィッツ第１収容所（基幹収容所，強制収容所，1940 年５月開所），アウシュヴィッツ第２収容所（ビルケナウ収容所，絶滅収容所，1941 年 10 月開所），アウシュヴィッツ第３収容所（モノビッツ収容所，労働収容所，ブナとも。1942 年 10 月開所）の３収容所ならびに多数の補助収容所からなる収容所複合体である。

(6) Novaky.

(7) 第１文書「(1) アウシュヴィッツとビルケナウ」。

(8) 第１文書「(2) マイダネク」。

(9) このタイトルは訳者による。

(10) Zwardoń.

ついた。そこまでは列車にフリンカ兵[11]が付いてきたが，親衛隊の看守に引き継がれた。列車から数両の貨車が切り離され，我々を乗せた列車は，夜，アウシュヴィッツに到着し，側線で停車した。[数両の貨車だけがアウシュヴィッツに向かい，ズワルドンに] 残された貨車があったのは，どうやらアウシュヴィッツに空きがなかったからのようだ。しかし，数日後には我々と合流した。到着すると，5 列に並ばせられ，人数を数えられた。643 人いた。(十分な身支度をしてスロバキアを出発した我々は，) 重い荷物を持って 20 分ほど歩き，アウシュヴィッツ強制収容所に到着した [付図 1][12]。

我々はすぐに大きなバラックに入れられ，そこで，携行品をすべて預けてから，全裸にさせられた。貴重品はその場に放置しなければならなかった。裸のままで隣のバラックに移動した我々は，頭髪を刈られ体毛を剃られ，ライゾール液で消毒された。バラックの出口では，28,600 から始まる連番の数字が一つずつに与えられた。番号を交付された我々は，3 番目のバラックに移動し，2 番目のバラックで受け取った番号が左胸に入れ墨で彫られた。いわゆる登録である。あまりにも乱暴で，気が遠くなった者も多い。身元も詳細に記録された。その後，100 人ずつのグループごとにバラックに入れられ，縞模様の囚人服と木靴が支給された。これには，午前 10 時まで掛かった。午後になると，囚人服が取り上げられ，ボロボロで汚れたロシア軍の軍服のなれの果てと取り替えられた。このような姿で，我々はビルケナウへと行進した。

アウシュヴィッツは，いわゆる「保護拘禁」中の政治犯のための強制収容所であった。私が到着した 1942 年 4 月には，収容所には約 1 万 5000 人の囚人がいたが，その大半は保護拘束中のポーランド人，ドイツ人，ロシア人（民間人）であった。わずかながら，刑法犯と「労働忌避者」もいた。

アウシュヴィッツ収容所の司令部は，ビルケナウの労働収容所とハルメンジェの労働収容所（農場）[13] を同時に管理していた。すべての囚人はまずアウシュヴィッツに到着し，そこで囚人番号を付与される。アウシュヴィッツに留まる者もいれば，ビルケナウに送られる者もいる。わずかながら，ハルメンジェに送られる者もいる。到着した囚人は，連番になった番号を受け取る。どの番号も一度しか使われないので，どのような場合でも，最後の番号は，収容所に実際にいる囚人の人数と一致する。我々が脱走した 1944 年 4 月の初めには，収容者の数は 18 万人にまで増えていた。当初，番号は左胸に入れ墨で彫られたが，その後かすんでくると，左の前腕に入れ墨された。

囚人がどのようなカテゴリーに分類されているかとか，どのような国籍であるかとかには関係なく，その取扱は同じであるが，簡単に見分けが付くようにするため，登録番号の下に様々な色の [逆] 三角形の布地を左胸に縫い付けてある。最初の文字は，囚人の国籍を示す。この文字（たとえば，P はポーランド人）は，三角形の布地の中央に書かれていて，三角形の布の色には，次のような意味がある。

赤	保護拘禁中の政治犯
緑	常習の刑法犯
黒	労働忌避者，反社会分子（ほとんどがロシア人）

(11) ナチス支配下のスロバキアでユダヤ人の強制移送の警備に当たった民兵。Cf. https://www.ushmm.org/search/results/?q=Hlinka, accessed on March 28, 2022

(12) 付図は文書ごとに，その末尾に掲載した。

(13) Harmęże. オシフィエンチムの南西約 8 ㌔，クラクフの西約 65㌔にあるアウシュヴィッツ複合収容所の補助収容所。

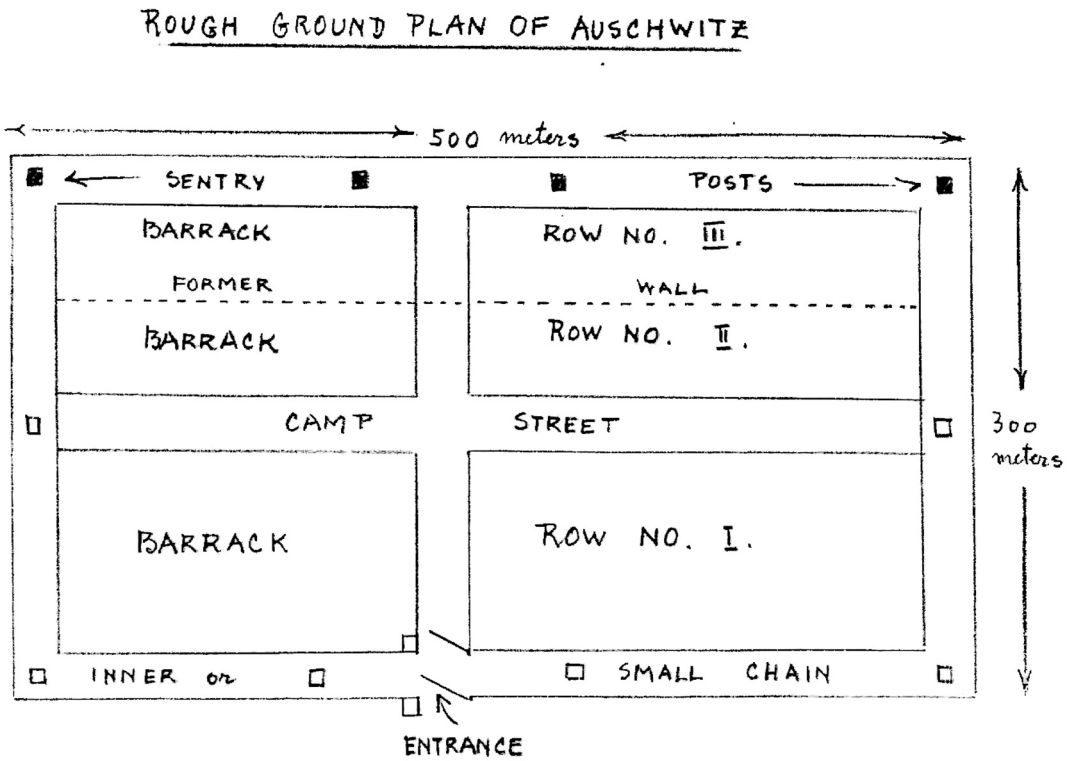


図 1-1　アウシュヴィッツ第１収容所（基幹収容所）（1942 年）

（訳注）■は監視塔。２列目と３列目の間の壁（図では破線で示した FORMER WALL）は，1942 年８月以降に撤去された（本文参照）。入り口のゲート（ENTRANCE）の上には “Arbeit macht frei”（働けば自由になる）の文言が架かっている（「訳者はしがき」の写真参照）。図のタイトルは訳者（以下同じ）。

ピンク　同性愛者
紫　　エホバの証人

アーリア人の囚人とは異なり，ユダヤ人の囚人が着用する三角形（大半は赤色）には，さらに黄色い三角形が追加されて，［２枚の三角形で］ダビデの星ができあがるようになっている。

アウシュヴィッツの収容所の中には，軍需品を生産する受託工場[14]，クルップ社の工場，シーメンス社の工場がある。収容所の外には，数平方キロメートルに及ぶ巨大な工場（通称「ブナ」）[15] がある。囚人たちは，上記の工場で働いている。収容区内の囚人の居住区，と言ってよければの話だが，居住区は，２列に並んだ高さ約３㍍のコンクリート製の柱で囲まれた約 500㍍×約 300㍍の区画の中にあった［図 1-1］。その（内側と外側の両

（14）Deutscher Aufrustungswerk (DAW).

（15）Buna の語源は Butadien と Natrium で，意味は「合成ゴム」。アウシュヴィッツ基幹収容所（アウシュヴィッツ第１収容所）から約５㌔の距離にあるモノヴィッツ収容所（アウシュヴィッツ第３収容所）には，I. G. ファルベン社の合成ゴム（Buna）の製造工場があった。この工場は「ブナ」あるいは「ブナ工場」と言われたが，モノヴィッツ収容所を総称して「ブナ」「ブナ工場」と言われることも珍しくない。筆者は “BUNA” あるいは “BUNA factory” と書いているが，以下では「ブナ」とする。

方の）柱には碍子(がいし)が取り付けられていて，高圧電流の流れる電線が狭い間隔で張られている。この２列に並んだ柱［電柵］の間には，150㍍間隔で，機関銃と探照灯(サーチライト)を装備した高さ５㍍の監視塔がある。内側の電柵の手前には，さらに普通の金網のフェンスがある。このフェンスに近づくだけで，監視塔から弾丸が飛んでくる。［監視塔を結んだ］この［内側の］規制線のことを「小哨鎖線あるいは内部哨鎖線」(16) と言う。［基幹］収容所には，バラックが３列に並んでいた。１列目と２列目のバラックの間には道路があり，２列目と３列目の間には壁があった。1942 年３月と４月にスロバキアから強制移送された 7000 人強のユダヤ人女性が，1942 年８月中旬までこの壁で仕切られたバラックに住んでいた。この女性たちがビルケナウに移された後，２列目と３列目のバラックの間にあった壁が撤去された。収容所の入口に通ずる道路が建物の間を縦横に走り，いつも厳重に警備されたそのゲートの上には「働けば自由になる」という皮肉な文言が架けられてある。

収容所から 2000㍍ほど離れた所に，「大哨鎖線あるいは外部哨鎖線」(17) という２番目の［外側の］規制線があり，150㍍ごとに監視塔がある。内部哨鎖線と外部哨鎖線の間には工場や作業場がある。内部哨鎖線上にある監視塔に看守が配置されるのは，夜間，２列の電柵に設置した電線に高圧電流を流すときのみである。日中は，内部哨鎖線の監視塔は無人になり，外部哨鎖線の監視塔に看守が配置される。この監視塔を越えて，何度も脱走が試みられているが，事実上不可能である。夜間に内部哨鎖線を超えることもまったく不可能であり，外部哨鎖線の監視塔の間隔は狭く（監視塔は 150㍍ごとに１棟，換言すれば監視塔は半径 75㍍の円弧にあって），気づかれずに接近することは論外である。警備兵は警告なしに発砲する。薄暮には，外部哨鎖線に配備された守備隊は帰隊することになっているが，すべての囚人が内部哨鎖線の中にいることが確認された後でなければ帰隊しない。点呼によって，囚人が一人でも欠けていることが発覚すれば，ただちにサイレンが鳴り警報が発せられる。

外部哨鎖線の看守は，監視塔に残って監視を続け，内部哨鎖線には看守が配置される。親衛隊の看守数百人と軍用犬が組織的な捜索を開始する。サイレンの音で周囲の全域が警戒態勢に入るために，奇跡的に逃亡者が外部哨鎖線を越えることができたとしても，多数のドイツの警察官か親衛隊の捜索隊のいずれかに逮捕されることは，ほぼ確実である。さらに脱走者には逃亡に不利な点がある。それは，刈り上げられた頭，縞模様の囚人服，着衣に縫い付けた赤い三角形，お上にたいする地域住民の完全な服従である。囚人を助けることは言うに及ばず，その所在を知らせなかっただけで，死刑である。すぐに囚人が逮捕されない場合には，外部哨鎖線の監視塔にいる守備隊が昼夜３日間，監視を続けた後，囚人は二重の規制線を突破したと推測される。翌日の夜，外部哨鎖線の看守は帰隊する。脱走者が生きて逮捕されたときは，収容者全員の前で絞首刑にされる。しかし，死んで発見された場合には，その遺体がどこにあったとしても，収容所に運び込まれ（入れ墨の番号で遺体が誰かは簡単に特定できる），「ここにいます」という小さなプラカードを両手に持たせて入口のゲートに座らされる。我々が収容されていた２年間で，囚人は何度も脱走を試みたが，２，３人を除いては，全員が生死を問わず連れ戻された。２，３人の脱走者は逮捕されなかったが，首尾よく逃亡できたかどうかは分からない。スロバキアから，アウシュヴィッツあるいはビルケナウに強制移送されたユダヤ人の中で，我々２人だけが運良

(16) the small or inner chain of sentry posts.
(17) the big or outer chain of sentry posts.

く助かったことは断言できる。

すでに述べたように，我々は到着した日にアウシュヴィッツからビルケナウに移動した。

現実には，ビルケナウという地名の地域は存在していない。ビルケナウという地名は，その近くにある「白樺の森」（ブジェジンカ）[18] から「借りた」造語である。現在ビルケナウと呼ばれている地域のことを，地元の人は「ライスコ」[19] と言っている。ビルケナウの収容所は，アウシュヴィッツから４キロメートルの所にある［図 1-2］。ビルケナウの外部監視区域とアウシュヴィッツの外部監視区域の間には，鉄道線路があり，それが隣接する２つの監視区域を分けている［第２報告文書（図 2-1）参照］。ノイベルンはおそらく 30キロメートル～40キロメートルの所にあると思われるが，そこについては何も知らない。奇妙なことに，その地名をビルケナウの郵便区として記載することになっている[20]。

ビルケナウに到着したころ，１万 5000 人のための巨大な厨房と３棟の石造りの建物があった。そのうちの２棟が完成し，１棟は建設中であって，普通の［通電されていない］有刺鉄線のフェンスで囲まれていた。囚人は，すでに完成していた２棟と，後から完成した建物に収容された。すべての建物は，標準的なモデルの通りに建築されている。その長さは約 30メートル，幅が８メートル～10メートルで，壁の高さは２メートルを超えないが，屋根は不釣り合いなほどに高く，その高さは５メートルくらいある。大きな屋根裏部屋がある馬小屋と言ったところか。天井板がないため，部屋の中心の高さは７メートルにも見える。尖った屋根が四方の壁に乗っているのだ。室内は，中央部を縦に走るパーティションで２つに仕切られ，その２つの部分を行き来できるように間が開いている。両側の壁と中央のパーティションに沿って，上下の間隔が 80センチメートルほどの２段になった平行な床板が張られている。そして，その床板には垂直の仕切りがあって小さな区画［寝棚］に分けられている。したがって，バラックには，土間の床と側壁に設置された２つの床，合計３段の床があることになる。通常，１つの寝棚は３人が使用する。寸法から見て取れるように，寝棚は，男性が体を伸ばして寝るには狭すぎるし，座ると頭が支（つか）えてしまう［付図２］。背伸びできる場所などあろうはずがない。このようにして，「ブロック」[21] と呼ばれる家には，400 人～500 人が収容されている。

現在のビルケナウ収容所は約 1600メートル×約 500メートルの広さで，アウシュヴィッツと同様に，監視塔を配置したいわゆる小哨鎖線あるいは内部哨鎖線で囲まれている。すでに使われている収容所にさらに広い敷地を追加造成するための作業が，目下，進められている。この大がかりな計画の目的は，我々には分からない。

ビルケナウでも，アウシュヴィッツと同様の監視体制が敷かれ，半径２キロメートルの所にもう一本の哨鎖線［大哨鎖線あるいは外部哨鎖線］が引かれている。

（18）Brzezinka. Birke(n) は白樺，Au(e) は草地，泥炭地の謂。

（19）Rajsko.

（20）ビルケナウ収容所の住所表記は，“Birkenau bei Neuberun” と定められていたことになる。このような表記が実際に使用されていたことについては以下を参照。ビルケナウ「労働」収容所から Zdenka Windt（1897 年 11 月 29 日生）がプラハの Rudolf Löwy に宛てた葉書が，2022 年 3 月 13 日にアメリカでオークションに出品された。切手はないが，出品側の説明では，1943 年に投函されたとのことである。この葉書の差出人欄には次のように手書きで記載されている。“Windt Zdenka geb. 29. XI. 1897 Arbeitslager *Birkenau bei Neuberun* Oberschlesien” (https://www.lot-art.com/auction-lots/Ultra-Rare-Postcard-by-Inmate-in-Birkenau-Arbeitslager/216-ultra_rare-13.3.22-valkyrie, accessed on March 26, 2022). イタリック体は引用者による。

（21）バラックとも。

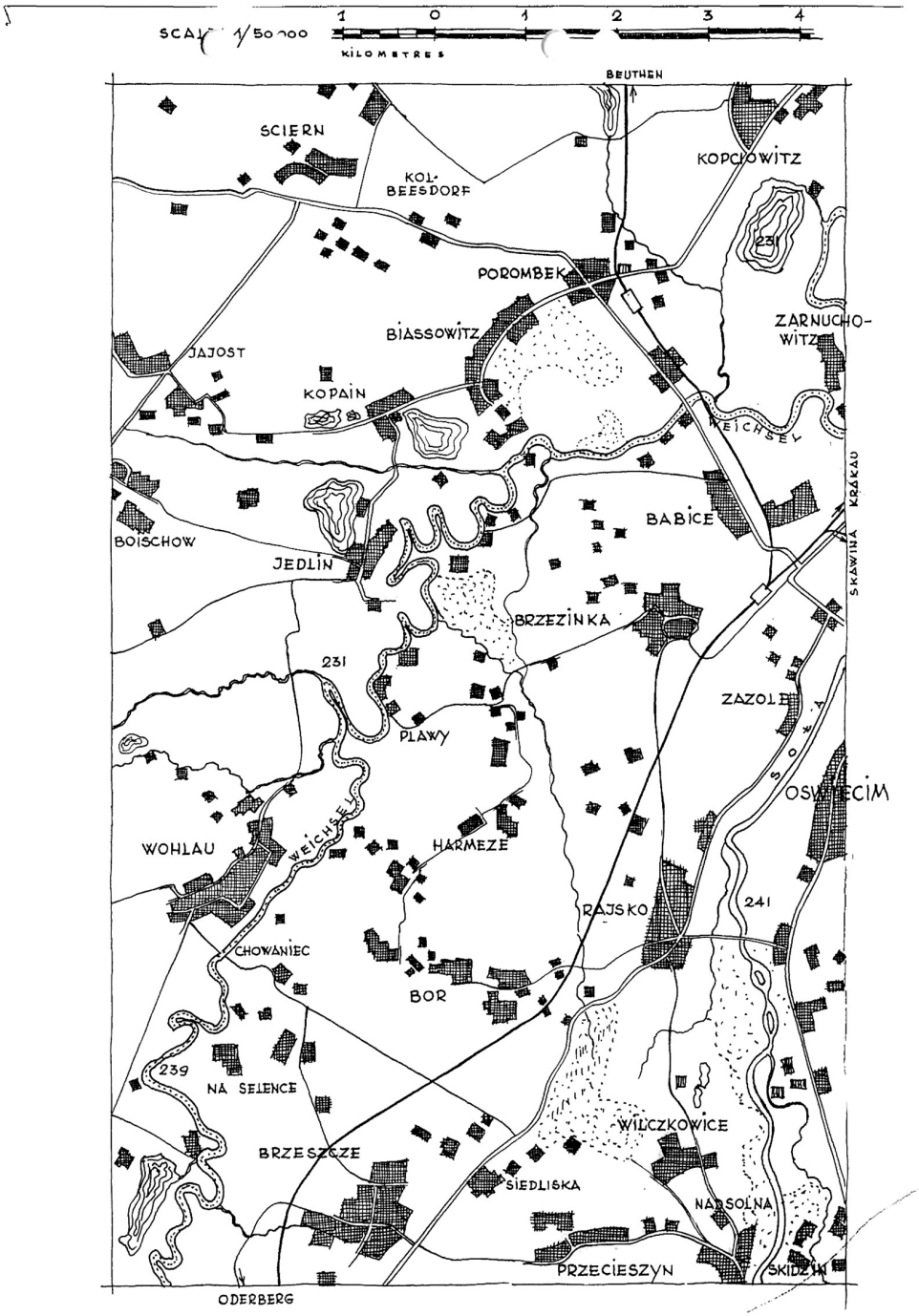


図 1-2　ビルケナウ収容所と付属施設

（訳注）スケールはキロメートル。中央部に Brzezinka（ブジェジンカ［白樺の森］），Oświęcim（オシフィエンチム［アウシュヴィッツ］），Rajsko（ライスコ［ビルケナウ］），Harmęże（ハルメンジェ）の文字が読める。

我々が到着したときには，すでに建物が建っていた。1941 年 12 月に連行された 1 万 2000 人のロシア軍の捕虜が建てたものである。厳冬の中を，彼らは非人間的な環境で働かなければならず，その結果，厨房で働く少数を除いて，ほとんどが野晒しのまま死亡した。ロシア軍捕虜は，先に述べた収容所の通常の番号制度とは無関係に，1 番～12,000 番の番号が付与された。ロシア人捕虜を乗せた移送列車が到着するたびに，彼らにはアウシュヴィッツの囚人番号ではなく，1 番～12,000 番の中ですでに死亡したロシア人の番号が与えられた。したがって，ロシア人捕虜に分類される囚人が，どれだけ収容所を通過したかは，推定することが難しい。どうやら，通常の捕虜収容所からロシア人が移送されたのは，懲戒のためのようだ。生き残ったロシア人たちは，極度の物不足の中で放置され，わずかながらも寒さや雨をしのぐすべがなく，未完成の建物に収容されて「集団」死した。何百，何千もの死体が，土中浅く埋められ，悪臭を放っていた。後になって，我々はその死体を掘り起こして焼却しなければならなかった。

我々がアウシュヴィッツに到着する一週間前に，ユダヤ人の第一陣が収容所に到着した。フランスに帰化したパリからのユダヤ人 1320 人である（女性は別に扱われ，男性の番号と同じ番号が与えられた）。彼らの番号は 27,500 番から始まった（スロバキア人の女性は 1 番から 8,000 番までの通し番号が与えられた）。このフランス人グループが到着してから我々の移送列車が到着するまでの間で，アウシュヴィッツに到着した者がいないことは明らかである。すでに指摘したように，我々は 28,600 番から始まっているからである。ひどい条件の中でもフランスのユダヤ人 700 人が生存していたが，600 人は到着後 1 週間以内に死亡した。

完成した 3 棟への収容者は，次のように分類される。

① いわゆる「顔役」[22]：常習の刑法犯と年配のポーランド人政治犯。収容所の運営を担当。
② 生き残ったフランスのユダヤ人約 700 人。
③ スロバキア生まれのユダヤ人 643 人。ズワルドンに残されたユダヤ人が，数日後，これに加えられた。
④ まだ生きていて，未完成の建物に収容されたり，野外に放置されたりしたロシア人。グループとはみなしがたいほどに，その数は急速に減少した。

スロバキアのユダヤ人はロシア人捕虜と一緒に建物の建設に従事し，フランスのユダヤ人は骨の折れる雑用をしなければならなかった。3 日後，私は，スロバキアのユダヤ人 200 人と一緒に，アウシュヴィッツのドイツ軍需工場［DAW］で働くよう命じられたが，我々の宿割は引き続きビルケナウのバラックであった。早朝に出発し，夜に戻り，木工工房や道路建設現場で働いた。食事は，昼にカブのスープ 1 ㍑，夕方には粗悪なパン 300㌘が出た。飢えているのと喉が通らないほどまずい食べ物のせいで衰弱した我々には，労働環境は想像を絶するほど厳しく，大方は，それに耐えることができなかった。死亡率も高く，200 人からなる我々の作業班では毎日 30 人～35 人が死んだ。その多くは，仕事中に「カポ」[23] と言われる監督たちに，理由なく撲殺された。死亡によって作業班に空きができれば，毎日ビルケナウの囚人でその穴を埋めた。夜になって，バラックに戻るときは，とてもつらくて危険が伴った。なにせ 5 ㌔の道のりを，道具，薪，重い大釜を運び，日中に死んだり殺されたりした人の遺体を連れ

（22）prominencia.
（23）Capo. 作業班の監督。語源はイタリア語の “capo”（頭（かしら）の謂）。

て帰らなければならなかったからである。これらの重い荷物を担いで，我々は早足で歩かなければならず，カポの機嫌を損ねてしまえば，殴り殺されないまでも，手ひどく張り飛ばされた。14 日後にスロバキア人の第 2 陣が到着したときには，最初のころの作業班は 150 人に減っていた。夜になると，人数を数えられた。遺体は，トロッコやトラックに積まれ，「白樺の森」（ブジェジンカ）に運ばれ，深さ数㍍，長さ 15㍍ほどの穴の中で焼却された。毎日，作業に出る途中に，近くで畑仕事をしているスロバキア出身のユダヤ人女性 300 人からなる作業班を見かけた。彼女たちは，ボロボロになった古いロシア軍の軍服を着て，木靴を履き，頭は刈られていた。残念ながら，彼女たちと話をすることはできなかった。

1942 年 5 月中旬までに全部で 4 本の移送列車で，ユダヤ人男性がスロバキアからビルケナウに到着したが，いずれも処遇は我々と同じだった。

第 1 次と第 2 次の移送列車で到着した者の中から（私を含めて）120 人が選別され，アウシュヴィッツの収容所の管理部門に配属された。医師，歯科医師，知識人，事務員が必要とされたのである。このグループは，スロバキアのユダヤ人 90 人とフランスのユダヤ人 30 人で構成されていた。私には，ビルケナウでは 50 人の部下がいて，それなりに良い思いをしていたので，最初はアウシュヴィッツ行きをためらった。しかし，最終的には説得された。8 日後，この 120 人の知識人の中から，医師とその補助員合わせて 18 人，そしてその他に 3 人が選ばれた。医師はアウシュヴィッツの「診療所」とか「病院」とか言われる所で働くことになったが，我々 3 人はビルケナウに送り返された。私の 2 人の仲間，Trnava 出身の Ladislav Braun と Vrbové (?) 出身の Gross（いずれも死亡）はスロバキア人のブロックに送られた[24]。私はフランス人の収容区で「個人データ」の整理と「病人の看護」に従事するように命じられた。残りの囚人 99 人は，砂利採取場の作業で，全員がほどなく死亡した。

その後まもなく，いわゆる「診療所」（病舎）が設置された。そこは，そら恐ろしい恐怖の「7 号棟」となるように定められていた。私は，主任を振り出しに，後には事務長になった。この「医務室」の責任者は，ポーランド人の Viktor Mordarki で，囚人番号は 3550 番である。実は，この建物は，死刑予備軍の雑居房にほかならなかった。労働不能になったすべての囚人がここに送られてきた。医療や介護は及びもよらなかった。毎日 150 人ほどの死者が出た。その死体は，焼却のためにアウシュヴィッツに送られた。

いわゆる「選別」も導入された。毎週 2 回，月曜日と木曜日に，収容所医官がガス殺して焼却する囚人の人数を提示した。「選別」された者はトラックに積まれ，「白樺の森」に運ばれた。到着してもまだ生きている者は，死体焼却溝の近くに建っている大きなバラックでガス殺された。「7 号棟」から死亡のために「間引きされた者」は 1 週間あたり約 2000 人，そのうちの 1200 人が「自然死」，約 800 人が「選別」による死亡である。「選別」されなかった死亡者[25]には，死亡証明書が発行され，オラニエンブルクにある中央管理局［ベルリンの北西約 30㌔］に送られたが，「選別」された死亡者は，“S. B.”[26]（特別措置）というタイトルの特別な登録簿に記載された。1943 年 1 月 15 日まで，私は「7 号棟」の事務長であったから，状況を直接観察できる立場にあった。約 5 万人の囚人が「自然死」または「選別」によって死亡し

(24) 以下，とくに断らない限り，人名と地名は原語を表記する。
(25) 傍点による強調は原文による。以下同じ。
(26) Sonderbehandelt.

た。前述したように，囚人には連番が振られていたので，入所した順番と，移送列車で到着した人々の運命は，到着ごとにかなり詳細に再現することができる。

ビルケナウ行きの移送列車で，アウシュヴィッツに到着した最初のユダヤ人男性は，前述のように，フランスに帰化したユダヤ人1320名である。おおむね，その囚人番号は，

27,400-28,600

である[27]。

28,600-29,600　1942年4月。スロバキアのユダヤ人の第1次移送（我々の移送列車）

29,600-29,700　様々な強制収容所からの男性（アーリア人）100人。

29,700-32,700　スロバキアのユダヤ人を乗せた3本の移送列車。

32,700-33,100　ワルシャワにある数ヶ所の刑務所からの常習刑法犯（アーリア人）400人。

33,100-35,000　クラクフからのユダヤ人1900人。

35,000-36,000　ポーランド人政治犯（アーリア人）1000人。

36,000-37,300　1942年5月，ルブリン＝マイダネクから移送されたスロバキアのユダヤ人1300人。

37,300-37,900　Radomから移送されたポーランド人600人（アーリア人，ただし，若干名のユダヤ人を含む）

37,900-38,000　Dachau強制収容所［ミュンヘン近郊］から移送されたポーランド人100人。

38,000-38,400　家族同伴で到着したフランスに帰化したユダヤ人400人。

このとき移送された者は全部で約1600人いた。そのうち女性約200人[28]と男性400人が収容所に収容されたが，残りの1000人（女性，老人，子ども，男性）は，手続きなしで側線から直接「白樺の森」に連れて行かれ，そこでガス殺されて焼却された。これ以降，連行されたすべてのユダヤ人が同様に処理された。収容所に収容されたのは，男性約10%，女性約5％であり，残りは到着直後にガスで殺された。これまでにも，この殺害方法は，ポーランドのユダヤ人たちに適用されていた。何ヶ月にも亘って，トラックは絶え間なく，各地のゲットーから何千人ものユダヤ人を「白樺の森」の穴に運んだ。

38,400-39,200　フランスに帰化したユダヤ人800人。前述の通り，収容されなかった者はガス殺された。

39,200-40,000　ポーランド人政治犯（アーリア人）800人。

40,000-40,150　スロバキアのユダヤ人150人（家族同伴）。女性収容区に送られた女性50人を除き，全員が「白樺の森」でガス殺された。収容所に来た

（27）これ以降，付与した囚人番号別に人数，出身地，性別などが記載される。なお，傍点による強調は原文に従う（以下同じ）。

（28）このとき，女性には囚人番号が付与されなかったのか。40,000-40,150および48,300-48,630の叙述を参照。

150 人の男性の中には，Zucker(洗礼名不明)と Sonneschein および Viliam（後 2 人は東スロバキア出身）がいた。

40,150-43,800　フランスに帰化したユダヤ人約 4000 人は，ほとんどが知識人であった。そのうちの女性 1000 人は女性収容区に収容され，残りの約 3000 人はいつもの通りガス殺された。

43,800-44,200　ルブリンから移送されたスロバキアのユダヤ人 400 人（この中には東スロバキア出身の Matej Klein と Meiloch Laufer（囚人番号 43820 番）がいた)。この移送列車の到着は 1942 年 6 月 30 日。

44,200-45,000　スロバキアのユダヤ人 200 人。移送列車には 1000 人が乗っていた。多くの女性は女性収容区に送られ，残りは「白樺の森」でガス殺された。収容区に送られた囚人の中には，次のような者がいた。Jozef Zelmanovic（Snina 出身），Adolf Kahan（Bratislava 出身），Walter Reichmann（Sucany 出身），Esther Kahan（Bratislava 出身)。最後の Esther Kahan とは 1944 年 4 月 30 日に話をする機会があった。彼女は女性収容区の「ブロック長」である。

45,000-47,000　共産主義者，その他の政治犯などのフランス人（アーリア人）2000 人。Maurice Thorez の弟[Georges]と Leon Blum の弟[René]がいた。Blum の弟は非道な拷問の後，ガス殺された。

47,000-47,500　オランダからのユダヤ人 500 人（大多数はドイツからの移民)。残りの移送者約 2500 人はガス殺された。

47,500-47,800　いわゆる保護拘束中のロシア人約 300 人。

48,300-48,630　スロバキアから移送されたユダヤ人 320 人。女性約 70 人は女性収容区に移送され，残りの約 650 人は「白樺の森」でガス殺された。この移送列車には，ハンガリー警察がセレッジ収容所に身柄を送検した約 80 人が乗っていた。この移送列車には，次のような人物がいた。Zoltan Mandel（故人），Holz（洗礼名不明，Piestany 出身の肉屋，後にワルシャワに移送），Miklos Engel（Zylnia 出身），Chaim Katz（Snina 出身，現在「死体置き場」で作業，妻と 6 人の子どもはガス殺)。

49,000-64,800　フランス，ベルギー，オランダに帰化したユダヤ人 1 万 5000 人。この数字が移送者全体の 10%に満たないことは確実である。この移送列車の到着は 1942 年 7 月 1 日から 9 月 15 日までの間である。ヨーロッパの様々な国から家族を同伴して大編成の移送列車が到着し，「白樺の森」に直行した。ガス殺と死体焼却のための特別部隊（「ゾンダーコマンド」）が，昼夜交代で働いた。こ

の期間，何十万人ものユダヤ人がガス殺された。

64,800-65,000　スロバキアのユダヤ人 200 人。移送された者のうち，女性約 100 人が収容所に収容されたが，残りはガス殺の後，焼却された。新規到着者の中には，次のような人物がいた。Ludwig Katz（Zilina 出身），Avri Burger（Bratislava 出身），Poprad（妻死亡），Mikulas Steiner（Povazska Bystrica 出身），Juraj Fried（Trencin 出身），Buchwald, Josef Rosenwasser（東スロバキア出身），Julius Neuman（Bardejov 出身），Sandor Wertheimer（Vrbove 出身），Misi Wertheimer（Vrbove 出身），Bela Blau（Zilina 出身）。

65,000-68,000　フランス，ベルギー，オランダに帰化したユダヤ人。1000 人を超えない女性が「選別」されて，収容所に収容された。その他は，少なく見積もっても３万人がガス殺された。

71,000-80,000　フランス，ベルギー，オランダに帰化したユダヤ人。収容所に連行された囚人は，移送された者の 10％に満たない。控えめに見ても，約６万 5000 人～約７万人がガス殺されたと言えよう。

1942 年 12 月 17 日，スロバキアのユダヤ人青年 200 人が，いわゆるゾンダーコマンドとして死刑囚のガス殺と死体の焼却に従事した後，ビルケナウで殺害された。彼らは，蜂起と逃亡を計画したかどで，処刑された。あるユダヤ人が計画を通報したためである。この恐るべき事業［蜂起と逃亡］を遂行しようとしたのは，マクフ・マゾビエツキ(29)［ワルシャワの北約 80キロメートル］から収容所に到着したばかりのポーランドのユダヤ人グループ（200 人）であった。処刑された者の中には，Alexander Weiss, Fero Wagner, Oscar Schneider, Dezider Wetzler, Aladar Spitzer, and Vojtech Weiss がいた（全員 Trnava 出身）。

こうして，ゾンダーコマンドが入れ替わってしまったために，貴重なコネを奪われ，「私的物資」にもすぐに悪影響が出た。アウシュヴィッツではすべての携行品が没収されたにもかかわらず，「死ぬ定めにあった移送者」は，かなりの額の外貨（とくに紙幣と金貨），大量の金製宝飾品と宝石，そして食料品を持ち込んでいた。

当然貴重品は届け出なければならないが，死者の衣服をあさって見つけた物品（とくに金貨）が，我が少年のポケットに入るのは，いかんともなし難かった。こうして，食料はもちろんのこと，かなりのブツが収容所に持ち込まれることになった。建前上は収容所内でこのお金で買えるものは何もなかったが，食料やタバコを持ち込む機会があった親衛隊の看守とか，収容所内の様々な作業の専門家として雇われた民間労働者には，かなりの「取引」が可能であった。モノの値段が異常な状況との関係で決まったことは，もちろんである。数百本のタバコの値が 20 ドル金貨１枚である。物々交換も盛んである。我々には十分お金があるので，物価が上がっても，どうということはない。ゾンダーコマンドの手を介して，ボロ布同然の衣服を脱いで，ガス殺された人が着ていた，よりましな衣服と交換することもできた。私が今も着ているコートは，オランダのユダヤ人のもので，内ポケットの上にはアムステルダムの仕立屋の

(29) Maków Mazowiecki.

ラベルが縫い付けられている。

ゾンダーコマンドは，一般の収容者とは別の所に収容されていた。彼らにはすさまじい臭いが染みついていて，接触する収容者はほとんどいなかった。その上，彼らは，きまって不潔で，衣食にも事を欠き，野獣に似てとても残忍で冷酷だった。彼らが同胞を殺し合うのは，珍しいことではない。大事件なのに，「××番死亡」と記録されるだけである。

Jossel という名のポーランドのユダヤ人青年が，親衛隊の看守の前でユダヤ人を「科学的」に殺すのを目撃したことがある。武器を使わず，素手だけで被害者を殴り殺したのである。

80,000 番から，ポーランドのゲットーに集住させられた者の組織的な絶滅が始まっている。

80,000-85,000　Mljawa，Makow，Zichenow，Lomza，Grodno，Bialystok のゲットーから来たユダヤ人約 5000 人。

30 日間，移送のトラック便が途切れずに到着した。強制収容所に送られたのは 5000 人だけで，他の者はすべてただちにガス殺された。ゾンダーコマンドは 1 日 2 交代で，24 時間作業したにもかかわらず，数が多すぎてガス殺と死体焼却はほとんど対処不可能であった。このときに移送された者のうち，約 8 万人〜約 9 万人が「特別措置」を受けた。これは誇張ではない。このとき移送された人々もまた，かなりの量のお金，貴重品，宝石を携行していた。

85,000-92,600　Grodno，Bialostok，Cracow のユダヤ人 6000 人，およびポーランド人（アーリア人）1000 人。移送された大部分のユダヤ人はただちにガス殺された。毎日約 4000 人のユダヤ人がガス室へと駆り立てられた。

1943 年 1 月中旬，テレジエンシュタットから，3 回に分けて，それぞれ 2000 人ずつが到着した。彼らには “CU”，“CR”，“R” という記号が付けられていた（これらの記号の意味は不明）。この記号はトランクにも付いていた。この 6000 人のうち，収容所に収容されたのは，男性 600 人と女性 300 人だけである。残りの 5100 人はガス殺された。

99,000-100,000　1943 年 1 月末，大編成の移送列車でフランスとオランダのユダヤ人が到着した。収容所に収容されたのは，そのごく一部に過ぎない。

100,000-102,000　1943 年 2 月，知識人を中心としたポーランド人（アーリア人）2000 人。

102,000-103,000　チェコ人（アーリア人）700 人。後に，生存者は Buchenwald に移送された。

103,000-108,000　フランスとオランダのユダヤ人 3000 人，およびポーランド人（アーリア人）2000 人。

1943 年 2 月の 1 ヶ月間，毎日 2 本の移送列車が到着した。ポーランド，フランス，オランダのユダヤ人が乗ってきた。彼ら

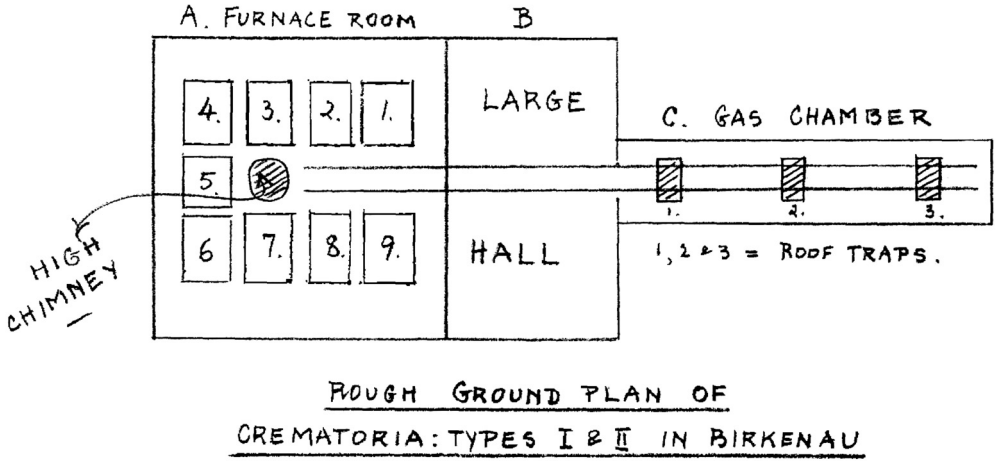


図 1-3　ビルケナウにおける第１死体焼却場と第２死体焼却場の見取り図

（訳注）死体焼却場は，炉室（A），脱衣室（B），ガス室（C）の３つからなっているという概略を示している。この見取り図は細部まで正確とは言いがたい。詳しくは，Debórah Dwork and Robert Jan Van Pelt, *Auschwitz*, Revised and Updated, New York and London, W. W. Norton & Company, 2008, p. 270 を参照。なお，同書（pp. 342ff.）にはこの図 1-3 についての言及が見られる。

のほとんどはガス室に送られた。この月にガス殺された人数は９万人と推定される。

1943 年２月末，ビルケナウに新しい近代的な死体焼却場とガス処理施設が竣工した。「白樺の森」でのガス殺と死体焼却が中止され，すべての仕事は，特設された４ヶ所の死体焼却場で行われることになった。大きな死体焼却溝が埋め戻され，更地になり，以前と同様に遺灰は，ハルメンジエの農場（労働収容所）の肥料になった。そのため，今となっては，当地で起こった恐ろしい大量殺人の痕跡を見つけることは，ほとんど不可能である。

現在，ビルケナウでは４ヶ所で死体焼却場が稼動している。第１死体焼却場と第２死体焼却場は大規模で，第３と第４は小規模である。第１死体焼却場と第２死体焼却場は，炉室（A），大ホール（B），ガス室（C）の３つの部分で構成されている［図 1-3］。炉室には巨大な煙突があり，その周囲には９つの焼却炉があって，それぞれ炉には開口部が４つずつある。一つの開口部には，普通の［成人の］死体を一度に３体ずつ投入することができ，１時間半後には完全に焼却される。１日に約 2000 体が処理される計算になる。炉室の隣には大きな「レセプション・ホール」があり，印象としては，入浴施設の控えの間のように見える。この部屋には，2000 人が収容できて，下の階にも同じような待合室があるらしい[30]。この［待合室みたいな］部屋のドアを抜けて，階段を数段降りると，とても細長いガス室がある。この部屋の壁には，犠牲者を惑わすために，入り口の壁が偽装され，シャワー室と書かれている。ガス室の屋根には３本の筒［ダクト］が突き出ていて，外側から密閉されている。ガス室から炉室に

(30) より正確には，死体焼却場の建屋には，地下に脱衣場とガス室があり（２つの部屋はＬ字をなす），ガス殺された死体はエレベータで炉室のある上階（１階）に運搬される。そこから，炉前に運ばれる。

向かうダクトがある。ガス殺は次のように行なわれる。ホール（B）に連れてこられた気の毒な犠牲者は，そこで，服を脱ぐように指示される。これから入浴するという真っ赤な嘘を仕上げるために，白衣の男 2 人が各人にタオルと小さな石鹸を配る。そして，当然ながら立錐の余地がないほど，ガス室（C）に押し込める。狭い空間にこの群衆を入れるために，しばしば発砲して，奥にいる者どうしが体をさらに密着するようにさせる。全員が中に入ると，重い扉が閉じられる。そして，短時間，待つ。［ガス室の］室温を一定温度まで上げるためと考えられる。その後，ガスマスクを装着した親衛隊員が屋根に登り，ダクトを開けて，「チクロン」「害虫駆除用」のラベルを貼ったブリキ缶から，ハンブルクにあるコンツェルン製の粉末状製剤を振り注ぐ。これは，ある温度で気化する青酸化合物だと推測される。3 分後には，室内にいた全員が死亡する。この試練を生き延びた者はいない。（しかし，「白樺の森」で採られた原始的な処置の後には，生命の痕跡［虫の息の犠牲者］を発見することは，さほど珍しくはなかった。）その後，室内が開放され，空気が入れられて，ゾンダーコマンドが台車に載せた遺体を炉室に運ぶ。第 3 死体焼却場と第 4 死体焼却場もほとんど同じ原理で稼働しているが，処理能力は半分にすぎない。以上，ビルケナウにある 4 ヶ所の死体焼却とガス殺の処理施設の処理能力を合わせれば，1 日当たり約 6000 人に上る。

アーリア人は通常，銃殺という「特別扱い」を受けるので，ガス殺はめったにない。死体焼却場が稼働する前は「白樺の森」で射殺し，死体は長い焼却溝で焼却された。しかし，死体焼却場が竣工してからは，アーリア人のための特別な施設を設置した死体焼却場の大ホールで処刑が行なわれた。

1943 年 3 月，初めての死体焼却場が落成したときの式典には，ベルリンから著名な来賓が出席した。そのときの「式次第」には，クラクフのユダヤ人 8000 人のガス殺および焼却，とあった。将校と民間人の来賓は，その結果にすこぶる満足した。ガス室の扉に組み込まれた特殊な覗き穴が，常時，使用されていた。来賓は，この新設の設備を惜しみなく褒めたたえた。

＊

＊　＊

109,000-119,000　1943 年 3 月初め，ユダヤ人 4 万 5000 人が Salonika[31] から到着した。そのうちの 1 万人（ごく少数の女性を含む）が収容所に収容されたが，約 3 万人はそのまま死体焼却施設に向かった。収容された 1 万人のうち，ほぼ全員がマラリアのような伝染性疾患でほどなく死亡した。収容所の環境のせいでチフスに罹患して死亡した者もいた。

ユダヤ人のマラリアとチフスが他の囚人にも蔓延したために，「選別」は一時中断された。感染したギリシアのユダヤ人は，我々が再三警告したにもかかわらず，命令に従ってしまい，その多くが出頭した。医療班の伍長は，収監されていたチェコ人医師を使って，ギリシアのユダヤ人の心臓部にフェノールを注射させ，彼らを殺害した。このとき，チェコ人医師（Dr. Honsa Cespira（プラハ出身，元ブーヘンヴァルト収容所）と Dr. Zdenik Stich（同じくブーヘンヴァルトから。プラハ出身）はできる限りを尽くして，犠牲者の苦痛軽減に努めた。

（31）Thessaloniki とも。ギリシア最大のユダヤ人コミュニティがあった。

ギリシアのユダヤ人１万人のうち，生き残ったのは約 1000 人である。その後 500 人のユダヤ人と一緒にワルシャワに移送され，要塞建設の作業に当たった。数週間経った頃，見るも無惨な姿で数百人が戻って来たが，ただちにガス殺された。他のユダヤ人はワルシャワで死亡したものと思われる。フェノール注射が中止された後，マラリアに罹患したギリシアのユダヤ人 400 人は，「さらなる治療」のためにルブリンに移送された。彼らは，実際に到着したとのことである。彼らの運命は我々には分からないが，始めにいた１万人のユダヤ人のうち，収容所で生き残った者は，一人もいないのは当然と思われる。

「選別」が中止された。それと同時に，囚人の殺害も禁止された。ドイツ帝国の市民権をもち犯罪を生業（なりわい）とする著名な人殺し（Alexander Neumann, Zimmer, Albert Haemmerle, Rudi Osteringer, Rudi Bechert）と政治犯（Alfred Kien, Aloïs Stahler）が，殺人を重ねたかどで咎められ，書面で「囚人××人を殺した」と供述しなければならなくなった。

1943 年の始め，アウシュヴィッツの政治部［収容所のゲシュタポ］には釈放証明書 50 万通が届き，喜びを隠しきれない我々は，少なくとも何人かは釈放されるだろうと考えていた。しかし，それはガス殺された人々の名前を記入しただけの書類で，書庫に保管されたきりになった。

119,000–120,000　ワルシャワのパヴィヤク刑務所[32] からのポーランド人（アーリア人）1000 人。

120,000–123,000　ギリシアのユダヤ人 3000 人。その一部はワルシャワで死亡した同胞の補充として移送された。その他はただちに死亡。

123,000–124,000　Radom と Tarnow からのポーランド人（アーリア人）1000 人。

124,000–126,000　各所から混載されて到着したアーリア人 2000 人。

この間にも，ポーランドおよびフランスとベルギーのユダヤ人（後二者は少数）を乗せた移送列車が絶え間なく到着し，例外なくガス室に送られた。その中には，マイダネクからポーランドのユダヤ人 1000 人を乗せた移送列車があった。これには，スロバキア人３人（そのうちの１人は Stropkow か Vranov 出身の Spira とかいう人物）が乗っていた。

1943 年７月末，移送列車の流れが突然止まり，それ以降は短いながらも空白があった。死体焼却場が徹底的に清掃され，次の使用のために設備が修理された。８月３日，殺人マシンが再稼働した。最初の移送列車には Benzburg と Sosnowitz からのユダヤ人が乗っていた。その後，移送列車の到着は８月いっぱい続いた。

132,000–136,000　収容所に収容されたのは，わずかに男性 4000 人とごく少数の女性だけであった。３万 5000 人以上がガス殺された。前述の 4000 人のうちの多くが，劣悪な処遇，飢餓，疾病のた

（32）Pawiak. 第２次世界大戦中に反体制者などを収監した刑務所で，約 10 万人がここを通過したとされる（うち約３万 7000 人が射殺，約６万人が強制労働収容所などで強制労働を強いられた）。1944 年８月 21 日，ドイツ軍によって爆破され，現在はその跡地に博物館が建設されている。パヴィヤク刑務所博物館（Muzeum Więzienia Pawiak, Pawiak Prison Museum）のサイトは以下のとおり。https://warsawtour.pl/en/pawiak-prison-museum/, accessed on April 23, 2022.

めに死亡したが，殺された者もいた。この悲劇の主犯は，ザクセンハウゼン強制収容所の刑法犯 Tyn（ドイツ帝国市民権所有）とポーランド人政治犯 Mieczislav Katerzinski（囚人番号 8516 番，ワルシャワ出身）である。

「選別」が再開された。今度はとくに女性収容区でものすごい勢いで実施された。収容所医官は親衛隊大尉で，ベルリン警察署長の息子か甥（氏名忘却）であり，誰よりも残忍な男だった。この男による選別は，我々が脱走するときにも，まだ続いていた。

137,000-138,000　8 月末には，パヴィヤック刑務所からのポーランド人 1000 人とギリシアからのユダヤ人 80 人が到着した。

138,000-141,000　各地からの移送列車でアーリア人 3000 人が到着。

142,000-145,000　1943 年 9 月初めに，ポーランドの労働収容所にいたユダヤ人とロシア軍捕虜，合わせて 3000 人が到着した。

148,000-152,000　1943 年 9 月 7 日から翌週にかけて，家族同伴のユダヤ人移送列車がテレジエンシュタットから到着した。彼らは，我々にはとうてい理解できないような極めて例外的な待遇を受けた。家族は離散せず，いつも「普通」に行われたガス処理を受けた者は誰一人としていなかった。頭髪は刈られることがなく，携行したトランクは保管され，別の収容区に男性，女性，子どもが一緒に収容された。男性は労働を強制されず，フレディ・ヒルシュ（プラハのマカビ）(33) の下で，子どもたちの学校も設立された。彼らは，自由に文通することが許されていた。彼らが受けなければならなかった最悪の事態はと言えば，Arno Böhm いう名の収容所の古株で常習の刑法犯（囚人番号 8 番）による虐待ぐらいであった。特別移送の公告に「特別措置- 6 ヶ月間の検疫付きのチェコのユダヤ人を移送」とあるのを見たときには，驚いた。

「特別措置」の意味はよく分かっていたが，それでも検疫期間が 6 ヶ月と長い上に，このグループが受けた全般的に配慮された取扱は理解することができなかった。それまでに見た検疫の中で一番長かったのは 3 週間だったからである。ところが，6 ヶ月が経過すると，我々は，このユダヤ人の運命が他の多くのユダヤ

(33) Fredy Hirsch. Makabi はユダヤ人スポーツ団体。

人と同様である，つまりガス室送りになると確信するに至った。我々は，そのグループ・リーダーと連絡を取って，彼らの立場や予想される事態を説明しようとした。彼らのうちの数人（とくに仲間から全幅の信頼を得ているフレディ・ヒルシュ）は，我々が恐れているとおりになったときには，抵抗を組織すると明言した。また，ゾンダーコマンドも運動への参加を誓っていた。彼らの中には，収容所での広範な蜂起を扇動しようと望む者もいたのである。1944 年３月６日，我々は，死体焼却場がチェコのユダヤ人のために準備されていることを耳にした。私は急いでこのことをフレディ・ヒルシュに伝え，チェコのユダヤ人には失うものが何もないので，ただちに行動を起こすよう頼んだ。彼の答えは，自分の任務は承知しているということであった。日暮れ前に，私は再びチェコ人の収容区に忍び込んだが，フレディ・ヒルシュはルミノールで服毒自殺を図り，瀕死の状態になっていた。その翌日，1944 年３月７日，意識不明となったヒルシュは，1943 年９月７日にビルケナウに移送された 3791 人の同胞とともに死体焼却場に連行され，ガス殺された。若者たちは歌いながら死んでいった。立ち上がった者が誰もいなくて，我々はとても失望した[34]。ゾンダーコマ

（34）ダヌタ・チェックの年譜（1944 年３月８日の項）には次のように記載されている。「BIIb 収容区の教師で子どもたちの世話をしていた囚人フレディ・ヒルシュは，女性や子どもを殺害から守ることができず，傍観者でいたくないという理由で自殺。」（英語版 594 頁）「午後８時頃，BIIa 収容区に夜間外出禁止令が発令。アウシュヴィッツ第２収容所［ビルケナウ収容所］と政治部［収容所のゲシュタポ］から多数の親衛隊員が収容区に到着。親衛隊員が，ある程度信頼しているカポやブロック長に応援要請。軍用犬を連れた１個中隊の半数が収容区を包囲。午後 10 時頃，幌付きトラック 12 両が到着。重い荷物はバラックに置いて出るようユダヤ人に命令，同荷物は列車まで運搬すると約束。秩序と静謐（せいひつ）を保つため，一度に 40 人がトラックの荷台に搭乗。トラックは BIIa 収容区から左折せず（死体焼却場への直通ルートを通らず），右折。駅に向かうかのよう。これに数時間を要す。まず男性が第３死体焼却場に，次いで女性が第２死体焼却場へ。数時間，出発まで待機するとき，不安に駆られたあるブロックのユダヤ人たちが午前２時頃にチェコ民謡を歌う。次のブロックでも同様。驚いた親衛隊員が威嚇射撃。移送中止になることを恐れて，ユダヤ人に歌唱を禁止。死体焼却場の脱衣場は，待機中の囚人が労働収容所へ移送されることを最後まで信ずるように仕組まれている。しかし，脱衣の命令が出されれば，それだけで死体焼却場にいることは明らかである。先にガス室に入り，他の者を待っている女性たちが，『インターナショナル』，『希望の歌（ハティクヴァ）』（当時はユダヤ人の民族賛歌）［Hatikva. 後にイスラエル国家］，チェコ国歌，パルチザンの歌を歌う。翌朝までに，テレジエンシュタットのユダヤ人囚人 3791 人（男性，女性，子ども）が第２死体焼却場と第３死体焼却場で殺害される。」（同 595 頁）Danuta Czech, *Auschwitz Chronicle 1939-1945: From the Archives of the Auschwitz Memorial and the German Federal Archives*, New York, Henry

ンドの作業員たちは，蜂起に参加するつもりで待機していたが，無駄に終わった。老人約 500 人が検疫収容中に死亡した。このときのユダヤ人で，生きているのは 11 組の双子だけである。彼らはアウシュヴィッツで様々な医学的検査を受けたが，我々がビルケナウを発つときには，まだ生きていた。ガス殺された人の中に，セレッジ出身の Rozsi Furst がいた。ガス殺の一週間前，つまり 1944 年 3 月 1 日に，収容されたチェコ人は全員，健康であることを親戚に知らせるように言われた。手紙の日付は 1944 年 3 月 23 日から 25 日までとされ，小包で食料を送って欲しいと頼むように言われた。

153,000–154,000　パヴィヤック刑務所からポーランド人（アーリア人）1000 人が到着。

155,000–159,000　1943 年 10 月から 11 月にかけて，各地の刑務所からの 4000 人および Benzburg とその周辺の隠れ家にいて検挙されたユダヤ人数人の移送があり，さらに Minsk と Vitebesk 地方から保護拘禁下にあったロシア人の一団も到着した。ロシア人捕虜も到着した。前述したように，彼らはいつものとおり 1 番から 12,000 番までのどれかの番号を交付された。

160,000–165,000　1943 年 12 月，オランダ，フランス，ベルギーを出発した移送列車で 5000 人が到着。Fiume，Trieste，Rome からイタリアのユダヤ人が移送されたのは，これが初めてであり，少なくとも 3 万人がただちにガス殺された。このときのユダヤ人の死亡率は非常に高かった。「選別」が全体に及んだからであり，1944 年 1 月 10 日～24 日には，医師を除いて，職業や職種に関係なく，若く健康な者も無慈悲な「選別」の対象となった。

囚人は一人残らず呼び出され，全員がいることを確認するために厳しい検査が行われ，同じ収容所医官（ベルリン警察署長の息子か甥）とビルケナウ司令官の親衛隊少尉 [Johann]Schwarzhuber が指揮を執って「選別」が進められた。その間に，「診療所」は，7 号棟から別の収容所区に移設された。施設はかなり良くなったにもかかわらず，そこに収容された者は一人残らずガス殺された。「診療所」の収容者の他に，「選別」によって，男性約 2500 人と女性 6000 人以

Holt and Co., 1989, pp. 594f.

上の命が奪われた。

165,000-168,000　1943年12月20日，テレジエンシュタットからさらにユダヤ人3000人が到着した。この移送列車は，９月７日の到着分[35]と同じカテゴリーの移送列車（特別措置者専用）で，６ヶ月の検疫付き収容とされたチェコのユダヤ人である。到着後，男性，女性，子どもは９月に到着したグループに合流した。これらのユダヤ人は，前に到着したユダヤ人と同じ特権を享受した。最初のグループがガス殺される24時間前に，新規到着者は，前に到着したユダヤ人から分離されて，同じ収容区の別のバラックに収容され，現在もそこにいる。彼らは，自分たちの運命を知っていた。早くもプラハ出身のRuzenka LaufschnerとHugo Langsfeldがリーダーシップをとって，組織的抵抗を計画している。ガソリンなどの可燃物を少しずつ集め，いざというときには収容区に放火することになっている。1944年６月20日，彼らの検疫期間が終了する。

169,000-170,000　ユダヤ人，ポーランド人，予防拘禁中のロシア人1000人（小グループ編成）。

170,000-171,000　ポーランド人，ロシア人，多数のユーゴスラビア人1000人。

171,000-174,000　２月末から３月初めにかけて，オランダ，ベルギー，そして初めてフランスのVichyから，フランスに長期に亘り定住していた（帰化しない）ユダヤ人3000人が到着した。この移送列車で到着した大部分は，到着後ただちにガス殺された。

３月中旬になると，隠れ家にいるのを発見されたBenzburgとSosnowitzのユダヤ人が，小グループで到着した。そのうちの一人から私が聞いたところによれば，ポーランドのユダヤ人が多数スロバキアに越境し，そこから，スロバキアのユダヤ人の支援でハンガリーに出国しているとのことである。

テレジエンシュタット発の移送列車で到着した人たちがガス殺されて以降，1944年３月15日までは移送列車は到着しなかった。収容所の現有人員がみるみる減少した。その後，移送者（とくにオランダのユダヤ人）が到着し，収容所に送られてきた。我々が脱走した1944年４月７日に，ギリシアのユダヤ人を乗せた大編成の移送列車が到着することになっていると聞いた。

＊

＊　＊

ビルケナウ収容所は，３つの建屋区から構成されている［図1-4］。現在，第１建屋区と第２建屋区だけが，内部哨鎖線上にある監視塔で警備されている。第３建屋区は建設中で無人である。我々が収容所を脱走したとき（1944年４月初め），ビルケナウに収容された囚人は，表のように分類される［表1-1］。

（35）前述148,000-152,000参照。

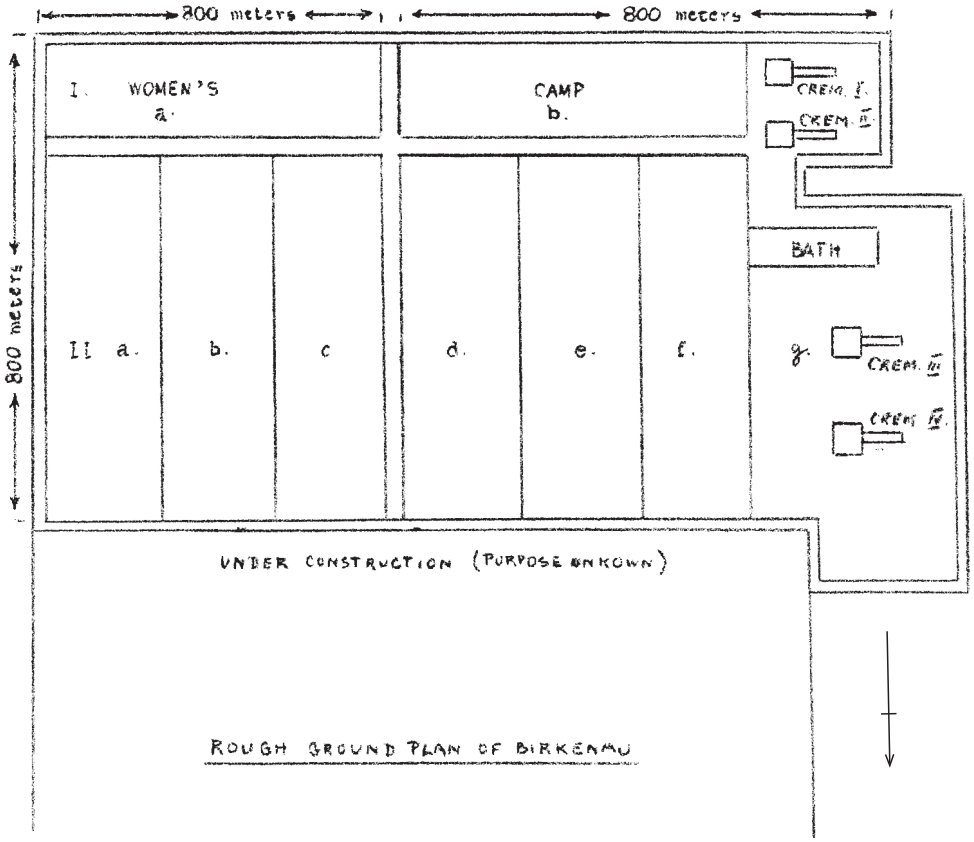


図 1-4　ビルケナウ収容所見取図

（訳注）1．図の上方が南。方位を示す矢線と図のタイトルは訳者による。
2．右側には，上から順に第 1 死体焼却場から第 4 死体焼却場が書かれている。
3．左端のローマ数字（I, II）は建屋区の番号。
4．女性収容区（第 1 建屋区の Ia 収容区と Ib 収容区）と第 2 建屋区（IIa 収容区～IIf 収容区）の間にランプ（降車場）があり，そこで選別された。「死の門」はこの左端。
5．IIg 収容区は「カナダ」と言われ，没収品の倉庫があり，整理班が物品を仕分けして収納した。
6．下方の第 3 建屋区（「メキシコ」）は建設中。用途は未知とされている。ヴルバとヴェツラーはこの建屋区の北東の隅（図の左下）に 3 日間隠れてから収容所を脱走した。
7．“Auschwitz II-Birkenau, ” in: https://panorama.auschwitz.org/tour2,3641,en.html, accessed on April 10, 2022 で仮想ツアーが可能である。

36832 番　Walter Spitzler（Nemsova 出身，ブロック長）ビルケナウからルブリンへ移送。

29867 番　Jozef Neumann（「死体班」の「現場監督」，Snina 出身）。

44989 番　Josef Zelmanovic（「幹部」，Snina 出身）

—　Cham Katz（「幹部」，Snina 出身）。

33049 番　Ludwig Solmann（「事務職員」，Kesmarek 出身）。

32407 番　Ludwig Eisenstadter（入れ墨師，Krempachy 出身）

ビルケナウ収容所の内部管理は，特別に選抜された複数の囚人によって行われている［上記 6 人］。ブロックには，国籍別ではなく，

表 1-1　ビルケナウの収容者数（1944 年 4 月）

第Ⅰ建屋区（女性収容区）

［建屋区］	スロバキアから来たユダヤ人	その他のユダヤ人	アーリア人	備考
Ia Ib	約 300 人	約 7,000 人	約 6,000 人	アウシュヴィッツの管理棟には，スロバキアから来たユダヤ人女性 300 人の他に，約 100 人が働いている。

第 2 建屋区

Ⅱ a 検疫収容区	2 人	約 200 人	約 800 人	スロバキアから来た 2 人のユダヤ人の中の一人は，Podolinec 出身の Dr. Andreas Muller でブロック長である。
Ⅱ b テレジェンシュタットから来たユダヤ人	—	約 3,500 人	—	6 ヶ月間の検疫
Ⅱ c 現在，居住者なし	—	—	—	—
Ⅱ d 「基幹収容区」	58 人	約 4,000 人	約 6,000 人	
Ⅱ e ジプシー収容区	—	—	約 4,500 人	約 16,000 人の中で生き残ったジプシーである。彼らは作業に出ることはないが，もうじき死ぬ。
Ⅱ f 診療所	6 人	約 1,000 人	約 500 人	スロバキアから来たユダヤ人 6 人が，ここで作業している。

（訳注）表のタイトルは訳者による。

労働区分別に囚人が収容されている。各ブロックは，次の 5 人の幹部が監督する。

ブロック長　1 人。
ブロック書記　1 人。
男性看護師　1 人，補助員　2 人。

ブロック長[36]

ブロック番号が書かれた腕章を着用し，そのブロックの秩序維持を担当する。生殺与奪の権がある。1944 年 2 月までは，ブロック長の 50％ほどをユダヤ人が占めていたが，ベルリンからの命令でそうできなくなった。ユダヤ人の全員が辞めなければならなかったが，次のユダヤ人 3 人は例外として，命令にもかかわらず，そのポストに留まることができた。

Arnost Rosin（Hacek）（Zilina 出身）
24 号棟ブロック長，整理班長，Benzburg から移送された職工。
Dr. Andreas Muller（Podolinec 出身）
15 号棟ブロック長，検疫収容所。
Walter Spitzer（Nemsova 出身）
14 号棟ブロック長，「診療所」。

ブロック書記[37]

ブロック長の右腕で，個人登録カードや様々な記録の保管事務のすべてを担当する。その責任は非常に重く，帳簿の管理はとても厳重に行わなければならない。個人登録カードには囚人名の記載欄がなく，囚人番号しか

（36）block eldest.

（37）block recorder.

書かれていないからである。たとえば，ブロック書記が誤って死亡と記載したとする。訂正は許されないから，このときには当該囚人番号の囚人を殺害してしまう。そうすれば，現有人員と帳簿上の人員との不一致は簡単に解消される。これは，死亡率が異常に高い場合にしばしば見られる。ブロック書記は枢要なポストであるが，しばしば権限が誤用されている。

看護と「室内」業務の担当者

彼らは，バラックを清潔に保ち，棟の内部と周辺で細々とした雑用に当たる。もちろん，病人の看護は当然である。収容区総取締[38]は収容区全体を監督する。これも囚人である。現在，このポストにあるのは，以下のとおりである。

> Franz Danisch，囚人番号 11182 番，政治犯，Königshütte（アッパー・シレジア）出身。彼が収容区全体を支配していることは，明々白々たる事実であり，ブロック長やブロック書記の指名・解任，作業の振り分けなどの権限を持っている。彼は公明正大な男であり，買収されず，ユダヤ人への対応に間違いがない。

さらに，「書記主任」[39]がいる。その地位は，間違いなく収容所内で最も強力なものの一つである。書記主任は，収容所司令部と直接連絡を取り，命令を受け，一切合切を報告する。すべての書記は書記主任に直属していて，すべての報告を書記主任に提出しなければならない。ビルケナウの書記主任は以下のとおりである。

> Kasimir Gork，囚人番号 31029 番，ワルシャワ出身のポーランド人，元銀行員。反ユダヤ主義者ではあるが，ユダヤ人に直接危害を加えたことがない。

ブロックの最高責任者は，「ブロック司令」[40]で，その数は 6 人～ 8 人であり，全員が親衛隊員である。毎晩，点呼をとるのは彼らであり，その結果を収容所司令官に報告する。

［ビルケナウの］収容所司令官[41]は，チロル出身の親衛隊少尉 Schwarzhuber である。この男はアルコール依存症でサディスト。その直属上司は，アウシュヴィッツを管理する収容所総司令官である。なお，アウシュヴィッツ収容所にも収容所司令官が配置されている。収容所総司令官の名前はルドルフ・ヘス[42]である。

作業班や作業グループの長は「カポ」と呼ばれる。

受けもちの囚人グループの作業中，カポは全権を持ち，そのカポが，自分の監督する囚人を殺害することは決して稀ではない。大人数の作業班には，数人のカポがいて，彼らは「カポ長」[43]の下に置かれることがある。当初はユダヤ人のカポが多数いたが，ベルリンからの命令でそれが禁じられた。しかし，カポの地位に留まったユダヤ人が一人だけいる。それは，

> Roth（Michslovce 出身の鍛冶屋）

である。

一番上にいて管理業務を担当するのは，ドイツ人の専門的職業従事者である。

---

(38) camp eldest.

(39) chief recorder.

(40) Blockführer, block leader. 親衛隊伍長か親衛隊軍曹が当たり，囚人 200 人～300 人を管理した。

(41) Camp Leader. Johann Schwarzhuber のこと。

(42) Rudolf Hoess. なお，Höss, Höß, Hoeß とも表記される。

(43) Capo-in-chief.

(2) マイダネク[44]

1942 年 6 月 14 日，我々はノヴァキ[45]［ブラチスラバの北東約 145キロメートル］を出発し，ジリナ[46]［ブラチスラバの北東約 200キロメートル］を経て，夕方 5 時ごろズワルドンに到着した。集合して人数を数えられた。我々の移送列車を引き継いだのは，親衛隊である。その中の一人は，我々が一滴の水も与えられずに，ここまで来たことに驚いて，こう叫んだ。「スロバキアの野蛮人どもに，水をやるな！」旅は 2 日続き，ルブリンに到着した。そこでは，「15 歳から 50 歳までの労働に適した者は，貨車から降りろ。子どもと年寄りは残れ。」と命令された。急いで貨車から降りて見ると，駅舎は，親衛隊の制服を着て，ピストルで武装したリトアニア人に包囲されていた。子どもと老人が乗っている貨車はすぐに閉じられ，列車が動き出した。その行き先も，その後どうなったかも分からない。

親衛隊の指揮官が，先は長いが，トランクを持ちたければ，そうしてもよいと言った。荷物をトラックに乗せた者は，後で必ず受け取れるとのことであった。荷物を担ぐ者もいれば，トラックに積み込む者もいた。

市街の裏手に，被服工場[47]があった。そこの庭には，明らかにユダヤ人と思われる汚れた縞模様の服を着た 1000 人ほどの囚人が，昼食を待って列を作っていた。皆，意気消沈していた。小高い丘を登ってゆくと，突然，高さ 3 メートルの有刺鉄線に囲まれた広大なマイダネク収容所のバラックが姿を現わした。入口のゲートを入るとすぐに，Trnava 出身の Maco Winkeler が，「荷物は全部取り上げられる。」と教えてくれた。我々の周りに立っていたのは，頭を刈られ，汚れた囚人服を着て木靴を履くか裸足のままで，惨めな姿になり果てたスロバキアのユダヤ人であった。その多くは，足が腫れていた。全部巻き上げられてしまうことをよく知っていた彼らは，我々に食料をせびったので，ありったけの食料を与えた。それから，我々は保管室に連れて行かれ，持ってきたものをすべてそこに置いていかなければならなかった。我々は駆け足で別のバラックに入り，服を脱ぎ頭髪を刈られ，シャワーを浴びた。その後，囚人服，木靴，帽子が支給された。

収容所全体は，金網で 3 つの区画に仕切られていた。私は「第 2 作業区」に配属された。第 2 作業区には，スロバキアとチェコのユダヤ人が多数いた。ドイツ人に会ったときの帽子の脱ぎ方とかぶり方の訓練を，丸 2 日間受けた。土砂降りの雨の中を，何時間にも亘って点呼の訓練を受けた。

バラックの宿泊施設は，控えめに言ってかなり斬新だった。長いテーブル 3 つ（バラックとほぼ同じ長さ）が，重ねられていた。これが我々の「寝床」である。（床とその上に，3 段にしてテーブルを載せた 4 層であった。）壁に沿って細い通路があった。

朝食は，朝の早い時間にかなり濃厚な

（44）Majdanek は Lublin 郊外の村落 Majdan Tatarski から借りた地名。この地にある収容所は 1941 年秋に武装親衛隊付属ルブリン捕虜収容所（Kriegsgefangenenlager der Waffen SS Lublin）として開設されたが，1943 年 2 月に，ルブリン強制収容所（Konzentrationslager Lublin）と改称された。この収容所は，「ユダヤ人問題の最終解決」（ユダヤ人の抹殺）を実行する機能を担うとともに，地方に居住するポーランド人の懲罰収容所として，あるいは通過収容所として使用された。Konzentrationslager Lublin-Majdanek（ルブリン＝マイダネク強制収容所），Konzentrationslager Majdanek（マイダネク強制収容所）とも言われる。Cf. “General Information” by Państwowe Museum na Majdanek (The State Museum at Majdanek), https://www.majdanek.eu/en/history/general_information/1, accessed on April 20, 2022; “Majdanek | concentration camp, Poland | Britannica,” https://www.britannica.com/place/Majdanek, accessed on the same day. 付図 1 参照。

（45）Novaky.

（46）Žilina.

（47）Bekleindungswerke.

「スープ」を手で食べなければならなかった。昼も同じスープが出た。夕方の食事は，「お茶」と呼ばれる飲み物，まずいパン 300㌘，ジャム 20㌘～30㌘，あるいは粗悪な人造バターが出た。

最初の数日で重要だったのは，「収容所の歌」の練習であった。何時間も立ったまま，［次のような歌詞の歌を］歌わされた。

ヨーロッパ中から
俺たちユダヤ人はルブリンへ
仕事をたくさんするために
さあ　始まりだ

義務を果たすために
過去をみんな忘れよう
義務をやりぬこう
コミュニティのために

気合いを入れて働こう
役割を果たそう
手を取りあって働こう
同じペースで　同じリズムで

理解できない
どうしてここに整列しているのかを
でも　すぐに分かるさ
その意味が

映画の「モダン・タイムス」が教える
よく教えてくれる
働くことを
仕事の奴隷になったことを

気合いを入れて働こう
役割を果たそう
手を取りあって働こう
同じペースで　同じリズムで

（直訳）

第 1 作業区：スロバキアのユダヤ人
第 2 作業区：スロバキアとチェコのユダヤ人
第 3 作業区：パルチザン
第 4 ・第 5 作業区：第 1 ・第 2 作業区のユダヤ人が建設

第 3 作業区のパルチザンは，働くこともなくバラックに監禁され，食料はまるで犬にでもやるように投げ入れられた。過密なバラックの中で大勢が死亡した。危険を冒してまでは接近しようとしない看守が，些細なことに言いがかりを付けては射殺した。

カポになったのは，第三帝国市民のドイツ人とチェコ人である。ドイツ人は残忍だが，チェコ人は何かと助けてくれた。収容区総取締は，セレッジ出身のジプシーで Galbavy という名だった。セレッジ出身のユダヤ人 Mittler がその部下である。振る舞いが残忍だったために，そのポストに就いたのだ。そのことは間違いない。この男は与えられた権力を最大限に活用して，苦境にあるユダヤ人をさらに苦しめた。夕方の点呼では，親衛隊員からは Mittler よりもさらに残酷に扱われ，一日の重労働の後に，何時間も屋外に立って「収容所の歌」を歌わなければならなかった。ユダヤ人のオーケストラの指揮者は，バラックの屋根で指揮をさせられた。これには親衛隊員が腹を抱えて大笑いした。

この「コンサート・パーティ」の間中，親衛隊の看守からは殴ったり蹴ったりの体罰をたっぷり受けた。赤痢に罹ったセレッジ出身のラビ Eckstein 師[48] は，点呼に数分遅刻しただけで，悲劇的な結末を迎えた。ブロック司令は彼を捕まえさせて，便所の中に頭を浸し，それから冷水をかけ，ピストルを抜いて射殺した。

死体焼却場は，第 1 作業区と第 2 作業区の間にあり，すべての遺体がそこで焼却された。

（48）rabbi. ユダヤ教の聖職者。

一つの作業区の現有人員は6000人から8000人で，死亡率は1日当たり約30人である。後になると，この数字は5倍ないし6倍になった。10人から20人の収容者が病室から連れ出されて，死体焼却場に運ばれ焼かれてしまったこともある。この死体焼却場には電気暖房が通っていた。そこの作業員はロシア人であった。

劣悪な食事と耐え難い生活条件で，病人が増えた。収容所では，深刻な胃の不調や不治の病と見られた足の病気が蔓延した。足が腫れた犠牲者は，歩けなくなった。ますます病人が増えて，死体焼却場に運べないほどになり，その数が70人になった1942年6月26日に，私は機会を捉えて，アウシュヴィッツへの移送を願い出た。

1942年6月27日，私はそれまでの衣服を処分して，民間人の服を着てアウシュヴィッツへの旅に出た。

48時間，水も食料もない貨車に押し込まれた私は，半ば死にかけてアウシュヴィッツに到着した。入り口には「労働は自由をもたらす」という大きな文言が架かっていた。庭にはゴミ一つなく，清潔に保たれ，ルブリンのうす汚れた粗末なバラックから来た者には，レンガ造りの建物が好印象を与えた。この変わりようがとても嬉しかった。我々は地下に連行され，お茶とパンが支給された。しかし，翌日には，着てきた衣服が没収され，頭は刈られ，前腕にはお決まりの番号が入れ墨された。最後に，我々はルブリンのときと同じような囚人服を支給され，アウシュヴィッツ強制収容所の「政治犯」として登録された。

宿割りで17号棟に収容され，床の上に寝た。高い壁で隔てられた隣の建物には，1942年の3月から4月にかけて連れてこられたスロバキアのユダヤ人女性が収容されていた。我々は毎朝3時になると，群れをなして「ブナ」という名の巨大な工場に行って，働いた。昼食は，ジャガイモかカブのスープで，夕食にはパンが配給された。作業中は，手ひどい虐待を受けた。我々の作業場は，大哨鎖線の外側にあったために，10㍍四方の小さな区画に仕切られていた。それぞれの区画には親衛隊の看守が1人ずつ付いていた。作業時間中に区画から出た者は「逃亡を図った」として，ただちに射殺された。まったくの意地悪から囚人に，区画の外においた私物を取って来いと命令する親衛隊員がよくいた。命令に従えば，所定の場所から出たとして銃殺される。作業の行きにも帰りにも，途中での休憩はなかった。往復とも，軍隊式の駆け足をしなくてはならず，列から外れた者は射殺された。私が到着したときに，ここで作業をしていたのは約3000人で，そのうちの2000人がスロバキアのユダヤ人であった。心と体の負担に耐えられる者はほとんどいなかった。脱走は絶望的と思われたが，毎日のように企てられた。その結果，一週間に数人が絞首刑になった。

ブナで何週間か骨の折れる労働をしたころ，ひどいチフスが流行した。衰弱した囚人が，何百人も死んだ。緊急検疫が命じられ，ブナでの作業が中止された。生存者は，1942年7月末に採石場に送られた。そこでの作業はさらに苛烈を極めた。体力が消耗して，どんなに頑張っても監督を満足させることはできなかった。ほとんどの人の足は腫れあがった。重労働ができなくなると，怠けている，詐病だと責め立てられた。まもなく，医務委員会が我々全員を診察することになった。その仕事ぶりは徹底していた。足が腫れているか，衰弱している者は，他の人から分離された。私には痛みがあったが，我慢して委員会の前に直立した。異状なしと診断された。300人のうち不適格とされた200人は，ただちにビルケナウに送られ，ガス殺された。その後，私に割り当てられたのは，委託工場［DAW］でスキー板に塗装することであった。1日当たりのノルマは，120本であった。この数を

こなせない者は，夕方に手ひどく鞭打たれた。この罰を逃れようとして，一生懸命に働くことになる。手榴弾のケースを製作する作業に当たったグループもある。一時は 1 万 5000 個も作り上げたが，数センチ小さいことが判明した。その罰として数人のユダヤ人が妨害行為のかどで射殺された（その中には Banovce に親戚がいると言われた Eredelyi とか言う人がいた)。

1942 年 8 月中旬，我々の宿舎の隣，壁の向こう側にいたスロバキア出身のユダヤ人女性が全員，ビルケナウに移送された。私は彼女たちと話す機会があったが，とても衰弱し，飢えで半ば死にかけていた。彼女たちは，ボロボロになった古いロシア軍の軍服を着て，木靴を履いていた。頭はきれいに刈られていた。彼女たちと話したその日，我々は再び念入りに診察され，チフスの疑いがある者は「白樺の森」に連行された。残った者は，頭を刈られ，シャワーを浴びて，新しい服を支給され，彼女たちがいなくなったばかりのバラックへと宿割りされた。偶然にも「整理班」に空きがあることを知ったので，応募した。整理作業に当たることになった。

この作業班は，100 人ほどのユダヤ人囚人で構成されていた。我々は，すべての同胞から離れた収容区の一角に送り出された。そこには，リュックサックやスーツケースなどの携行荷物がいっぱいに詰め込まれた巨大な倉庫があった。我々は荷物を一つずつ開けて，その中にある物品を櫛，鏡，食品缶詰，チョコレート，医薬品などに仕分けして，種類ごとに特別に用意された大きな箱に納めなければならなかった。それから，その箱を所定の場所に収める。下着，シャツ，あらゆる種類の衣服は特別なバラックに運ばれ，そこでユダヤ人の女性が仕分けして，梱包する。着古して傷んだ衣服は Memel［現リトアニア領クレイペダ（Klaipėda)］の被服工場に，まだ着られる衣服はベルリンの収集センターに送られた。金，硬貨，紙幣，宝石は政治部［収容所のゲシュタポ］に届け出ることになっていたが，その多くは親衛隊の看守や囚人に盗まれた。ここの責任者は，Spisska Nova Ves［ブラチスラバの北東約 330㌔］出身の Albert Davidovic であった。この男は今でもこのポストにあって，相当のエキスパートである。この部隊の指揮は，女性をよく殴る残忍で下品な奴が執っている。その親衛隊軍曹の名は Wykleff と言う。

毎日，女性たちがビルケナウから作業にやって来て，そこでの恐ろしい状況を我々に話した。殴られ，暴行されて，死亡率は男性よりはるかに高い。週に 2 回の「選別」で人員が足りなくなれば，毎日，新しい女性が補充された。

夜勤のとき，私は到着した移送列車がどうなるかを目撃することができた。初めてのことだ。その移送列車で到着したのは，ポーランドのユダヤ人だった。彼らは何日もの間，水を与えられず，貨車の扉が開くと，降りろと怒鳴られた。彼らは疲労困憊していた。約 100 人が旅の途中で死んでいた。生き残った人は 5 列になって並んだ。貨車から，死体と死にかかった人を降ろし，トランクを運び出すのが，我々の仕事である。死体と立てない人たちで，山ができた。トランクや手荷物を集め，積み上げた。その後には，恐ろしい積載物［死体の謂］の痕跡が残らないように，貨車は徹底的に清掃しなければならなかった。政治部［ゲシュタポ］から派遣された係官が，男性の約 10%，女性の約 5 %を「選別」し，収容所に収容する作業に当たった。残りはトラックに載せられてビルケナウに運ばれ，ガス殺された。死体や死にかかった人は直接，炉室に運ばれた。小さな子どもが生きたまま，死体と一緒にトラックに投げ上げられることもしばしばあった。手荷物やトラックは倉庫に運ばれ，その中身は前に述べたやり方で仕分けされた。

1942 年 7 月から 9 月にかけて，アウシュヴィッツ全体，中でもビルケナウの女性収容区でチフスの感染爆発があった。治療を受けた病人はいない。流行（はやり）始めには感染者の多くがフェノール注射で殺されたが，後になると，まとめてガス殺された。流行した 2 ヶ月間で，ユダヤ人を中心に 1 万 5000 人から 2 万人くらいが死亡した。衛生設備が整備されていなかったせいで，女性収容区が最も被害を受け，気の毒な女性たちの体はシラミに覆われた。毎週，大規模な「選別」が行われた。女性たちは天候に関係なく，「選別委員会」の前で裸体を晒（さら）さなければならなかった。選別されてしまうのか，それとも何週間かは猶予されるのか。女性たちは，死の恐怖の中で待っていた。自殺も多く，そのほとんどは，内側のフェンスの高圧電線への投身自殺であった。このようなことが続いて，当初の人員の 5 % にまで減少した。今，残っているのは，たったの 400 人である。そのほとんどは，女性収容区で何らかの事務仕事にありつくことができた。そのうちの一人，Povazska Btstrica［ブラチスラバの北東約 165キロメートル］出身で Katya という洗礼名の女性（Langdelder という親戚がいる）は，書記主任という重要なポストにまで登り詰めた。約 100 人の女性がアウシュヴィッツの管理棟で，2 つの収容所［アウシュヴィッツ基幹収容所とビルケナウ収容所］の運営にかかわるすべての事務を担当している。語学に長（た）けていたおかげで，彼女たちは通訳としても働いている。また，中央厨房やランドリーで働いている女性もいる。最近では，自分の衣服を手にすることもできるようになっただけでなく，絹のストッキングを履いていることもある。概して，この女性たちはそこそこに裕福で，髪を伸ばすことが許されている。もちろん，女性収容区の他のユダヤ人収容者は，そうではない。たまたま，このスロバキアのユダヤ人の女性たちは，収容期間が最も長かっただけであって，たとえ，ある種の特権と言えるものを享受しているとしても，以前は恐怖に満ちた辛酸を舐（な）めてきたのである。

この「整理班」での比較的良い仕事は，長

表 1-2　ビルケナウの犠牲者（ガス殺されたユダヤ人，1942 年 4 月～1944 年 4 月）

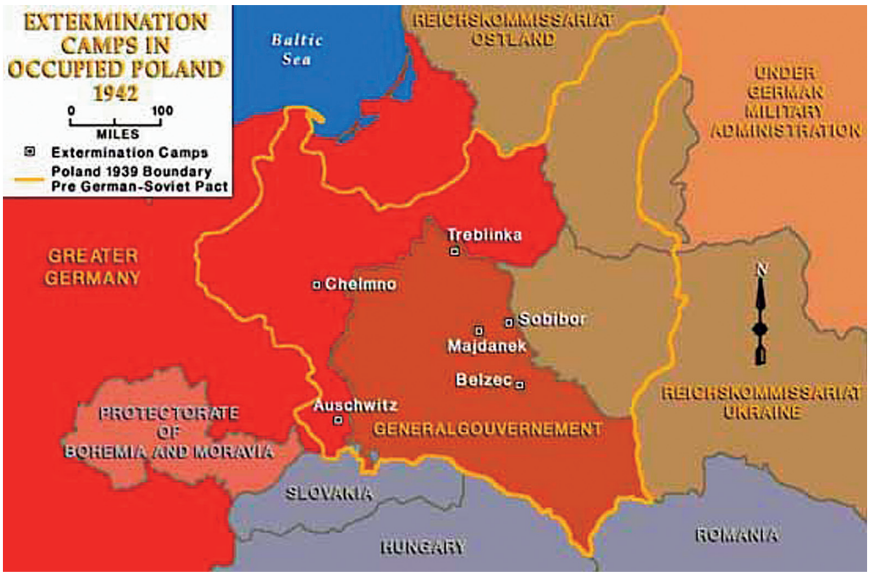
ポーランド（トラックによる移送）	約 300,000 人
ポーランド（列車による移送）	約 600,000 人
オランダ	約 100,000 人
ギリシア	約　45,000 人
フランス	約 150,000 人
ベルギー	約　50,000 人
ドイツ	約　60,000 人
ユーゴスラビア，イタリア，ノルウェイ	約　50,000 人
リトアニア	約　50,000 人
ボヘミア，モラヴィア，オーストリア	約　30,000 人
スロバキア	約　30,000 人
ポーランドの様々な収容所の外国籍ユダヤ人	約 300,000 人
	約 1,765,000 人

（訳注）タイトルは訳者による。

くは続かなかった。まもなく，私は規律違反でビルケナウに移送され，そこに 1 年半収容されたからである。1944 年 4 月 7 日，私は仲間と一緒に脱走を遂げた。

1942 年 4 月から 1944 年 4 月の間にビルケナウでガス殺されたユダヤ人の数（出身国別）を慎重に見積もれば，［前頁の］表のようになる(49)［表 1-2］。

(49) 今日では，アウシュヴィッツの犠牲者を 100 万人～110 万人とする F. Piper の推定が正確とされている。Franciszek Piper, *Auschwitz: How Many Perished Jews, Poles, Gypsies…*, Oświęcim 1996. First published in *Yad Vashem Studies*, Vol. VVI, Jerusalem 1991. Original Title: Estimating the Number of Deportees to and Victims of the Auschwitz-Birkenau Camp.



付図１　ポーランドにおける主要絶滅収容所（1942 年）

（注記）この地図には次のような解説が付けられている。「絶滅収容所とは，大量殺戮（ジェノサイド）を行うために設置された殺人施設である。1941 年から 1945 年にかけて，ナチス・ドイツは占領下のポーランド６ヶ所に絶滅収容所を設置した（チェルムノ，ベルゼク，ソビボール，トレブリンカ，アウシュヴィッツ=ビルケナウ，マイダネク［ルブリン］）。アウシュヴィッツとマイダネクは，強制収容所と労働収容所，そして殺戮センターとしての機能を併せもっていた。これら６つの絶滅収容所で『最終解決』の一環として殺害されたユダヤ人は，350 万人と推定される。犠牲者には，ユダヤ人の他にロマ（ジプシー）やソ連軍捕虜もいる。」

（出所）https: //www. jewishvirtuallibrary. org/map-of-extermination-camps-in-poland, accessed on April 7, 2022.

付図２　ビルケナウ収容所の寝棚（３段）

（注記）2020 年 1 月 30 日訳者撮影。

2．モルドヴィッツとロジンによる報告文書（第 2 文書）[1]

1944 年 8 月 6 日に，同年 4 月 7 日から 5 月 27 日までにビルケナウで起こった出来事にかんする報告文書がスイスに届いた。この第 2 報告文書は，第 1 報告文書の執筆者とは別に，収容所から首尾よく脱走したユダヤ人の青年 2 人によって作成された。この供述書には，とくにビルケナウに到着したハンガリーのユダヤ人にかんしては，第 1 文書に書かれていない新しい事柄が詳細に記述されていて，第 1 報告文書を補っている。しかし，この第 2 報告文書については，第 1 報告文書のときと同じようには，仔細な裏取りができなかった。

＊
＊　　＊

1944 年 4 月 7 日にスロバキアのユダヤ人 2 人がビルケナウから脱走した後，収容所は大騒ぎになった。「政治部」（ゲシュタポ）が徹底的な調査に着手して，脱走した 2 人の友人や上司を厳しく尋問したが，成果は上がらなかった。2 人は「ブロック書記」だったので，罰と予防措置の両方から，そのポストにあったすべてのユダヤ人が解任された。ゲシュタポは，（当然のことながら）2 人が第 3 建屋区[2] を抜けて首尾よく脱走を遂げたのではないかと疑った。このために，外部哨鎖線がかなり狭められて，第 3 建屋区の中を通るようになった。

＊
＊　　＊

4 月初旬に，ギリシアのユダヤ人を乗せた移送列車が到着し，そのうち約 200 人が収容された。残りの約 1500 人はただちにガス殺された。

4 月 10 日から 15 日の間に，アーリア人約 5000 人がビルケナウに到着した（そのうちの 2000 人から 3000 人の女性は，おもに放棄されたルブリン＝マイダネク収容所からのポーランド人であった[3]）。その囚人番号は，おおむね 176,000 番から 181,000 番である。

この中には，ポーランドから来たユダヤ人の女性約 300 人がいた。新たに到着した者の大半は，病気で衰弱しきっていた。彼女たちの情報では，健康な者はルブリンからドイツ国内の強制収容所に移送されたとのことである。ルブリン＝マイダネク収容所に収容されていたユダヤ人の運命について聞いてみると，全員（男性 1 万 1000 人と女性 6000 人）が，1943 年 11 月 3 日に殺害されたということであった。

ルブリンがパルチザンの攻撃に遭い，それに対抗すべくビルケナウの親衛隊員の多くがルブリンに一時的に派遣された，とビルケナウの親衛隊員が言っていた。それを思い出したのは，このころである。我が親衛隊員がルブリンに派遣された目的が，ようやく明らかになった。

どうも，ユダヤ人は，マイダネク収容所の第 5 区に長くて深い墓穴を掘るように命じられたようだ。11 月 3 日に 200 人から 300 人がひとまとまりになって連行され銃殺された。死体は墓穴に転がり込んだ。24 時間掛から

---

(1) 第 2 文書の執筆者は，Czesław Mordowicz と Arnošt Rosin と同定されている（Nikola Zimring, “A Tale of Darkness: *Story of Mordowicz-Rosin Report*,” in: Vrba (2020), p. 371 を参照）。原文は無題で，“Ⅲ” となっている。

(2) 原文では “Building No. 3（3 号棟）” とあるが，建造物の中を規制線が通るとは考えにくい。“Building” は「建屋区（Bauschnitt, sector）」を指すと考えられる（章末の図 2-1 参照）。

(3) 1944 年 3 月，ソ連軍の接近により撤収が決定された。“Liquidation of the Camp,” by Państwowe Museum na Majdanku（マイダネク国立博物館，英語版），https://www.majdanek.eu/en/history, accessed on April 10, 2022.

ないで，すべてが終わった。処刑の間，銃声をかき消すために大音量で音楽が流された。

ルブリンで「整理班」にいたか，あるいは書記をしていた女性300人が生き残った。ビルケナウに到着した３日後，これらの女性は皆，ベルリンの特別命令でガス殺されて焼かれた。しかし，書記の手違いで，女性２人はガス室に送られなかった。翌日，それが見つかり，すぐに射殺された。書記の首がすげ替えられた。

ルブリンのユダヤ人の運命は，ビルケナウ収容所にいたユダヤ人を深く意気消沈さることになった。突然ビルケナウ全体が同じように「清算」される日が来るのではないかと恐れるようになったからである。

182,000あたりから［183,000まで］
４月末には，さらに多くのギリシアのユダヤ人がビルケナウに移送されてきた。収容所に収容されたのは約200名で，約3000名が殺害された。

183,000-185,000　1944年５月初旬に，オランダ，フランス，ベルギー，ギリシアのユダヤ人とポーランドのアーリア人が小編成の移送列車で到着した。その大部分はブナに配属された。

1944年５月10日，ハンガリーのユダヤ人を乗せた最初の移送列車がビルケナウに到着した。彼らは，おもにブダペストの刑務所からの移送者であったが，ブダペストの街中を歩いているときや，鉄道駅にいて検挙された者もいた。我々と話をした中には，次のような女性がいた。

Ruth Lorant（Zilina出身）
Mici Lorant（Zilina出身，上と姉妹）
Ruth Quasztler（Bratislava出身）
Irene Roth（Michalovoe出身，後にKrialyhelmecへ転居）
Frau Dr. Barna Fuchs（Michalovce出身）

アウシュヴィッツとビルケナウでの移送列車の受け入れ手順は，よく知られている（散髪，囚人番号の入れ墨など）。男性には186,000で始まる囚人番号が与えられた。女性は女性収容区に収容された。男性約600人のうち約150人は45歳から60歳で，ビルケナウに回されて，様々な作業班に入れられた。残りはアウシュヴィッツに留まり，ブナに配属された。

移送列車で到着した者は全員が生かされた。通例のように死体焼却場に直行となった者は，一人もいなかった。投函が許可されたハガキのリターン・アドレスは，「ヴァルトゼー」(4)としなければならなかった。

５月15日からは，ハンガリーからの移送列車がビルケナウに大量に到着するようになった。連日１万4000人から１万5000人のユダヤ人が到着した。収容所から死体焼却場までの引込線［いわゆるランプ（降車場）］の延伸工事がものすごい勢いで行われた。作業員は夜に日を継いで働き，移送列車が直接死体焼却場にまで来られるようになった。移送列車で到着した者のうち，収容されたのはおよそ10％で，残りは直ちにガス殺の後，焼却された。ビルケナウ収容所が開設されて以来，かくも大量にユダヤ人がガス殺されたことはなかった。「ゾンダーコマンド」は600人に増員しなければならなかったが，さらに２，３日後には800人に増やさなければならなくなった（この増員は，すでに到着していたハンガリーのユダヤ人の中から募集された）。［携行品や衣服を整理・収納する］「整理班」

(4) “Waldsee” はドイツ南西部のラインラント-プファルツ州にもあるが，ビルケナウとその周辺には存在しない架空の地名と考えられる。

の人員も 150 人から 700 人に増員された。３ヶ所の死体焼却場が昼夜を問わず稼働したが（残りの１ヶ所はこのころ修理中），死体焼却場の能力不足のために，（死体焼却場ができる以前と同じように）再び「白樺の森」に縦 30㍍×横 15㍍の大きな穴が掘られ，昼となく夜となく死体が焼却された。こうして，「殺戮能力」はほとんど天井知らずとなった。

生きていたハンガリーのユダヤ人（約 10%）は，通常の「入所者」とはされなかった。頭髪を刈られ，囚人服を支給されたが，囚人番号は入れ墨されなかったからである。彼らは C 収容所［IIBc 収容区］に収容され，その後，Buchenwald, Mauthausen, Grossrosen, Gusen, Flossenburg, Sachsenhausen など，ドイツ帝国各地の強制収容所に移送された。女性は，別のブロックの「ジプシー収容区」に収容された。そして，そこからさらにどこか別の場所に移送された。スロバキアのユダヤ人少女が，そこのブロック長になっていた。

最初に到着したハンガリーからの移送列車は，Munkacs, Nagyszöllös, Nyiregyhaza, Ungvar, Huazt, Kassau, Beregszasz, Marmarossziget, Nagyberezna を出発した。次の人が生存者の中にいた。

- Robert と Ervin Waizen（兄弟，Kaasau 出身）
- Stark（Kaasau 出身）
- Ehrenreich（出身，Nagyberezna からの移送列車で）
- Katz と Chaim（Snina 出身，Nagyberezna からの移送列車で）

最後の 2 人はすでに移送された。Waizen 兄弟の両親はガス殺された。

ハンガリーのユダヤ人の移送業務は，アウシュヴィッツとブダペストを絶えず行き来していた元収容所所長（親衛隊中佐）［ルドルフ・］ヘスが，特別に管理した。ビルケナウの司令官は，ヘスの元副官（親衛隊大尉）ヨーゼフ・クラマー[(5)] であった。

187,000-189,000　フランスのアーリア人 1600 人は，ほとんどが知識人と有名人であり，ポーランドからの「移民」も少数ながら，含まれていた。フランス人の中には，高級将校，有力財界人，著名なジャーナリスト，政治家のほかに，元大臣もいたとのことである。到着後，何人かが抵抗を示したが，親衛隊が残酷極まりないやり方で鎮圧した。その場で射殺された者も数人いる。フランス人はとても勇敢で，沈着冷静だった。ビルケナウでは厳重に隔離され，彼らは誰とも接触することが許されなかった。2 週間後，ベルリンからの命令で，彼らはマウトハウゼン（オーストリアのリンツ近郊）に移送された。

5 月中旬以降，新規到着のユダヤ人には，これまでのように連続番号が与えられなくなった。数字の前に「A」という文字が付く 1 番から始まる新しい番号系が導入され，それが入れ墨されるようになった。こうなった理由は不明である。1944 年 5 月 27 日に我々が脱走したときには，約 4000 人のユダヤ人に新しい囚人番号が与えられていた。この 4000 人とは，オランダ，フランス，イタリアのユダヤ人 1000 人，および 1944 年 5 月 23 日にテレジエンシュタットからビルケナウに到着したユダヤ人 3000 人である。これ

(5) Jesef Kramer.

らのユダヤ人の取扱は，テレジエンシュタットを出発した，それまでの２本の移送列車に乗ってきたユダヤ人と寸分違うところがなかった。先にテレジエンシュタットを出発した移送列車に乗ってビルケナウに到着し，1943年12月20日から収容され，「検疫」期間が1944年6月20日までのユダヤ人は，IIb収容区に収容されていたが，後にテレジエンシュタットから到着したユダヤ人も，それと同じIIb収容区に収容された。

ゾンダーコマンドのユダヤ人の話によれば，帝国指導者ハインリヒ・ヒムラーは5月15日か16日にビルケナウを訪問したとのことである[(6)]。そのいずれかの日に，私はこの目で，背広を着た男5人を載せた自動車3台が死体焼却場に向かって行くのを目撃した。ヒムラーが来たと言っているユダヤ人が明言したのであるが，このユダヤ人だけでなく他の人たちも，ヒムラーが第1死体焼却場を訪れたのは間違いない，30分ほど滞在して，同行者と一緒に再び走り去ったと言った。翌日，シレジアの新聞には，「ヒムラー，クラクフ訪問」という記事が掲載されたので，この話は本当であろう。

ゾンダーコマンドの話で，もう一つ忘れてはならない出来事がある。1943年の夏の終わりに，オランダのユダヤ人4人で構成された委員会が，アウシュヴィッツを訪問した［図2-1］。彼らは身なりが立派であった。この訪問はすでに収容所司令官には知らされていたようである。アウシュヴィッツに収容中のオランダのユダヤ人には，いつもよりもましな衣服，ふつうの食器（皿，スプーンなど），いつもよりましな食料が支給されたからである。4人委員会はとても丁重に迎えられ，収容所内の建物を案内された。とくに清潔で好印象を与えそうな場所を見せられた。収容区からオランダのユダヤ人が数人連行された。彼らは，この収容所にはオランダのユダヤ人の一部しか収容されておらず，他の同胞はここと似た別の収容所にいると言った。かくの次第で4人は満足して，アウシュヴィッツではすべてが適正であると委員会は認めるという趣旨の声明に署名した。署名してから，4人委員会の面々は，ビルケナウ収容所を見学したい，とくに，噂になっている死体焼却場を見学したいと申し出た。死体焼却場はビルケナウで死亡した人を火葬するための施設ですが，ビルケナウと死体焼却場の両方を喜んでお見せしましょうと収容所当局は言った。その後，委員会は，収容所司令官［親衛隊少佐］Hans Aumayer[(7)]の案内でビルケナウを見学し，その足で第1死体焼却場に向かった。着くとその場で，4人は背後から射殺された。アウシュヴィッツを退出した4人は，不幸な自動車事故の犠牲になったという電報が，オランダに送られたそうである。

アウシュヴィッツには生物学研究所があり，親衛隊，民間人，収容中の医師がそこに詰めている。実験対象の女性や少女は，10号棟［付図3］に収容されている。長い間，この実験棟でブロック長のポストにいたのは，Uagda Bellinger（Michalovce出身）とRozsi（Humrené出身，姓は不明）の2人である。実験はユダヤ人の少女と女性だけに行われ，現在までのところ，スロバキア人の少女には行われていない。男性にも実験が行われたが，女性とは別々に収容されてはいない。実験で多くの人が死亡した。ジプシーもしばしば実

(6) ヒムラーの（2回目で最後の）アウシュヴィッツおよびビルケナウ訪問は，1942年7月17日，18日とされる（Czech, *Auschwitz Chronicle*, p.198f.; ルドルフ・ヘス『アウシュヴィッツ収容所』講談社学術文庫，1999年，432頁。ただし，英語版［Rudolf Hoess, *Commandant of Auschwitz*, Paperback Edition, London, Weidenfeld & Nicolson, 2000, p.207］には日付の記載がない）。

(7) アウシュヴィッツ第1収容所司令官（1942年2月1日～1943年8月16日）。

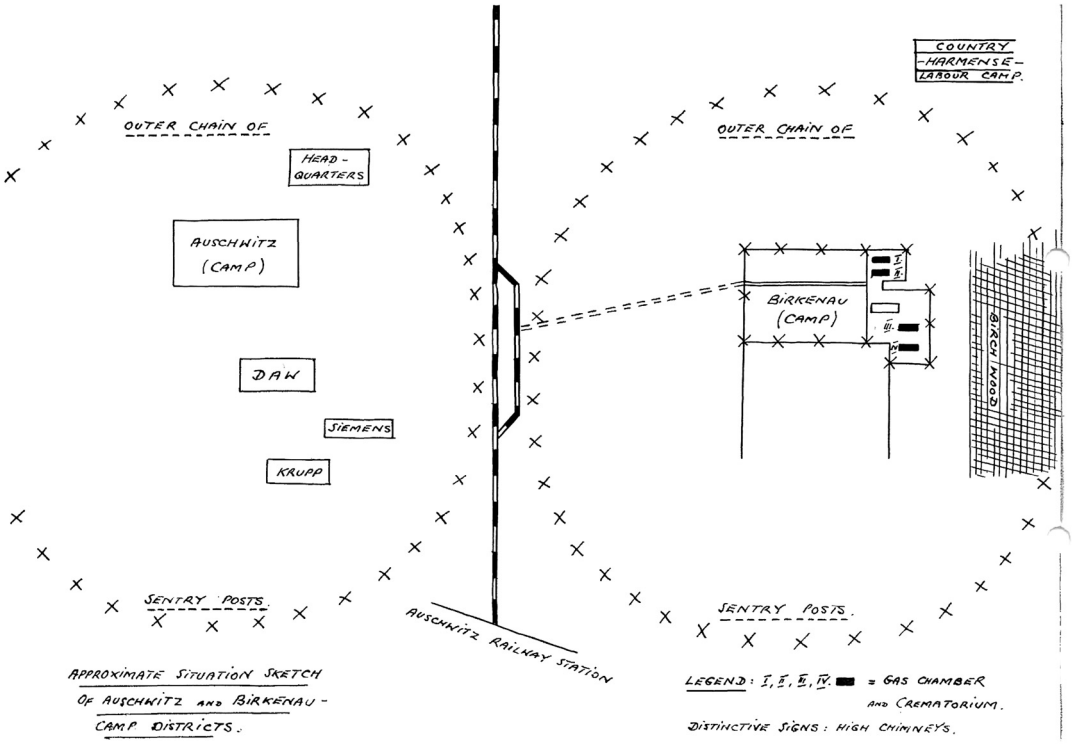


図 2-1　アウシュヴィッツ第 1 収容所（基幹収容所）（左側）と
アウシュヴィッツ第 2 収容所（ビルケナウ収容所）（右側）

（訳注）1．円形の×は外部哨鎖線。
2．第 1 収容所（左側）には，司令部，収容区，委託工場（DAW），シーメンス社の工場，クルップ社の工場が記載されている。
3．第 2 収容所（右側）には，ヘルメンジェ労働収容所，「白樺の森」（右側のハッチ部分），収容区が記載されている。4 つの■はガス室と死体焼却場で，高い煙突があると記載されている。┌──┐（空白部分）は造成中の第 3 建屋区。
4．図のタイトルは訳者による。

験の対象になった。「被験者」を収容する 10 号棟は完全に隔離されており，窓には目隠しがされている。誰もそこに入ることはできない。

現在までのアウシュヴィッツとビルケナウの司令官は，次のとおりである。Hans Aumayer, Johann Schwarzhuber, Wilhelm Hartenstein, Rudolf Höss, Josef Kramer。

付図３　アウシュヴィッツ第１収容所（基幹収容所）
　　10 号棟（人体実験棟）入り口
（注記）2020 年 1 月 30 日訳者撮影。

3．タボーによる報告文書（第 3 文書）[1]

(1) 強制移送[2]

1942 年 3 月 24 日，我々はクラクフ・モンテルーピチ刑務所[3]の特別な「雑居房」2 号室に収容された。60 人からなる我がグループがオシフィエンチム（アウシュヴィッツ）の強制収容所に移送されることは，我々には分かっていた。翌朝 8 時，親衛隊の看守 2 人が名簿を持って現れ，人数を数えた。我々は服を脱ぎ裸のままで，待っていなければならなかった。終わると，房の扉が開けられた。着剣した親衛隊の看守と警官が 2 列に並んでいた。中庭にはトラックが 2 台停車していて，30 人ずつに分かれて，それに乗った。このトラックはかなり小さくて，荷台は鎖で 2 つに仕切られていた。最初に入った者は中腰になり，その人の足の間に次の者がしゃがんだ。そうやって，ようやく狭いスペースに 30 人が詰め込まれた。我々は，銃床で殴られ，怒鳴られ，蹴られて，荷台に載った。荷台の仕切られた所から，親衛隊員 2 人が機関銃を持って監視していた。出発した。我々の後ろには，機関銃を装備したオートバイが一定の車間をとって付いてきた。トラックには幌がかけられていたために，どこをどう走っているかは知るよしもなかった。途中で何度か停車して，旅は 1 時間半ほど続いた。体勢を入れ替えることができなかったために，手足が硬直した。鎖に体を打ち付けて，失神した者もいたが，看守に殴られて，気がつく有様だった。ようやくの思いで到着した我々は，ふらふらになって地面に降りた。「労働は自由をもたらす」という文言が架けてあった門の前に立っていた。収容所の中では，オーケストラが演奏していた［付図 4］。ここがアウシュヴィッツだ，奴らは我々の到着を待っていたのだ。

我々は 5 列縦隊（この方式は，収容所内で考えうるあらゆる場面に適用された）に整列させられ，改めて「新入り」の名前が読み上げられた。呼ばれた者は，点呼をとっている者のところまで駆け寄り，助手から自分の囚人番号を受け取って，すでに呼ばれた者が整列している列に付かなければならない。この瞬間に，囚人番号が我々の名前になった。このような「受付」制度は，1943 年の夏まで続いた。その後，（ドイツ人を除く）すべての囚人には，開所以来ユダヤ人に行われていたように，前腕に囚人番号が入れ墨されるようになった。この総背番号制は，逃亡の可能性を少なくし，簡単に死体を識別するために採用されたようである。この囚人番号は Stuba という名のブロック司令[4] から手渡された。それから，オーケストラの伴奏付きで，裸のまま収容所の中に入った。時計は午前 11 時を指していた。「保管室」に少しの間いて，午後 5 時にバラックに入れられた。古参の収容者が大勢やって来て，時計，指輪，ライター，タバコをせびった。没収されないためだ，持ってきた食料は，すぐに食べてしま

(1) 原題は “The Polish Major’s Report”（ポーランド軍少佐による報告文書）。第 3 文書の執筆者は，Jerzy Tabeau と同定されている。Nikola Zimring, “A Tale of Darkness: *Story of Mordowicz-Rosin Report*,” in: Vrba (2020), p. 371.

(2) 節のタイトルは元の著者による。以下同じ。

(3) Montelupich prison in Crakow. 第 2 次世界大戦中はゲシュタポの管理下にあり，戦後はソ連の内務人民委員部（NKDV）が管理した（映画『シンドラーのリスト』に登場するブワツワフ強制収容所所長 Amon Göth が収監された）。現在は拘置所。以下を参照。http://www.krakowpost.com/6350/2013/02/inside-montelupich-prison, by *the Cracow Post*, accessed on April 11, 2022; https: //www.tracesofwar.com/sights/22032/Montelupich-Prison-Cracow.htm, by TracesOfWar, accessed on April 11, 2022.

(4) Blockführer, block leader. 親衛隊伍長か親衛隊軍曹が当たり，囚人 200 人～300 人を管理した。

え，盗まれてしまうぞ，と言われた。古参の囚人たちは，正式に仲間になれば，パンやスープなどを約束するとも言った。最後にカポ（収容所の監督）が入ってきて手短に強調したことは，仲間の助けなしには，囚人はこの収容所で２ヶ月と生きてはいられないということであった。後になってから，このことは，数多くの事例によって思い知らされた。始めに 60 人いた我々一行の中で，生き残ったのは私一人だった。午後５時，我々は廊下に出された。そこで服を脱ぎ，それぞれの番号を付けて束にまとめなければならなかった。我々は裸のまま，そこに立っていた。携行が許されたのは，ベルトとハンカチ２枚だけだった。私は小さな聖画を持っていたかったが，この作業を手伝っていた囚人が，「笑われるだけだぞ，どのみち没収されるだけだ。」と言って私をとどめた。最初に，頭髪が刈られ，その後，シャワーを浴びた。お湯はとても熱かった。収容所に入所する前の一切の準備は，27 号棟で行われた。次に，雪が降る中を，被服室のある 26 号棟まで走らなければならなかった。そこで我々は，囚人用品一式（シャツ，パンツ，靴，靴下，防寒上着，ズボン，ベスト，帽子，毛布）を支給された。どれもこれも不潔で，つぎが当てられた使い古しであった。たとえば私の上着は，前身頃はボタンで留めることができたが，後ろ身頃と袖は黒い縞模様の布を貼り合わせただけであった。ようやく全員が終ると，我々はまた５列縦隊に整列させられて，とあるブロックに連行された。待機していたブロック司令が，我々（ほとんどがアッパー・シレジア出身のポーランド人）にバラックにおける不可解な決まりごとのイロハを教えた。住まいの清掃と手入れの仕方，命令のときの脱帽，整列と歩調の取り方などが教え込まれた。命令はドイツ語によった。所作をしくじると，ブロック司令が怒りくるい，周りの者に当たり散らした。夕方の点呼になって，ようやくこれらの訓練が終わった。ブロックごとにブロック司令は自分のブロックの前に，今や彼の僕（しもべ）になった囚人を集めた。すべてのブロック司令が，順番に書記主任か書記にブロックごとの人数を伝えた。囚人の数とその数字が一致すれば，点呼は終了する。ところが，実は，この儀式はとても体力を消耗させるものであって，囚人を虐待する数えきれないぐらい多くあるやり方の一つにすぎなかった。1940 年，1941 年，1942 年に行われた通常の点呼は，霜，雨，雪など，どのような天気であっても少なくとも１時間は続くと思われた。その中を囚人は裸足で終るのを忍耐強く待っていなければならない。脱走が報告され，夕方の点呼で「欠員」が分かると，集合した者は全員，捜索の結果が判明するまで戸外で待機しなければならなかった。通常では，捜索隊は３，４時間で帰隊するが，それまでの間に，すべての囚人が健康を損ない，悲惨な結果を迎えることになる。たとえば，1940 年には，たった一人が脱走したせいで，囚人 100 人が死亡してしまった。厳冬の中を午後３時半から翌朝 11 時まで，囚人は戸外に立たされ，その結果，半ば凍死した囚人は 100 人に上ったからである。

点呼が終わると，我々はブロックに戻り，「部屋」が割り当てられ，３人で１つのベッドを使って寝た。古株の囚人が，服を枕にして寝ろ，そうしなければ盗まれるぞ，と言っていた。だから，一日たりとも食べ物をベッドに持ち込むことはしないで，横になった[5]。「歓迎会」が過酷を極めたために疲れ果て，皆はすぐに眠入った。

午前４時，ゴングの音で起こされた私たちは，とてつもない混乱の中にぶち込まれた。約 100 人が狭いホールでひしめき合い，我先

(5) 盗難が頻発し，食べ物が就寝中に盗まれるかもしれないので，残さず食べてから寝るということを言っているのであろう。

にと先を争ってベッドを片付け（ブロック司令は寝具に小さな皺も許さない），服を着ようとした。洗面など，もってのほかである。ゴングの音がしてから 10 分後に，「部屋頭」[6] がやってきて，「部屋」を掃除しなければならないと言って，皆を外の通りへと追い出した。通りには，ブロックのあちこちから群をなして出てきた人たちで，人だかりができていた。ほとんどは，何とか服を着ることができた。人ごみの中でまったく身動きができず，壁に押されたり，隅に押し込まれたりした。しばしば，何の理由もなく蹴られたり，殴られたりした。収容所に着いてから 24 時間以上も経って，ようやく砂糖抜きの冷たいコーヒーにありつけた。その後，点呼までの 1 時間半をさらに待機して，囚人全員が作業に出発した。新入りは，その前にまず質問票に，手紙を送りたいと思う人の住所を記入するように言われた。住所を教えないとか，書かないというのは，堅く禁止されている［強調は原文に従う。以下同じ］。「あいつら」が，必要なときに囚人の死亡を通知するための住所を求めていることは明らかである。

三角形の布と自分の囚人番号を書いた布が配られ，それを上着に縫い付けるように命令された。囚人には 1 番から順に番号が振られ，1943 年 11 月には最後の囚人番号が 17 万番に達した。くだんの三角形は，囚人によって色が異なり，刑法犯などの囚人カテゴリーが分かるようになっていた。アーリア人の三角形は赤であるが，政治犯も赤色の三角形であった。緑は常習の刑法犯，黒は「労働忌避者」，ピンクは同性愛者（帝国刑法第 175 条による），紫は「エホバの証人」という宗教団体の信徒である。さらに，P はポーランド人を示すなど，大文字で囚人の国籍が書かれていた。ユダヤ人の場合は，黄色の三角形の上に，さらに「罪状」を示す色の 2 枚目の三角形が［逆向きに］縫い付けられていて，2 枚でユダヤの星を形作っていた。したがって，標識を見ると，たとえば，ポーランドのユダヤ人で政治犯とかユダヤ人で「労働忌避者」などを即座に識別することができるのである。

三角形の布と囚人番号の布を縫い終えると，「保健室」に連れて行かれて，ドイツ人医師による「診察」が行われた。労働の適否を調べるためである。このときも裸のままで，寒い外の通りに 3 時間近く立って，震えていなければならなかった。3 月の末ではあったが，まだまだ寒さは厳しかった。診療所で働いている旧知の人たちに会った。彼らの一番の関心事は身内の消息だった。医師が到着すると，我々は全員が直立不動の姿勢をとらなければならなかった。腕を伸ばし，指を動かす。行進し方向転換して戻る。診察はそれだけであり，当然のことながら，全員が労働適格と判断された。我々がここに来たのは，労働のためではなかったか。「労働は自由をもたらす」のではないか。我々は，労働不適格と見なされれば，どうなるかをよく知っていた。連行され，ガスによる「抹殺」の宣告が下されるのである。ようやく，暖かい食事にありついたのは，36 時間が経過してからのことであった。収容所の食事は，朝はコーヒーか冷たいお茶（ドングリの葉などを煎じたもの），昼はスープである。これは，濃いときもあれば薄いときもあった。収容所に到着してから 5 ヶ月間，水とカブで作ったスープを食べ続けた。夕方の点呼の後，パンが 300㌘配給されたが，それも囚人の手に届く頃には，相当少なくなっているのが常であった。月曜日と土曜日には，チーズ 300㌘～400㌘の配給があった。それは，農家の粗末な自家製チーズで，チーズよりもウジのほうが多かった。毎週火，木，金曜日には 12 人分としてマーガリン 500㌘が配給され，水曜日と月曜日には赤ソーセージか豚肉や豚の血などで作った黒ソーセージが配給された。ソーセージの配給

(6) room eldest.

は 300㌘～400㌘である。火曜日と金曜日にはマーガリンの他に，一人分としてスプーン１杯のジャムが配給された。その樽には収容所用ジャムというラベルが貼られていた。道理で品質は悪かった。理論的に言うと，収容者への配給品は以上に述べたとおりであるが，実際には，かなりの部分が配給前に盗まれてしまっていた。夕方になると，パンと一緒に紅茶やコーヒーが配られた。ほとんどの囚人がスプーンを持っていないので，スープは，舐（な）めるようにして食べなければならない。言い忘れたが，新入りが配給のときにスープの入った深鍋に群がれば，部屋頭（へやがしら）からの罰として，地べたに座って食べなければならなかった。

食事の後，本人確認業務を担当する部署に送られ，３つの異なったアングルからの写真撮影があった。この日，収容所の写真館には，60 人以上の犯罪者の写真が増えたことになる。同胞が一人ずつ呼び出された。怯（おび）えた様子で写真室から出てきた。気をつけなければ。今度は私だ。椅子に座ったまま撮影された。立ち上がろうとしたとき，床が動き，私はバランスを崩して，壁のほうにころげ落ちた。細工がしてあって，椅子から立ち上るときに床が動くようになっていた。撮影技師（その全員がポーランド人）の悪質なジョークである。収容所の同胞を犠牲にしてまでも，このような娯楽に興じなくてはならない。このことは，驚くべきことではない。宿舎に戻ると，また点呼の時間である。こうして，仲間の収容者と共にした２回目の共同作業が終わった。

病人や「検疫隔離」中の者，独房に拘留されている者を除いて，囚人は全員が作業に出なければならない。収容者は作業班に分かれ，カポなど数人の監督がそれを率いた。大編成の作業班のトップには「カポ長」がいた。数人のカポや現場監督がそれを補佐していた。１つの作業班の規模は，100 人から数百人まで様々である。責任者はカポであるが，現場監督が 10 人，20 人，30 人などからなる作業班を受け持つこともしばしばあった。カポ長の承認を得た上で，労働管理部局がカポを選任するが，囚人の班への振り分けは，中央の管理部局が行う。夏季は，点呼の後，午前５時から 12 時までと，午後１時から６時まで，また冬季は，午前７時から午後３時まで，休憩を入れずに作業した。職人，農民，工場労働者，技術職には作業場があった。とくに気に入られた囚人は，収容所の運営に携わった。収容所には，「診療所」，「売店」，洗濯場，パン工場，屠殺場があった。したがって，一定の技術がある囚人は，原則としてその職業に就くことができた。知識人，自営の専門的職業従事者，商店主，事務職員は最悪だった。このような人が，囚人全体の 70％はいた。彼らは，石炭採掘場や砂利採取場など，最悪で最も過酷な作業に当たる未熟練労働者になった。その死亡率は恐ろしく高い。収容所当局の狙いは，可及的速やかに彼らを殺すことにあったように思われる。

(2) 収容所に入りたての頃 —「医務室」

最初は，解体班で作業をした。アウシュヴィッツ収容所から半径約 100㌔以内にいた住民は，立ち退きとなった。収容所が接収しない建造物はすべて，取り壊さなければならなくなった。新築の建物も取り壊された。我々の作業は，新築家屋の解体であったが，とくに迅速な作業が求められたので，かなり体力が消耗した。50 人がかりで３日か４日のうちに大きな建物を解体することになった。建材はすべて再利用できるようにと命令された。たとえば，屋根は慎重に下ろし，厚板，梁材，化粧タイルなどは，再利用できるようにしなければならなかった。少しでも破損させると，すぐにショベルやつるはしの柄でしたたかに殴られた。壁は素手で取り外し，レンガ一つひとつに付着しているセメントを取り除き，きちんと積み上げた。基礎の部分まで打ち壊し，家の痕跡が残らないように，更

地にしなければならなかった。この作業で多くが死亡した。野晒しで作業したり疲労したりしただけでなく，壁や梁が崩れ落ちて，とくに年配であったり動作が緩慢であったりした人や足の遅い人が死亡した。朝，50 人が出発したが，そのうち，40 人以上が歩いて帰ることは稀である。残りは，死体として運ばれてくるか，［生きてはいるが］一輪車や戸板の上でピクリともしないで運ばれてきた。このような気の毒な人たちも，夕方の点呼には決まって姿を見せなければならない。点呼が済むと，彼らは，診療所に連れて行かれた。そうやって診療所に行った作業仲間の中で生きて出てきた人に，私はついぞお目に掛かったことがない。

この班の作業は 1 ヶ月以上続いた。その後，私は溝の掘削班に移された。深さ 2.5㍍～3㍍の溝を掘るのだが，最後の 50㌢㍍は，地中からしみ出た泥水の中で作業をした。もちろん，作業中には溝から出ることは許されず，この作業は収容所内で最も過酷な作業の一つと見られていた。毎日，大勢がこの作業で死亡した。その後，私は「コンクリート班」に異動となり，重い柱やセメントの袋を担(かつ)がなければならなくなったが，新しい囚人が来てからは，レンガを貼りつけるコンクリート・パネルの製造に回された。これは，少なくとも屋根のある場所での作業という点で他の作業よりもよかった。どんな天候の日でも作業ができるということは，とても重要だったからである。囚人たちは，司令官，カポ，監督から恒常的に虐待され，殴られた。一般的に言って，収容所内で人を指図するポストにある者は，自分の優位性を好んで見せびらかしたがるものである。上に立つ者の性格が大きく影響していることは当然である。だがしかし，上の者は下の者にたいして直接の責任があり，各人はそれが所属する集団に責任がある。これが基本である。こうした状況が，「たれ込み」制度を育てた。たとえば，ある日，作業仲間がカブの切れ端を見つけて，それを大事に隠しておいた。彼は仕事を続けながら，時折，こっそり宝物をかじった。別の囚人がこの男のことを「たれ込んだ」。すると，数分後には，「カポ」が来た。カポは自分の作業班員の絶対君主であり，誰もが彼の機嫌をとろうとしていることは，肝に銘じなければならない。残念ながら，ご機嫌をとりたければ，他の囚人の幸福を踏み台にして，場合によっては命さえも奪わなければならないことが，しばしばある。カポは我が同胞の身辺をくまなく探って，カブのかけらを見つけようものなら，衰弱した男性を殴り倒し，頭，顔，腹を残酷に殴りつけた。そして，両手を前に差し伸ばして地面に座らせ，両手にはレンガの重石を乗せ，口いっぱいにカブのかけらを詰め込むように命令した。全員を集め，この不幸な男には丸一時間この姿勢でいてもらうと言った。同じ「犯罪」を犯せば，このような罰を受けることになると警告された。懲罰としての過酷な試練を耐え忍んでいる男性が，わずかでも姿勢を崩すと，そのたびに，監視に当たった現場監督は，カポの歓心を得ようと躍起になって，我が同胞を殴りつけた。15 分か 20 分で，男性は意識を失ったが，バケツの水をかけられ，再び元の場所に座らされた。2 度目に意識を失って倒れてしまうと，彼の体は脇にうち捨てられた。彼の様子を見ることは許されなかった。夕方の点呼が終わり，彼は「保健室」に搬送されて，2 日後に死亡した。これとは別に，1942 年の復活祭の月曜日，大雪が降って悪天候だったときの例もある。我々は，半ば凍り付いた泥につかりながら座って，レンガからセメントを削り取る作業をしていた。突然，司令官が現れ，大声で「帽子をとれ。コート，上着は脱げ。」と命令した。何が起こるのだろうかと恐れて，命令に従ってシャツ一枚になって作業を続けた。カポが我々を見てせせら笑うようにして，「汚らわしいポーランド野郎，

これからお祭りだ。」と言った。16 歳にも満たない若い囚人が，溝の中に隠れていた。ひどく痩せていた彼は，寒さで震えが止まらず，命令が聞こえていなかったことは明らかである。聞こえようが聞こえまいが，どうでもいいと思っていたのかもしれない。（酩酊気味の）カポはこの寒空の下で外に長くいるつもりはないので，千鳥足で向こうへ行った。実を言うと，カポには囚人がどうなろうとどうでも良いことであって，早く死ねば，それはそれでよかったのである。雪は止んでいたが，寒風がシャツの袖を通して刺さり込み，凍死しそうになった。死が忍び寄っていた。カポはいつ戻ってくるのか，すぐにか，一週間後か，一ヶ月後か，それは誰にも分からない。カポを待っている間にも，雪が降ってきた。ストーブに当たっていた現場監督が数人，作業の進捗状況を見ようとして，我々のほうに小走りでやって来た。すると，そのうちの一人が隠れていた若者を見つけて，叫んだ。「服を全部脱げ，すぐにだ，この豚野郎。」子どものような若者が反応しないので，現場監督が飛びかかり，「服を脱げ，さもないと命はないぞ。上に申告してやる。」と言いながら，殴り始めた。そこへ，カポがやって来た。鋭い音で警笛が鳴った。「整列」の合図だ。我々は整列した。我々は隊列を組んだ。それが「連帯責任」を意味することは分かっている。我々は，広場に連行された。足首まで泥につかった。いよいよ「スポーツ」が始まる。「しゃがめ，立て，駆け足……」。文字通り，泥の中を転げ回った。「体を伸ばせ，ジャンプ，走れ，両手は前だ。」我々は，頭から足まで泥にまみれ，立っていることができなかった。「体育」は 30 分ほど続いた。その仕上げは，伏せてから，手で体を支えて持ち上げる動作，つまり「腕立て伏せ」の繰り返しである。「体を上げろ，下げろ，上げろ，下げろ。」司令官が列を点検して回った。続けることができない年配者を見つけた。すかさず親衛隊員はその上に飛び乗り，ホップ大の鋲をたくさん打ち付けたブーツで頭や顔を蹴飛ばした。気の毒な年配者にもはや生きている気配がなくなると，その場に放置された。そして，ようやく我々は起き上がることを許されて，作業に戻ることになった。重傷を負った男性は，レンガの山の間の乾いた場所に運ばれた。目を開けて，何か言おうとしたが，一言も発することができなかった。そうこうしているうちに，作業の再開が命令されたために，そのままにしておくしかなかった。一日の終わりには，死体をもう一体運んで戻ることになった次第である。だが，我々はそれに慣れっこになっていた。我々は陽気なドイツ語の歌を歌いながら行進した。カポがそれを望んでいるからである。指揮官が我々一行の横を歩きながら，ニヤリと笑って言った。「いいぞ，その調子だ。」

私は，コンクリート班の作業中に肺炎に罹った（これは後で分かった）。最初は，「保健室」に行かないで，治そうと思っていた。そこで起こっていることや生きて帰る者がほとんどいないことを，私はよく知っていたからである。ところが，私は衰弱のあまり，ほとんど動くことができなくなって，とうとう，あそこに行かなければならなくなってしまった。私はどうとでもなれという気持ちになった。私は幸運であったとも言える。「診療所」にいた同胞が世話をしてくれたおかげで，「特権的」な環境にいることができたからである。私が入院したとき，「病院」には，28 号棟（内科病棟），20 号棟（感染症病棟），21 号棟（外科病棟）の３つの建物があった。その後，３つの新しいブロック（19 号棟，９号棟，10 号棟）が，「診療所」に加わることになった。この３棟が，いわゆる「衛生研究所」である。そこでは，X 線照射による不妊治療，女性への人工授精，輸血実験などが行われた。男女の囚人，とくにユダヤ人の男女は，これらの実験のための「モルモット」

になった。このブロックは他の収容区から完全に隔離されていたために，そこからのニュースが我々のところまで届くことは，滅多になかった。

38.6℃～39.0℃の発熱が「最低」条件であるために，「診療所」に入るのは簡単ではない。軽い発熱では入院できない。「診療所」に行くには，いつも自分のブロック長に申請しなければならない。ブロック長には申請への拒否権があった。病人は「診療所」の前庭で何時間も待たされてから，予診に呼ばれる。治療の必要性を囚人医師が判断すれば，服を脱ぎ，通常は冷たいシャワーを浴びる。さらに長い時間待たされて，ドイツ人医官の前に立つ。病人はアーリア人とユダヤ人の 2 つのグループに分けられた。それぞれのグループは，さらに分けられる。第 1 のグループは，「治癒可能」と見なされて病院にとどまることができる病人である。第 2 のグループは，長期間，入院しなければ回復の見込みがない人々，すなわち，衰弱が激しい患者，慢性病患者，餓死寸前の者，手足に怪我を負った者である。このグループは，心臓部にフェノールを注射され，事実上死刑になった。人種が重要な役割を果たした。注射されて死刑になるアーリア人は，本当に重篤の者だけであったが，「入院」となったユダヤ人の場合は，80％～90％がこの方法で「殺(や)られた」。このようにして殺されることを知っていて，いわゆる「自殺願望者」の仲間入りをしていていながらも，高圧電線に身を投ずる勇気がない者は，数多くいた。アウシュヴィッツではこのような状況は，ユダヤ人収容者の大量絶滅が始まる前の 1942 年の間中続いた。注射で殺される危険があるということは，新規入院患者や事故で負傷した者を恐怖に陥れるだけではなかった。ドイツ人医官は管理のために，ときどき（通常は月に 1 回），すべての病人を仔細に調べたからである。どの病棟でも，担当者（通常は医師）が患者を一人ずつ「目の前に立たせて」，病状を詳細に説明しなければならなかった。入院が 1 ヶ月を超えるとき，もしくは衰弱が激しいときは，その名が記載された。ドイツ人医官が必ず死刑囚の病歴を管理するのは，［病舎で作業する］囚人に干渉させないためである。ドイツ人医官によるこの特別検診のたびに，通常 200 人から 400 人の死刑囚のリストが作成された。これにたいして，毎日行われる定期検診でリストアップされる「通常」の死亡者は 20 人から 80 人であった。名簿が作成されたその日に，注射が行われた。「注射」（収容所言葉）と記載された新患には，衣服が配給されないので，裸のまま廊下で待機していなければならない。その後，28 号棟から移動して 20 号棟に行き，特別室で「手術」が行われた。元靴職人であった Josef Klehr(7) という名の親衛隊員が注射した。この男がこの病院に来たころは，一介の親衛隊二等兵であった。だが後になると，本当は知能が低かったのに，親衛隊兵長にまで上り詰め，食料の追加配給を受け，鉄十字勲章を受章した。このサイコパスは，医官の指示なしに，独断で病棟から犠牲者を選び，自分の「技術」で治療することもあった。Klehr は完全なサディストであった。犠牲者を動物のようになぶり殺しの目に遭わせる拷問によって，死に至らしめた。その後，「働き過ぎ」で神経衰弱に罹ったと判断され，クラクフ出身で囚人番号 607 番のポーランド軍志願兵 Panszyk が「助手」に付けられた。彼

(7) 1932 年に親衛隊入隊，家具職人，老人ホームの看護人を経て，開戦前の 1939 年 8 月にブーヘンヴァルト強制収容所看守。1941 年 10 月，アウシュヴィッツに異動。Klehr については，Witold Pilecki も証言している。この証言については，ポーランド語からの英訳が，Internet Archive によって公開されている（“Full text of “WITOLD’S REPORT”,” https: //archive. org/stream/WITOLD REPORT/WITOLD%20REPORT_djvu. txt, accessed on April 13, 2021）。ピレツキについては「訳者あとがき」脚注(4)参照。

は，1942年の冬にドイツに移送され，おそらくそこで死亡したものと思われる。その後，注射は「衛生兵」によって散発的に行われたが，「診療所」の責任者が注射することもあった。一定期間，Jerzy Szymkowiakという名のもう一人のポーランド人（囚人番号15490番）が志願してその「役割」を果たしたが，1943年の夏に死亡した。

注射は，衰弱した者や病人だけでなく，死刑の判決が下りた政治犯にたいしても行われた。これとは別に，13歳から16歳までの丈夫な若年者の2つのグループ（40人のグループと80人のグループ）が，殺害されたこともあった。「孤児」であること，および収容所では一人前の労働者と見なされないこと，これがその理由であった。

1942年の秋，ルブリンから移送された人たちの大虐殺があった。そのために，収容所は大混乱に陥った。ある衛生兵が，自分は親衛隊員であり，子どもの殺人者ではないと言って，注射を拒否した。そのために，別の衛生兵を呼んで，注射させなければならなくなった。この事件では，少なくとも1万5000人から2万人が命を落とし，ベルリンはこの病院の死亡率の高さについて説明を求めるなど，ひと悶着もふた悶着もあった。主任医官Eduard Wirths[8]は，知らぬ顔の半兵衛を決めこみ，Posen（Poznan）出身のドイツ人収容所医官Friedrich Entressに責任を負わせた。形ばかりの尋問に病院管理局から証人が喚問され，「死亡者」リストが調べられた。この収容所医官に与えられた「罰」は，収容所医官としてブナに異動させられただけであった。その結果，当座は注射殺人が中止された。しかし，その後も，少数ながら見込みのない病人には再開された。「注射」に処された者の多くは，「衛生研究所」（10号棟）の実験材料になった。この注射は，間違いなく囚人たちを怖がらせ，病院への入院を願い出なくさせた。

収容所にはもう一つ，大きな危険があった。それは，遠回しに「シラミとり」と表現された。明らかに収容所全体にはシラミとノミが蔓延していたために，大規模な消毒が行われた。しかし，その効果はまったく見られず，我々の「洗濯物」が戻ってきても，いつもシラミだらけだった。実を言えば，この「シラミとり」なるものは，収容所で大流行していたチフスに対抗するためであった。これが行われるとき，全員が診察されて，顔色が悪い者や衰弱した者は，収容所医官の気分いかんによっては，ガス殺される運命にあった。彼らはあっさりと「診療所」に連行され，その40%～50%が「間引き」された。1942年7月の「シラミとり」では，とくに多くの犠牲者が出た。「間引き」によって，衰弱した者，チフス患者，チフス発症後の隔離患者は，一人の例外もなく，すべてがブジェジンカ［「白樺の森」の野外死体焼却場］に送られた。これは，チフス撲滅のための抜本的方法と考えられていた。ガス室送りという最後の審判を宣告された人たちの搬送は，筆舌に尽くしがたいほど残酷で非人間的であった。外科病棟の重症患者でまだ包帯を巻いている者や骨と皮だけに痩せ細り，衰弱しきった患者だけでなく，治りかけの者までもがトラックに積み込まれた。全員が裸で，その光景たるや，恐ろしさの極みであった。トラックがブロックの入り口に停車すると，係の者が不幸な犠牲者たちをいとも簡単に荷台に投げ上げて，積み込んだ（頻繁に私はこのような痛ましい搬送を目撃した）。小さなトラックには，100人がぎゅうぎゅうに詰められることも，しばしばあった。彼らは皆，自分の運命をはっきりと知っていた。大多数は泰然自若としていたが，外科手術を受けて血まみれになったり，傷口が開いていたり，ひどく爛(ただ)れていたりし

(8) この下に約20人の収容所医官（Dr. Josef Mengele, Dr. Carl Clauberg など）がいた。

た人は，そのほとんどが，半狂乱になってもがき苦しんだ。いつもながら，我が同胞をトラックの所まで引きずり出さねばならなかったのは，つらい経験であった。ほとんどの人は静かに我々に別れを告げたが，「復讐を忘れるな」と言った言葉が思い出される。忘れられない。このような状況下では，人の心は鬼になる。トラックによるつらい旅に出させまいとして，ある囚人が病棟にいる自分の弟を殺してしまった。このことを想像してみて欲しい。（私はこの兄弟 2 人の名前と囚人番号を知っている。）カティンの事件[9] にかんするドイツ軍の作り話を聞いたとき，我々はただ肩をすくめるだけであった。これは，よく想像できるであろう。

(3) ユダヤ人

当初，アウシュヴィッツの収容所は，ポーランド人だけが対象であった。そこを警備していたのは，ドイツの強制収容所から移送されてきたドイツ人であった（初めは 30 人に満たない）。彼らは囚人であると同時に，こういう表現をしてよければ，「収容所の古参」でもあった。そのほとんどは，1934 年から収監されていて，多かれ少なかれ常習の刑法犯であった。ところが，時が経つにつれて，アウシュヴィッツは次第に国際色豊かな収容所になった。そして，1941 年に，最初のユダヤ人が到着した。ユダヤ人はすぐさまアーリア人から隔離され，特別なブロックに収容された。そのころは，処刑には何か規則のようなものがあったわけではない。親衛隊員，カポ，現場監督（大多数はドイツ人だったが，むりやりそうさせられたポーランド人も多い）が乱暴すぎて，その結果，ユダヤ人は，体調に関係なく，2 週間と体がもたずに死亡したということもあった。たとえば，若いユダヤ人が（重い荷物を積んだ一輪車を押すというような作業を）「大急ぎで」こなせるほど頑丈であっても，長い間そうしていれば，仕舞いにはおそらく音（ね）を上げることであろう。頑張れるところを見せたとしても，シャベルやツルハシの柄で殴られるなどの虐待を受けて，遅かれ早かれ殺されてしまう。

当時，すべてのユダヤ人は「採石班」で作業しなければならなかった。深さ 15㍍～20㍍の穴から切り出した石を一輪車に載せて，急斜面を登ってゆくのである。てっぺんにいる親衛隊員とカポがその作業ぶりとそのスピードをチェックする。だらけていると見られた人は，頂上に着くや押し戻されてしまう。急な坂を満載の手押し車もろとも，転げ落ちるのだ。これは看守のお気に入りの楽しみの一つであった。収容所に最初のユダヤ人が到着してから，1942 年の春に，大規模編成のユダヤ人移送列車（数万人を移送した列車）が初めて到着して，絶滅作戦が始まるまでは，ユダヤ人の囚人にたいする取扱はこのようなものであった。初めのころは，収容所にはユダヤ人はほとんどいなかった。その後，移送されてきたのは，ほとんどがポーランド人と一緒に送られてきたポーランド生まれのユダヤ人だった。ポーランドのユダヤ人は，すぐさま，ポーランド人から隔離された。ポーランドのユダヤ人は，ユダヤ人だから検挙されたのではない。「ドイツ国家の安全」を脅（おびや）かすとして検挙されたのである。人種的な理由で「十把ひとからげ」に検挙され，絶滅させられるようになったのは，1942 年の春以降

(9) 1940 年 4 月～5 月，捕虜となったポーランド軍将兵約 4300 人がスモレンスク郊外のカティンの森でソ連軍による大量殺戮の犠牲になった。1943 年 4 月，ソ連に侵攻したドイツ軍は実行犯をソ連軍としたが，ソ連はドイツによると主張した（1990 年にゴルバチョフがソ連の犯罪であることを認めた）。本文ではソ連のしわざとするドイツ軍の主張を「作り話」としている。次の小説は，この事件を題材にした。Andrzej Mularczyk, *Katyn. Post mortem*, Warszawa, Musza S. A., 2008.（工藤幸雄／久山宏一訳『カティンの森』集英社文庫，2009 年。）

である。大規模な移送列車の受入には，大がかりな準備が必要になり，こうしてビルケナウ（ポーランド名はライスコ[10]）に特別な強制収容所が開設されることになった。その管理にはドイツ人とポーランド人が当たり，警備は親衛隊の分遣隊が当たった。そこは呆(あき)れるほどひどかった。収容所には上水道も下水設備もなく，最も基本的な衛生設備さえもなかった。ユダヤ人は，赤いペンキで印をつけた背広を着ていた。食料は，基本的にはアウシュヴィッツと同じように配給されることになっていたにもかかわらず，虐待には目に余るものがあった。数日間食べ物がまったく与えられないこともしばしばあった。その上，配給されるはずの食料も，その一部が与えられるだけであった。全体的に見て，扱いは非人間的であった。少しでも不平を言うと死刑になった。

フランスとスロバキアから，初めて大規模な移送列車が到着した。身体に異状がない男性，子どものいない女性，大きくなった子どもと一緒の母親は，ビルケナウに収容された。残りの老人や衰弱者，幼い子ども同伴の女性，労働不適格者などは，「白樺の森」（ブジェジンカ）に連れて行かれ，青酸ガスで殺された。この目的のために，あの森にはガス処理用の特別なバラックが建てられた。そのバラックには，気密性が高く，必要に応じて開閉できる換気窓を備えた大広間があった。内部の造作は，入浴施設のような印象を与えた。犠牲者を欺(あざむ)いて，御しやすくするためである。処刑の手順は次のとおりである。８台～10台のトラックに乗った「選抜された者」が，一度に処刑された。収容所の敷地内で恐ろしいドラマが始まるのに，車列には警備が付いていなかった。大量処刑に立ち会う義務があった収容所医官の乗る自家用車が，トラックの車列の後を走った。二重の鉄条網で囲まれたガス処理施設に到着すると，男性，女性，子どもは皆，すっかり衣服を脱がなければならない。一人ひとりにタオルと石けんが渡され，バラックにこれ以上は入れなくなるまで，押し込まれた。すべてが密閉されると，特殊訓練を受けた親衛隊員が，換気口から青酸物質を詰めた容器を投げ入れた。それから約10分後，扉が開けられ，ユダヤ人だけで編成されたゾンダーコマンドが遺体を片付けた。新たに「選別された者」に備えなければならないからである。死体焼却場はまだ建設されていなかった。アウシュヴィッツにも小さな死体焼却場があったが，そこではこのようには大量の死体を焼却できなかった。そのために，当時は，死体を埋めるために穴が掘られ，そこに死体を投げ入れた。1942年の秋までは，このようなものであった。その頃になると，ガスによる絶滅がかなり増えたために，そのような即席の埋葬をしようにも，時間がなくなってしまった。殺害されたユダヤ人の遺体を何列にも並べて，土を薄く掛けるだけになった。あたりの野原のあちこちが，そうなった。遺体が腐敗して，土はほとんど湿地と化していた。野原には耐えがたい悪臭が漂(ただよ)った。1942年の秋には，すべての遺体を掘り起こし，遺骨を収集して，死体焼却場で焼却しなければならないほどになった（このころには，死体焼却場４ヶ所が竣工していた）。幸薄い犠牲者の遺体を山積みにして，ガソリンをかけ，炎に悲劇の幕を降ろさせるという方法もあった。かき集められた膨大な量の遺灰は，四方八方へ運ばれて，野原に撒かれた。そこが受難者たちの最後の安息の地となった。

そうこうしている間に，死体焼却場が完成して，移送列車で到着する人の数はうなぎ登りに増えた。ガス殺と死体焼却が記録的な速さで行われた。しかし，死体の供給があまりにも大量になったために，野外での死体焼却という古いやり方に頼らざるを得ないことも，

（10）Rajsko.

よくあった。このようなやり方で，約 150 万人のユダヤ人が絶滅させられたと推定される。ポーランドのユダヤ人以外は，アウシュヴィッツで何が待ちかまえているかを，まったく知らなかった。オランダのユダヤ人とフランスのユダヤ人の話によれば，ポーランドに移住するために出国する，とドイツ人が言ったそうである。そして，ポーランドに行けば，誰もがそれまで通りの職業で仕事を続けることができるか，あるいはもっとましな職業に就くことができる，そればかりでなく，ドイツが接収した店舗，会社，工場で稼ぐことだってできるようになるとも言ったそうである。彼らは全財産の他に，少なくとも 6 週間分の換金できる資産を携行することになっていた。相当量のお金や貴重品がアウシュヴィッツに持ち込まれたのは，そういうわけである（そのほとんどはオランダの銀行家とダイヤモンド商人によって持ち込まれた）。だが，その大半は収容所の職員，親衛隊員，囚人に盗まれた。1943 年に到着したユダヤ人は，自分たちに何が待ち受けているかを，はっきりと知っていた。それにもかかわらず，一般に死刑宣告を受けたユダヤ人は，従容として運命を受け入れていた。到着して貨車から降ろされたときに，抵抗とか集団脱走が散発的に試みられたこともあるが，無残にも鎮圧された。移送列車のために敷かれた側線を囲んで，探照灯（サーチライト）と機関銃を装備した監視塔があった［付図 5］。それでも，不運な人たちが，小さな成功を収めたことがある。それは，1943 年 9 月か 10 月，女性を乗せた移送列車が到着した後のことである[11]。監視に付いていた親衛隊員が衣服を脱ぐように命令して，ガス室へと追いこもうとした。いつも看守が略奪の好機として利用するのはこのときであって，女性の指や腕から指輪や腕時計を強奪した。このような混乱の中で，一人の女性[12]が親衛隊伍長勤務上等兵 Josef

（11）1943 年 10 月 23 日のことである。チェックの年譜には次のように記載されている。「ベルゲン・ベルゼンから国家保安本部（RSHA）が仕立てた移送列車でポーランドのユダヤ人（男性，女性，子ども）1800 人が到着した。彼らにはラテン・アメリカ諸国へ出発するためのパスポートが発給されていた。そのほとんどは，ワルシャワのホテル・ポルスキーでゲシュタポから許可を得て，ビザを高額で購入し，その後，ベルゲン=ベルゼンの拘置収容所に収容されたいわゆる交換ユダヤ人である。ベルゲン=ベルゼンでは，RSHA の代表 Dr. Seidl が彼らの書類を点検したところ，家族の成員の中に血縁関係のない者が多数いると判断された。出国許可が記載されたパスポートの目的はただ一つ，その所持者を絶滅から守ることであった。彼らはドレスデン近郊のベルガウ収容所への出発の準備をするように命じられた。荷物は搬送されると通達された。ベルゲン=ベルゼンに到着したユダヤ人 70 人も，この移送列車に同乗することになった。ユダヤ人はランプに着いて，ようやくアウシュヴィッツに連れてこられたことに気づいた。そこは，ポーランドのユダヤ人にとって馴染みのない場所ではなかったからである。ランプでは，男性と女性が分けられた。女性は第 2 死体焼却場へ，また男性は第 3 死体焼却場に連行されることになった。表向きは，旅行書類の審査と消毒を行うと通知して，親衛隊員は女性を脱衣場に連行した。脱衣を命じられて動揺した女性たちから，親衛隊員は指輪や腕時計を取り上げ始めた。絶望的な状況にあることを悟った一人の女性が，すでに脱いだ衣服を親衛隊軍曹 Schillinger の頭にかぶせ，拳銃を奪い取り，3 発発射した。この女性は親衛隊軍曹 Emmerich にも発砲した。他の女性たちは素手で親衛隊員に飛びかかった。鼻を噛みつかれた親衛隊員もいれば，顔を引っ掻かれた親衛隊員もいた。要請されて到着した増援によって，女性が数人射殺され，他はガス室で殺害された。Schillinger は病院への搬送中に死亡した。その後，Emmerich は回復したが，足に障がいが残った。」（Czech, *Auschwitz Chronicle*, p. 513, October 23, 1943.）「昨日，親衛隊軍曹 Schillinger が死亡した。その報復として，夕方，親衛隊看守がビルケナウ収容所で機関銃を無差別に発砲した。死亡した囚人 13 人，重傷 4 人，軽傷 42 人。」（*op. cit*., p. 514, October 24, 1943.）

（12）この女性は，ポーランドのユダヤ人ダンサー Franceska Mann として知られる Franceska Manheimer-Rosenberg である。このとき，フラン

Schillingerのピストルを奪い，彼めがけて３発発砲することができた。この親衛隊員は重傷を負い，翌日死亡した。これが合図となって，他の女性たちも処刑人とその手下を襲撃した。鼻を食いちぎられた親衛隊員もいれば，頭皮を剥がされた親衛隊員もいた。残念ながら，脱走できた女性は一人もいなかった。この事件を秘密にしようとしたが，午後８時以降，親衛隊員は収容所に残留してはならない，という命令が出て終わった。

収容所内ではある程度緊張が緩和したが，ユダヤ人の抹殺は絶え間なく続いた。収容所に収容されたユダヤ人の運命については，すでにこの報告文書の中（ガス殺と注射による病人の殺戮の項）で述べた。

(4) 処刑

1941年の夏までは，アウシュヴィッツは主として強制収容所であり，処刑は行われなかった。最初の処刑は，収容中の大多数にとっては驚くべきことであった。1941年の夏，ある日の夕方の点呼の後，多数の囚人が呼び出されて，処刑が始まった（よく覚えているが，クラクフ出身の男性18人の処刑である）。囚人番号を呼ばれた者は，物品庫に呼び出され，そこで衣服を脱ぎ，その代わりに古いボロ布（シャツとパンツ）を渡された。そして，砂利採取場に連行されて，至近距離からピストルで射殺された。それ以外の囚人は射殺の現場にいることは許されなかったが[13]，この処刑のことは，実質的に収容所全体に知れ渡るようになった。処刑が済むと，ゾンダーコマンドは遺体を土中に埋めるよう指示された。それまで我々は，強制収容所に移送されても，ドイツ国家の安全を脅かした者にたいして死刑は適用されないと考えていたから，この事件によって収容所は大きく動揺した。この日から，火曜日と金曜日には呼び出しがあって，処刑はほぼ定期的に行われた。その後，収容所の一角に特別な処刑場が設置されて，10号棟と11号棟の間の空き地で［図3-1］，通常は午前中に処刑が行われた。

死刑を宣告された囚人の個人登録カードは，書記主任事務室からその囚人が所属するブロックに送付され，朝の点呼の直後に，ブロック書記がその囚人番号を読み上げた。個人登録カードには「点呼後ただちに申告」と書かれ，書記の署名があれば，呼び出された囚人が銃殺される。ブロック書記は，集合した犠牲者を書記主任事務室に連行した。そこではさらに，囚人番号，名前，生年月日が確認された。そして，収容区総取締とブロック長（いずれも囚人）の命令で５列縦隊になって，処刑場まで行進した。銃殺が数時間後のときは，死刑囚は地下の舎房に収監された。しかし，ただちに処刑が行われる場合には，まず彼らは洗濯場に連行された。服を脱がされ，太ももにボールペンで囚人番号を記入さ

チェスカ・マンは26歳であったが，その４年前の1939年にはブリュッセル国際コンクールで125人中４位となり，その将来が嘱望されていた。本文に言う現場は第２死体焼却場（ビルケナウ）の脱衣場と言われているが，諸説がある。以下を参照。①Cynthia Southern, *The Vixen Who Shot A Nazi: The story of Franceska Mann, who shot SS Guard Josef Schillinger, in Auschwitz-Birkenau*, 2014 (Kindle Edition); ②Stuart Dowell, “The extraordinary story of Jewish ballerina who gunned down SS beast before being murdered,” by the first News [TfN] (https://www.thefirstnews.com/article/the-extraordinary-story-of-jewish-ballerina-who-gunned-down-ss-beast-before-being-murdered-8275, accessed on April 15, 2022), published on October 23, 2019. なお，*The Jerusalem Post*（2019年８月28日付電子版）は，③“A story of hope, tenacity and bravery,” by Sarah Hershenson を掲載し，マンの物語がエルサレム・バレエ団によって公演されることを報じている（初演2019年９月１日）（https://www.jpost.com/Israel-News/Culture/A-story-of-hopetenacity-and-bravery-599942, accessed on April 15, 2022）。

（13）公開処刑ではなかった。

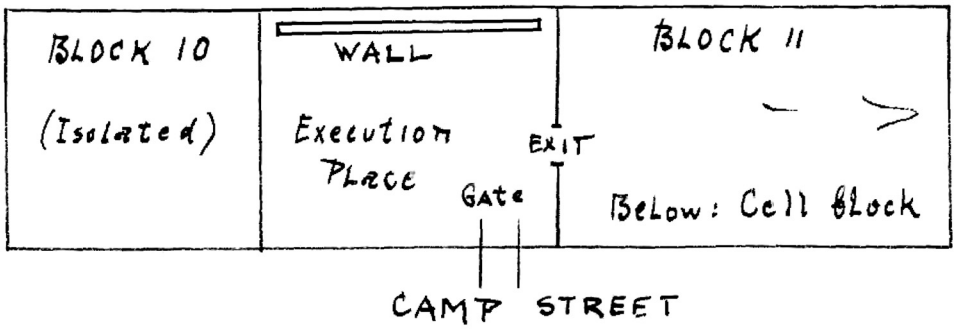


図 3-1　アウシュヴィッツ第 1 収容所（基幹収容所）の処刑場

（訳注）10 号棟（付図 2［第 2 文書］）の玄関に向かって右側に 11 号棟が建っている。独立した 2 棟の前後の壁面は，壁で繋がれて，その後方手前にさらにブロックの壁（いわゆる「死の壁」）が作られ，そこで銃殺された（図中の WALL のある空間が処刑場）。11 号棟には地下舎房がある。その 1 階にはゲシュタポの即決法廷があった（付図 6 参照）。図のタイトルは訳者による。

れた。準備が終わると，死刑囚は再び 5 列縦隊に整列して，処刑場の壁がある所に連行された（最初は 4 人ずつが，後になると 2 人ずつ射殺された）。彼らを連れ出すのは，11 号棟のブロック長であったが，後になると舎房ブロックのカポ（ユダヤ人）が連れ出した。これが死刑囚の腕を掴んで壁際まで引きずり，死刑囚の間に立つのである。当初は，死刑囚をひざまずかせて，頭を前に出させたが，後になると立たせたままで射殺するのが普通になった。死刑執行人が短身のライフル銃で犠牲者の後頭部を撃つと，くぐもったような音がした。処刑が終わると「死体運搬屋」が来て，死体を近くの小屋に運び入れ，さっきまで生きていた死体を積み上げた。血痕が取り除かれ，次の 2 人の犠牲者を処刑する準備がなされた。グループの全員が銃殺されると，死体は夕方まで 28 号棟に保管された。日暮れになると，その日に死亡した他の囚人とともに，すべての死体が大きな荷車に積まれて，死体焼却場まで運ばれて行った。しばらく後になると，死体は棺に入れて，処刑場から運び出されるようになった。その数がかなり多い場合には，搬出にトラックが使われた。収容所当局では処刑をできるだけ秘匿しておきたいと考えたために，「死体の搬出」は，いつも夜間外出禁止の時間帯に行われた。しかし，特別うまく隠しおおせたわけではない。すでに述べたように，壁の前の処刑は 1941 年の夏に始まったが，1942 年 5 月末にはアウシュヴィッツの「懲戒中隊」(14) がライスコ（ビルケナウ）に異動となったために，あのような処刑は 1942 年をピークにして終わった。大多数のムーゼルマンが選別されたときに，それと一緒に，若くてがっしりした体格の男性が選別されて，「懲戒中隊」が編成された（ここに，収容所言葉の「ムーゼルマン」とは，飢餓や疲労のためにすっかり消耗しきった受刑者のことを言う）。この特殊作業班の衣服の前身頃と後ろ身頃には，大きな赤い水玉模様が書かれてあった。これと区別するために，収容前に犯罪を犯したか，あるいは収容後に「犯罪」を犯した者には，黒い水玉模様が付けられた。「懲戒中隊」は約 500 人で構成され，2 日ごとにそのうち 10 人から 15 人が射殺された。残りは，粉骨砕

(14) この報告文書を読み進めると，これが大量の死体の焼却に特化した作業に当たった「ゾンダーコマンド」であることが明らかになる。ここでは，それが編成されて，主たる処刑場がアウシュヴィッツからビルケナウに移ったことを言っている。

身の作業の挙げ句に，射殺される番を待たなければならなかった。これと時を同じくして，（1942 年５月中旬には）アウシュヴィッツでも大量処刑が始まった。週に１回のこともあれば，２回のこともあり，３回のこともあって，40 人から 60 人が選別の上，銃殺された。６月中旬になっても状況は変わらず，とりわけ囚人 120 人が一度に命を奪われた大量処刑の後では，収容所は不穏な雰囲気に包まれて，暴動が目に見えて緊迫してきた。このことを嗅ぎつけた収容所当局は，６月のある日の点呼で，処刑を中止し，死刑を廃止すると発表した。囚人たちが不信感を強く募らせたのは，もっともなことであったが，総じてその通達は沈静化の効果を果たした。実際に，それから１ヶ月から１ヶ月半の間は，死刑の執行がなかった。その後，処刑が再開したが，その回数は少なく，少人数の執行に留まった。1942 年 10 月まではこの状態が続いた。そのころ，最大規模の大量処刑が行われて 247 人が犠牲になった。その全員が，Lublin 県と（ママ）Podhala 県[15] のポーランド人である。このことがあって収容所には恐怖に襲われた人もいたが，このときも多くの人はまったく気に掛ける様子がなかった。これをもって，収容所に到着した時点ですでに死刑が確定していた囚人にたいする，身の毛もよだつような一連の処刑が終わったからである。ただし，中には，運命がすでに定まっていることを知らないまま，１年以上も収容所にいる者もいた。たとえば，病気入院中の死刑囚がしばしばいた。このようなときであっても，死刑は執行しなければならない。そのために，ベッドに横になっている者は，注射で殺害された。ポーランドの映画俳優として有名だった Witold Zacharewicz もこの方法で殺害された[16]。もちろん，死刑執行命令書に署名されてアウシュヴィッツへと移送された囚人の処刑が 1942 年 10 月で終ったわけではなかったのである。

ただし，処刑の方法だけは，ある程度形を変えた。たとえば，初期のころは，アーリア人の囚人には必ず囚人番号を付与して，収容所に収容した。ところがしばらくすると，新しい方法が開発された。新入りは，ただちに死刑囚と一般収容者の２つのグループに分けられた。死刑囚のグループには通し番号を与えずに，ブロック司令中央事務所から 11 号棟の地下舎房に直接連行され，処刑が執行された。銃殺は，到着直後に行われるか，あるいは数日後に行われた。このやり方は，一切を秘密裏に実行するために採用され，すべての問題を秘密にする必要から，処刑は深夜だけに行った。それだけでなく，収容所にいた収容者は，このような仕打ちを受けるのは「民間人」しかいないと信じ込まされていた（断っておくが，収容所の終身収容者だけが「囚人」と見なされ，囚人番号が与えられず，作業班にも入っていない新入りは，「民間人」と見なされていたのである）。処刑されるのが「民間人」だけである限りは，一般収容者はとりたてて狼狽することはない。しかし，「囚人」の処刑が，一切なくなるということではない。収容所当局は，規律と規則遵守についてはすこぶる厳格であった。少しでもしくじると，死刑囚舎房に入れられ，生還は望むべくもなかった。政治部（収容所のゲシュ

（15）ポーランド総督府は５県の行政区画からなっていた（Distrikt Warschau, Distrikt Radom, Distrikt Lublin, Distrikt Krakau, Distrikt Galizien）。“Podhala district” とは，Podhale がある Distrikt Krakau（クラクフ県）のことか。

（16）ビルケナウ収容所で 1943 年２月 16 日死亡。死因については，心臓部へのフェノール注射による殺害と処刑によるとの２説がある（“Witold Zacharewicz,” in: Justice for Polish Victims of the Second World War, https://justiceforpolishvictims.org/silent-heroes/witold-zacharewicz/, accessed on April 15, 2022）。

タポ）が担当して，所内の軽微な違反にかんする処罰に当たるときには，事態はいっそう悪くなった。このような次第で，生死問題の解決は自己判断によるということが頻発した。賄賂が流行(はや)りだしたのである。死刑囚舎房に収監される「罪状」としては，収容所内の「民間人」と接触したことによる「政治犯容疑」，政治にかんするニュースの拡散，ドイツ軍参謀本部の公式声明(コミュニケ)についての論評，飲酒，窃盗（食料品，金，宝石），脱走未遂などがあった。死刑囚舎房はつねに満杯であったから，適宜「間引き」しなければならなかった。これは次のように行われた。収容所司令官で，政治部を率いていた Maximilian Grabner[17] は，彼と同じように酩酊した親衛隊員数人を引き連れて，11 号棟に入ってきた。彼らは舎房を巡っては，そこに収監されている一人ひとりから，事件の詳細，処罰の理由などを聴取した。この収容所司令官が死刑執行命令書を手にしているのであれば，囚人にはまだ自分の番が来ないかもしれないので，一息つけることであろう。しかし，いつだって，そのようなものはどうでもよかった。囚人一人ひとりの運命を左右するのは，もっぱらこの飲んだくれ軍団が感じた印象と収容所司令官の気分だったからである。下された実刑が考慮されるなどは論外のことである。囚人の印象が極端に悪くなければ，自死しない限りは，舎房にいて，後日の処刑を待つことになるのだが，司令官たちの聴取があるときには，下卑た言葉を浴びせかけられ，耐えられないほど厳しく折檻された。いつも，死刑囚の 85％から 90％が「間引き」され，壁の前で銃殺されて，新入りの囚人のためのスペースが確保された。この秘密裁判のことも，誰が犠牲になったのかということも，もちろん収容所全体には周知されなかった。もっとも犠牲者の親族には型どおりに通知された。死因はいつも「自然死」であった。死因を誤魔化そうとして，大量の紙を無駄に使い，病気や発熱の記録などが捏造された。死亡通知の電報は，「部外者」の疑惑を招かないように，１日２通までであった。処刑は，当初から，ただ一人の男が担当した。初めのころは，後に将校訓練所に送られた親衛隊軍曹 Gerhard Palitsch[18] がその役目を担ったが，その後釜に座った Stiwetz という名の親衛隊軍曹が今も死刑を執行している。女性の処刑はアウシュヴィッツからも報告されているが，その数は少ない。その反面，自由の身であった人や［外の］刑務所に収監されていた人がトラックで連行され，その多くが銃殺された。両親と子どもの家族全員が処刑されたことも，２回あった。生後数ヶ月の乳児が，処刑場の壁の前で，母親の腕に抱かれて短い生涯を終えた。

（17）アウシュヴィッツ第 1 収容所（基幹収容所）11 号棟を舞台に残虐行為を重ねた。

（18）死の壁の前での Palitsch による銃殺の様子を Jan Komski は絵画にした。この絵画は “Murder by The SS - a painting by Jan Komski,” by remember.org: https://remember.org/komski/komski-paintings1-007?msclkid=912462abc08511ec9281dfc72ba081cf, accessed on April 20, 2022 で公開されている。Jan Komski については United States Holocaust Memorial Museum: https://encyclopedia.ushmm.org/content/en/id-card/jan-komski?msclkid=a3d42129c08711ec9376dedac181dde7, accessed on April 20, 2022 を参照。

付図４　収容所のオーケストラ（パネル）

（注記）「労働は自由をもたらす」（Arbeit macht frei）の文言が架けられたアウシュヴィッツ第１収容所（基幹収容所）のゲートを通り中へ入ると，右側にオーケストラが演奏した空間がある。そこに設置されたパネル（写真）には，次のような説明がある。「囚人が通過するとき，収容所のオーケストラは，ここで行進曲を演奏しなければならなかった。囚人が，歩調をとりやすくするためであるが，作業に出るときと帰ってくるときに囚人の人数を数えやすくするためでもあった。」2020 年 1 月 30 日訳者撮影。

付図５　ランプ付近の監視塔

（注記）ビルケナウ収容所。2020 年 1 月 30 日訳者撮影。

付図６　11 号棟１階（即決法廷）

（注記）ここで死刑宣告を受けた。窓の外の右側に処刑場がある［図 3-1］。写真手前のパネル（床面）には，「ここはゲシュタポ裁判所の即決法廷で死刑判決が頻繁に下された。」とある。2020 年 1 月 30 日訳者撮影。

資料 1　1944 年 10 月 12 日付ベルン駐在アメリカ公使館特別補佐官ロズウェル・D. マクレランド発アメリカ合衆国大統領府戦争難民局長ジョン・ペール宛書簡

アメリカ合衆国公使館

1944 年 10 月 12 日，ベルン

ワシントン　戦争難民局長
　ジョン・ペール様[1]

件名　1944 年 7 月 6 日付公使館発文書第 4291 号および第 4295 号で報告したアッパー・シレジアのアウシュヴィッツ（オシフィエンチム）ならびにビルケナウ（ライスコ）におけるユダヤ人と政治犯のためのドイツ強制・絶滅収容所にかんする報告文書 2 件の送付

アウシュヴィッツ（オシフィエンチム（ポーランド名）のドイツ語表記）ならびにビルケナウ（ポーランド語の村名はライスコ）に設置され，ヨーロッパの様々な占領国からのユダヤ人と政治犯を収容するドイツ親衛隊管理下の強制・絶滅収容所にかんする 2 件の報告文書[2] 各 3 部を同封し，本文書を戦争難民委員会に送付いたします。同封の報告文書は，その全文の英訳であり，その概要については，1944 年 7 月 6 日付当公使館発大統領府戦争難民局宛電報第 4291 号および第 4295 号でお知らせしました。

同封の報告文書は，チェコの地下ルートを通じて，1944 年 6 月にブラチスラバからスイスに届きました。2 人の若いスロバキアのユダヤ人が執筆したこの報告文書は，ヘハルツ[3]（シオニストの左翼労働団体）のスイス代表ナタン・シュワルプ氏[4] に送付され，同氏から，ジュネーブ駐在チェコスロバキア政府代表ヤン・コペツキー博士[5] に送付されました。

もとより，その真偽を直接確かめることはできませんが，残念ながら，報告文書については，これらの収容所で起こった恐ろしい出来事の真の姿を活写していると信ずるに足りる理由があります。

2 人の若いスロバキアのユダヤ人による第 1 報告文書[6] についてですが，小職は当地ベルンにおいて，ブラチスラバ駐在ローマ教皇庁大使館のある職員と話す機会がありました折，同氏は，この 2 人の青年にみずから面談した結果，その話には十分な説得力があると思うに至ったと明言しました。小職の認識によれば，ブラチスラバのユダヤ人コミュニティで重い責任を担っている人たちが，この報告文書の執筆者たちを仔細に尋問したところ，この報告書の中に最終的に記載されている事柄については，不確実性や曖昧性がまったく認められなかったと言っております。その旨，申し添えます。

ポーランド軍少佐の報告文書（第 2 報告文書）[7] は，［前述の］2 人の若いユダヤ人による話とはまったく別に執筆され，スロバキ

(1) Mr. John Pehle.
(2) 訳文では第 1 報告文書，第 2 報告文書，第 3 報告文書の 3 つに分割した。
(3) HeChalutz はヘブライ語で「パイオニア」の謂。HeHalutz（ヘハルツ）とも。
(4) Mr. Nathan Schwalb.
(5) Dr. Jean Kopecky.
(6) 訳文では第 1 報告文書と第 2 報告文書。「第 1 報告文書」は，①Rudolf Vrba と Alfred Wetzler による報告（第 1 報告文書として訳出）と②Czesław Mordowizt と Arnošt Rosin による報告（第 2 報告文書として訳出）である。
(7) 訳文では第 3 報告文書。執筆者は Jerzy Tabeau である。

アにおけるチェコ人のレジスタンス組織に届けられ，コペツキー博士に転送されました。同博士は，この文書の執筆者が信頼できる人物であるとともに，同文書が真実を語っていることを保証しています。この文書は，当初，ポーランド語で執筆され，ドイツ語に翻訳されました。小職は，そのドイツ語訳を細心の注意を払って英訳し，ここに同封しました。

到着したユダヤ人移送用の運輸手段の規模や，２ヶ所の収容所に収容された男女の人数にかんする数字は，正確とは言えません。実際に，執筆者たちが確言するところによれば，信頼できるものの，概算にすぎないとのことです。しかしながら，たとえアウシュヴィッツとビルケナウで殺害された人々の数を正確に記録していないとしても，そこで行われた犯罪の凶悪性を証言するものとしてのこれらの報告文書の価値が，大きく損なわれることはないと考えられます。

ユダヤ人の移送列車の到着時期や出発国にかんする記載は，スイスの信頼できるユダヤ人団体や非ユダヤ人団体が，ヨーロッパの様々な国からの強制移送者の出発について把握している情報ととてもよく符合しています。たとえば，1942 年 8 月から 9 月にかけてリヴァーサルテ，グルス，レ・ミル，レセベドゥなどの一時拘留施設[8] から，外国籍のユダヤ人が大編成の列車で強制移送されましたが，そのころ小職は，南フランスに駐在していたために，移送列車の構成，人数，出発日にかんしては，直接入手した数多くの情報をもっています。

なお，もう一例を挙げますと，２人の若いユダヤ人の報告文書の中には，テレジエンシュタットからの第一次移送列車に乗せられた人たちが，葉書の日付を 1943 年 3 月 23 日～25 日と書かねばならなかったことが，記載されていますが，そのことは，その葉書が多数，当地スイスでも配達されたという事実によって，完全に真実であることが確認されています。

この［報告文書の真実性にかんする］問題に深く立ち入ろうとすれば，これ以外にも似たような多くの例証を得ることができるものと思われます。

総合的に勘案しますと，同封した報告文書のような資料を取りあげても，それによって，真の救援・救出活動を積極的に後押しすることになりうるとは言いがたいと考えておりますが，この報告文書は，問題全体の悲劇的側面を明らかにしており，それによって事実を認識するならば，それは，これらの人々を可能な限り援助するための計画をめぐらし，それを遂行するときに，しかるべき役割を果たすものと小職は考えています。この報告文書を貴局に提出するとともに，貴局が［周知を］望ましいと判断する他のすべての部局にたいする参考情報として提出した次第です。

敬具

署名
アメリカ公使特別補佐官
ロズウェル・D. マクレランド[9]

同封：報告２件
RDM/mjb
戦争難民委員会宛て３枚複写

(8) Riversaltes（地中海沿いのスペイン国境近く）；Gurs（ピレネー山脈のふもと）；Les Milles（マルセイユの北約 30㌔）；Récébédou（トゥールーズ南の郊外）。いずれもフランス。「一時抑留施設」とは，強制収容所や絶滅収容所に移送される直前の収容所。

(9) Roswell D. McClelland, Special Assistant to the American Minister.

資料 2　報告文書 3 篇の公開に寄せたアメリカ合衆国大統領府戦争難民局の見解

ドイツの強制収容所
—アウシュヴィッツ（オシフィエンチム）とビルケナウ—

アメリカ合衆国大統領府戦争難民局

ドイツ軍がヨーロッパ全土で，ユダヤ教徒やキリスト教徒など，何百万人もの無実の一般市民を意図的・組織的に殺害したことは，否定できない事実である。恐怖と残忍を併せもったこの軍事行動は，歴史上前例がなく，世界の自由な人々を服従させようとドイツが画策した計画の一環であり，今なお続いている。

ドイツ軍の残虐行為は，胸が悪くなる悪魔の仕業としか言いようがなく，文明人にとっては，それが実際に行われたとは信じがたいものである。しかし，アメリカなど様々な国には，この事実を明確に立証する証拠がある。

アメリカ合衆国戦争難民局は，ヒトラーが殺害しようとする犠牲者を一人でも多く救おうと懸命の努力を続けている。その活動のために，戦争難民局はヨーロッパの主立った所に代表部を置いている。それらの代表部は，ヨーロッパ全土から収集した情報の真偽を確かめ，絶滅と拷問のためのドイツ軍による軍事行動にかんする十分な情報を戦争難民局に報告している。

最近，戦争難民局は，ドイツ軍が設置した悪名高い絶滅収容所での出来事について，その現場の近くに駐在している代表部から，２件の目撃証言を得た[(1)]。第１報告文書[(2)]は，２年間，ポーランド南西部のアウシュヴィッツとビルケナウのナチス強制収容所で過ごし，1944 年 4 月に脱走した 2 人の若いスロバキアのユダヤ人の体験にもとづいている[(3)]。第２報告文書[(4)]は，アウシュヴィッツに収容されたあるグループの中で唯一生き残った非ユダヤ人のポーランド軍少佐[(5)]によるものである。

この２件［正確には３件］の報告は別々に作成された。その執筆者は現在も生存している可能性があることから，執筆者の安全のために若干削除した箇所もある。しかし，それ以外は，戦争難民局が受け取ったままを正確に再現している。ユダヤ人を移送する輸送手段の規模，２つの収容所に収容された男女別人数などの数字は，正確ではない。実際，執筆者は，信頼できる概算にすぎないと明言しているし，戦争難民局はそのことを了解している。

これらの報告文書は，収容所での恐ろしい出来事の真実の姿を述べている。そう信ずるに足りる根拠を戦争難民局はもっている。すべてのアメリカ人が読み，理解すべきものであるとの思いを強くして，この報告文書を公開した次第である。

1944 年 11 月

(1)「２件の目撃証言」は，厳密に言えば，３件である。

(2)「資料１」脚注(6)参照。

(3) 第１報告文書の執筆者は２人，第２報告文書の執筆者も２人であるから，ここは正確には４人である。

(4) 訳文では第３報告文書。

(5) 戦争難民局が公開した文書の執筆者は，第１報告文書２人，第２報告文書２人，第３報告文書１人であり，全部で５人である。

【訳者あとがき】

アウシュヴィッツからの脱走者による報告文書を本国に送付したベルン駐在アメリカ公使館特別補佐官による文書（資料１）ならびにそれを公開したときに市民に向けたアメリカ合衆国戦争難民局の文書（資料２）によれば，この報告文書の執筆者は，スロバキア出身の二人とポーランド軍の将校一人とされている。しかし，二人の青年によるとされた１本の文書は２つの報告文書からなり，別々のペア２組によって執筆されている。このため，一つとされた文書を第１報告文書と第２報告文書に分けて訳出し，ポーランド軍将校による報告文書は第３報告文書とした。

３つの文書は，Vrba-Wetzler Report（ヴルバ=ヴェツラーによる報告文書），Auschwitz Report（アウシュヴィッツ・レポート，アウシュヴィッツにかんする報告文書），Auschwitz Protocol（アウシュヴィッツにかんする供述書）などと総称されることがある。Vrba-Wetzler Report は３文書中の第１文書だけであり，３文書の総称としてはふさわしくない。表現の平易性を勘案して，報告文書全体にたいする総称としては「アウシュヴィッツ・レポート」を採用したいが，この全訳のタイトルは，報告文書が３文書からなることを明示するためである。

以下，アウシュヴィッツ・レポートを読むときに参考にした事柄を述べる。

１．脱走者と報告文書

アウシュヴィッツ＝ビルケナウ記念博物館[1]によれば，オシフィエンチムに収容所が開所した 1940 年５月 20 日からソ連軍が解放した 1945 年１月 27 日までの間に，アウシュヴィッツ収容所複合体[2]では，脱走に失敗すれば逃走中に射殺されるか捕縛されて収容所で処刑されるにもかかわらず，928 人の囚人が脱走を試みた（表１）。脱走後のことが判明している 654 人の内訳は，脱走に成功した者 196 人，失敗した者 433 人，脱走後数週間から数年で逮捕された者 25 人である。消息不明の者 274 人の中には，脱走に成功した者もいると推測されている[3]。

表１　アウシュヴィッツからの脱走者数　（人）

国　籍　等	合計	男	女	捕虜
ポーランド	439	428	11	
ソ連	213	139	19	55
ユダヤ人	150	146	4	
第三帝国市民*	49	40	9	
シンティとロマ	41	39	2	
チェコ	26	22	4	
ハンガリー	4			
オランダとユーゴスラビア	2	1	1	
国籍不明	4	(4)		
合計	928**	878***	50	(55)

（訳注）　*ドイツ人とオーストリア人。
**うち成功した者 196 人（消息不明を除く）。
***ソ連軍捕虜 55 人，国籍不明４人を含む。
（出所）表章は以下にもとづく。“Escapes and reports,” by Auschwitz-Birkenau Memorial and Museum: Former German Nazi Concentration and Extermination Camp (http://www.auschwitz.org/en/history/resistance/escapes-and-reports/?msclkid=515f597ac53311ec85ecd0f10de45404, accessed on April 26, 2022).

（1）Auschwitz-Birkenau Memorial and Museum: Former German Nazi Concentration and Extermination Camp (http://www.auschwitz.org).

（2）アウシュヴィッツ収容所複合体（camp complex）が，オシフィエンチムのアウシュヴィッツ第１収容所，ビルケナウのアウシュヴィッツ第２収容所，モノヴィッツのアウシュヴィッツ第３収容所および多数の付属収容所からなることについては，第１報告文書の脚注(5)参照。

（3）“Escapes and reports,” by Auschwitz-Birkenau Memorial and Museum (http://www.auschwitz.org/en/history/resistance/escapes-and-reports/?msclkid=515f597ac53311ec85ecd0f10de45404, accessed on April 26, 2022).

表 2　アウシュヴィッツからの脱走者による文書報告

脱走	発信者	通報先	備考
1942 年 4 月	Witold Pilecki	国内軍司令部	文書携行者：Stefan Bielecki
1942 年 5 月			文書携行者：Gustaw Jaster
1942 年 6 月			文書携行者：Stanislaw Gustaw Jaster 同行者：Kazimierz Piechowski, Józef Lempart, Eugeniusz Bendera
1942 年 11 月	Kazimierz Hałoń	ポーランド社会党クラクフ支部	報告にもとづく記事，雑誌 *Liberty* に掲載
1943 年 4 月	Witold Pilecki Jan Redzej Edward Ciesielski	国内軍司令部	3 人がそれぞれ文書を携行
1943 年 5 月	Stanisław Chybiński		文書名「アウシュヴィッツから国内軍司令部に宛てたスナップ写真」
1944 年半ば	Konstanty Jagiełło Tomasz Sobański	社会党クラクフ支部	収容所と親衛隊の配備を示す地図
1943 年 11 月	Jerzy Tabeau	ポーランド地下組織指導部	「ポーランド軍少佐の報告文書」（本訳文の第 3 文書） 同行者：Roman Cieliczko
1944 年 4 月	Rudolf Vrba Alfred Wetzler	スロバキア・ユダヤ人センター	本訳文の第 1 文書（2 人ともスロバキア人）
1944 年 5 月	Czesław Mordowicz Arnošt Rosin		本訳文の第 2 文書（Mordowicz はポーランド人，Rosin はスロバキア人）

（出所）表章は以下にもとづく。①“Reports by Auschwitz escapees,” by Auschwitz-Birkenau Memorial and Museum: Former German Nazi Concentration and Extermination Camp (http://www.auschwitz.org/en/history/informing-the-world/reports-by-auschwitz-escapees/, accessed on April 26, 2022); ②“Escapes and reports,” by Auschwitz-Birkenau Memorial and Museum: Former German Nazi Concentration and Extermination Camp (http: //www.auschwitz. org/en/history/resistance/escapes-and-reports/? msclkid=515f597ac53311ec85ecd0f10de45404, accessed on April 26, 2022).

脱走に成功した者の中には，アウシュヴィッツの惨状を文書にして，地下組織や公然機関に提出した元囚人がいる（表 2）。

表 2 に記載した報告がすべて公開の対象となったわけではないが[(4)]，様々な情報を収集したポーランド臨時政府は 1942 年 12 月 10 日に，国際連盟に宛てて「ドイツ占領下のポーランドにおけるユダヤ人の大量虐殺」と題する文書を提出して，惨状を訴えた（このリーフレットはアメリカ，イギリス，オース

(4) 1942 年 4 月～ 6 月に仲間の囚人に報告文書を託し，また 1943 年 4 月には，みずから報告文書を携行してアウシュヴィッツから脱走したヴィトルト・ピレツキ（1901 年–1948 年）の報告文書も公開されることはなかったが，その報告文書は，Internet Archive によって公開されている（“Full text of “WITOLD’S REPORT”,” https://archive.org/stream/WITOLDREPORT/WITOLD%20REPORT_djvu.txt, accessed on April 13, 2021）。ピレツキについては，その悲劇的な最期を含めて，脱走の経緯，収容所生活，生涯などが後世に伝えられている。以下は，アウシュヴィッツ＝ビルケナウ記念博物館の HP からの引用である。「1943 年 4 月 26 日から 27 日にかけた夜に，収容所での謀議を首謀した一人であるヴィトルド・ピレツキが収容所から脱走した。ヤン・レッジとエドワード・チエジエルスキも一緒に脱走した。ピレツキは収容所の襲撃を国内軍に進言したが，指導部からは承認さ

トラリアで市販された）[5]。表２からは，脱走者による報告文書の多くが，地下組織の内部文書として位置づけられていたことが窺われる。ただし，表２の下方に記した３文書の取扱は他とは異なっていて，匿名性を担保した上で広く一般に公開されており，ナチスとその支配下にあった勢力によるユダヤ人絶滅計画の遂行に与えた影響も小さくなかった。

２．３文書の公開

タボー，ヴルバ＝ヴェツラー，モルドヴィッツ＝ロジンによる報告文書が，アメリカ戦争難民局によって広く市民に向けて公開された経緯については，別掲した資料１と資料２に譲る。ここでは，３文書がアメリカに送られるまでを略述する[6]。

第１文書は，ルドルフ・ヴルバ（1924 年–2006 年）とアルフレッド・ヴェツラー（1918 年–1988 年）によって作成された（２人はスロバキアのユダヤ人）[7]。1944 年４月に脱走した彼らは，スロバキアのジリナ[8]で，スロバキア・ユダヤ人センターの幹部と密かに面会して，アウシュヴィッツにかんする報告文書を提出した。これはスロバキア語とドイツ語で作成され，様々なルートを通じて，連合国側の数ヶ国，世界ユダヤ人会議，国際赤十字，バチカンなどに送られた。スイスでは，これにもとづいてアウシュヴィッツの内情が新聞報道された。

第２文書は，1944 年５月にアウシュヴィッツから脱走し，スロバキアへ入国した２人のユダヤ人，チェスワフ・モルドヴィッツ（ポーランド人）（1919 年–2001 年）とア

れなかった。彼は，自分の謀議活動や収容所の状況を特別報告文書とした。ピレツキは，その後も地下活動を続け，1944 年，ワルシャワ蜂起に参加した。この蜂起が敗北を喫した後，ムルナウの捕虜収容所に収監された。釈放後，イタリアでヴワディスワフ・アンダース将軍麾下のポーランド第２軍に入隊。1945 年末，ポーランドに帰国。1947 年，共産主義政権に逮捕され，スパイ容疑で死刑を宣告されて，1948 年５月 25 日，ワルシャワのモコトフ刑務所で処刑された。1990 年，名誉回復。」（“Escapes and reports,” by Auschwitz-Birkenau Memorial and Museum: Former German Nazi Concentration and Extermination Camp (http://www.auschwitz.org/en/history/resistance/escapes-and-reports/?msclkid=515f597ac53311ec85ecd0f10de45404, accessed on April 26, 2022)）. ①Witold Pilecki, *The Auschwitz Volunteer: Beyond Bravery*, Los Angeles, Aqua Polonia Publishing, 2012 (first published in 1945)（ヴィトルド・ピレツキ『アウシュヴィッツ潜入記　囚人番号 4859』杉浦茂樹訳，みすず書房，2020 年）；②小林公二『アウシュヴィッツを志願した男』講談社，2015 年も参照。

(5) Republic of Poland (Ministry of Foreign Affairs), *The Mass Extermination of Jews in German Occupied Poland: Note addressed to the Government of the United Nations on December 10th, 1942 and other documents*, Published on behalf of the Polish Ministry of Foreign Affairs by Hutchinson & Co. (Publishers) Ltd., London, New York and Melbourne. この文書は，アメリカ・オハイオ州ケニオン大学（Kenyon College）が所蔵する Bulmash Family Holocaust Collection の中に納められていて，その全文が公開されダウンロードできるようになっている（https://digital.kenyon.edu/bulmash/771, accessed on April 29, 2022）。

(6) “Reports by Auschwitz escapees,” by Auschwitz-Birkenau Memorial and Museum: Former German Nazi Concentration and Extermination Camp (http://www.auschwitz.org/en/history/informing-the-world/reports-by-auschwitz-escapees/, accessed on April 26, 2022).

(7) ヴルバの本名はヴァルター・ローゼンベルク（Walter Rosenberg）。ヴェツラーのペンネームはヨゼフ・ラニク（Josef Lanik）。Cf. Randolph L. Braham, *The Politics of Genocide: The Holocaust in Hungary*, Condensed Edition, Published in association with the United States Holocaust Memorial Museum, Detroit, Wayne States University Press, 2000, [Braham (2000)], p. 91.

(8) Žilina. ブラチスラバの北東約 200㌔。チェコとポーランドの国境に近い。

ルノシュト・ロジン（スロバキア人）（1913年-1999年）によってスロバキア・ユダヤ人センターに提出され，そこから西側諸国に送られた。

第3文書は，前2文書の執筆者たちよりも半年ほど前の1943年11月に脱走したポーランド人のイェジー・タボー（1918年-2002年）による報告文書であり，ポーランドから密かにスイスに持ち出され，同国に駐在する様々な国の外交官や世界ユダヤ人会議の代表者から注目された。この文書には「ポーランド軍少佐の報告文書」というタイトルが付けられて，イギリスやアメリカにも送られた。

アウシュヴィッツにかんするこれらの3文書について，アウシュヴィッツ＝ビルケナウ記念博物館は次のように記している[9]。

> これらの報告文書の全部または一部は，スイスと連合国で出版された。たとえば，ヴルバ＝ヴェツラーによる報告文書とタボーによる報告文書は，まとめて『絶滅収容所』（*Les camps d'extermination*）というタイトルを付けてスイスで出版された。チェコ亡命政府は，同じ資料を使って，『オシフィエンチムとビルケナウの強制収容所の状況にかんする報告文書（*Report on condition in the concentration camps of Oswieczim and Birkenau*）』を作成した。1944年11月には，『ドイツ絶滅収容所―アウシュヴィッツとビルケナウ（*German Extermination Camps: Auschwitz and Birkenau*）』というタイトルで2部構成のパンフレットがワシントンで発行された。その第1部は，ヴルバ＝ヴェツラーの報告文書とモルドヴィッツ＝ロジンの報告文書であり，第2部は，タボーの「ポーランド軍少佐の報告文書（Report by a Polish Major）」である。
>
> さらに，この報告文書が伝える情報は，イギリス，アメリカ，スイスの新聞にも掲載された。

この3文書が連合国側に与えた影響については後述するが，それに先だってハンガリーにおけるユダヤ人の強制移送について項を改めて述べる。

3．ドイツによるハンガリー占領とユダヤ人の強制移送

1942年1月20日，「ユダヤ人問題にたいする最終解決」（以下，「最終解決」と言う。）の方針を具体化するために，国家保安本部を束ねるラインハルト・ハイドリヒは，関係機関（総統府，外務省，内務省，秘密警察（ゲシュタポ），親衛隊など）からゲシュタポ「ユダヤ人課長」のアドルフ・アイヒマン[10]など，14人を招集して，ベルリン郊外のヴァンゼーで会議を主宰した。後に「ヴァンゼー議定書」と言われるこのヴァンゼー会議の議事録は，アイヒマンがとりまとめた。以後，この「議定書」に沿って，ユダヤ人の大量絶滅計画が実行に移された[11]。

（9）"Reports by Auschwitz escapees."（脚注(6)）

（10）正確には国家保安本部 IVB4 課長。［親衛隊］国家保安本部（RSHA：Reichssiherheishauptamt der SS）の第 IV 局は敵性分子の捜索・制圧を担当し，その中の B 部は様々な宗教団体を取扱い，その第 4 課がユダヤ人を担当した。RSHA については，"Reich Security Main Office (RSHA)" (https://encyclopedia.ushmm.org/content/en/article/reich-security-main-office-rsha, accessed on April 30, 2022), アイヒマンについては "Adolf Eichmann" (https://encyclopedia.ushmm.org/content/en/article/adolf-eichmann, accessed on April 30, 2022) を参照（いずれも United States Holocaust Memorial Museum による）。

（11）ヴァンゼー会議記念館（編著）山崎徹也・清水雅大訳『資料を見て考えるホロコーストの歴史　ヴァンゼー会議とナチス・ドイツのユダヤ人絶滅政策』春風社，2015年。

この会議の半年後の1942年6月28日，ドイツ軍は東方へ侵攻したが，ソ連軍の反撃に遭ってスターリングラードで戦線が膠着し（スターリングラード攻防戦），1943年1月には攻略の拠点であったヴォロネジで敗れ，最終的に1943年2月2日にはソ連軍がスターリングラードからドイツ軍を駆逐した。さらに1943年7月5日にはクルスクの会戦が始まり，2ヶ月に亘る史上最大の戦車戦の末にドイツ軍が敗退し，東部戦線が崩壊した。ハンガリーの東方の隣国であるルーマニアへの連合軍による空爆も始まり，1944年3月29日には西進したソ連軍がルーマニアに侵攻した。

このような中でハンガリーを対ソ橋頭堡として戦線を立て直すべく，1944年3月12日，ヒトラーは総統命令（「マルガレーテ第1号作戦」）を発出して，ハンガリー占領を命じた[12]。ナチス占領下のハンガリーにおけるユダヤ人政策に詳しいランドルフ・L. ブラハムによれば，ハンガリー占領は主として当時の「政治的・軍事的要因」による[13]。しかし，上述した1944年3月12日付総統命令の冒頭で，ヒトラーが次のように述べていることから，ハンガリー占領は「最終解決」と一体をなすものであったことが分かる。

> ハンガリーのカーライ政権が，ヨーロッパ連合国家を裏切ろうとしていることは，以前から私や帝国政府の知るところである。ハンガリーの隅々までをことごとく支配しているユダヤ人，そしてわずかながらもユダヤの血を引く腐敗したハンガリーの反動的貴族分子が，我々と良好な友好関係にあったハンガリー国民を，今のような状況に陥れたのである[14]。

ハンガリー侵攻の準備を整えた上でヒトラーは，ハンガリー元首ミクローシュ・ホルティに会談を申し入れた。かねてからカルパチア山岳地帯の防衛を理由にウクライナから軍を引こうとしていたハンガリーにたいして，「軍事情勢全般とハンガリー軍撤退問題」を協議するためと称して，ザルツブルク郊外のクレスハイム城に招いたのである。1944年3月15日にホルティ一行はザルツブルクに到着した[15]。ヒトラーとホルティとの会談（および要人どうしの並行協議）が行われたが，会談はホルティの不在中にハンガリーを

（12）①Braham (2000), Chap. 3, pp. 53ff.; ②“Hungary after the German Occupation,” by the United States Holocaust Memorial Museum, in: https://encyclopedia.ushmm.org/content/en/article/hungary-after-the-german-occupation?msclkid=baef8723c68911ecae6975b2d2e21a16; ③“Operation Margarethe,” by sensagent - dictionary (http://www.sensagent.com/), in: http://dictionary.sensagent.com/Operation%20Margarethe/en-en/?msclkid=cacb2f54c6a911eca682abd5ad6a01a6. ② and ③, accessed on April 28, 2022.

（13）「ドイツがハンガリー占領を決定したのは，一連の政治的・軍事的要因によるものであって，『未解決』のユダヤ人問題は重要ではあったが，喫緊の課題ではなかった。1944年の春になると，ドイツへの軍事的圧力は絶え間なく加えられ，ドイツ軍を圧倒することもしばしばであった。第三帝国の指導部が強く関心を抱いていたのは，中欧東部の同盟国の絶対的な忠誠と服従を担保することであった。とくに，1943年1月のヴォロネジ総崩れ後のハンガリーの政治情勢，さらには同年末に枢軸側を離脱したイタリアに関心を抱いていた。」（Braham (2000), p. 53.）

（14）ただし，引用はBraham (2000), p. 54による。

（15）ザルツブルク駅のホームでのヒトラーによるホルティ一行の出迎えとクレスハイム城での顔合わせの記録映画をArchive Footage and Public Domain Vintage Stock - CriticalPast.comが公開している（https://www.criticalpast.com/de/video/65675038825_Regent-von-Ungarn_Au%C3%9Fenminister-Joachim-von-Ribbentrop_Allgemeine-Dome-Sztojay_Nikolaus-Horthy_Joachim-von-Ribbentrop_Schloss-Klessheim, accessed on April 29, 2022）。

占領するためのマヌーバーの一つにすぎず，占領を既成事実とするヒトラーは，その「合理化」に終始した。ドイツ側が「確約」したのは，わずかに，①衛星国（クロアチア，ルーマニア，スロバキア）は占領に関与しないこと，および②ドイツ軍（ただし親衛隊を除く）は，「容認できる」政府が成立次第，撤退することだけであった。占領作戦の推移を見極めるために，ホルティ一行はクレスハイム城に足止めされた後，帰国の途についた。

> 3 月 19 日の朝，特別列車がハンガリーに戻ったとき，一行は占領の現実を目の当たりにすることになった。その車中で，ホルティは，重要なその後の数ヶ月の間，ハンガリーの運命を導くことになる 2 人のナチス高官（エルンスト・カルテンブルンナーと総統の全権大使に任命されたばかりのエトムント・フェーゼンマイヤー）を紹介された[16]。

帰国したホルティは，ドイツの意向に沿って親独的なデメ・ストヤイを首相に指名した。

3 月 19 日の占領完了と同時に，先遣部隊を率いたアイヒマンがブダペストに進駐し，アウシュヴィッツ収容所複合体の総司令官ルドルフ・ヘスと綿密な連絡をとりあって，ユダヤ人の組織的移送計画を立案し，その遂行を担当した。ストヤイ政権のもとでユダヤ人の一斉検挙，ゲットーや一時収容所への強制集住，収容所への強制移送が行われた。大量集団移送が始まった 1944 年 5 月中旬から 2 ヶ月ほどで，ゲットーなどに集住させられたユダヤ人 44 万人が，主としてアウシュヴィッツに移送された（数千人はオーストリアで塹壕建設に使役された）。この結果，ハンガリーのユダヤ人コミュニティはブダペストに存在するだけになった[17]。アウシュヴィッツ・レポートがハンガリーやアメリカなどに届けられたのは，このころである。

4．アウシュヴィッツ・レポートと強制移送の中止

ドイツ軍の占領以降，ユダヤ人を放逐し，ハンガリーをユダヤ人一掃地域（judenfrei）にする掃討作戦が組織的に遂行されていたが，1944 年 7 月 7 日，急遽，ホルティはユダヤ人の強制移送を停止させた。ハンガリー政府がこのような判断を下した背景は，おおむね次のとおりである。ドイツ軍によるハンガリー占領後も，同年 6 月 4 日にローマが解放され，その 2 日後にはノルマンジー上陸があり，東部戦線だけでなく枢軸国側にとって戦況は悪化の一途をたどった[18]。枢軸国の敗北が見通される中でハンガリー政府の内部では，ドイツの「最終解決」に加担し続ければ，戦争犯罪裁判への被告人としての出廷が現実化するとの懸念が高まったが[19]，「ユダヤ人問題」の取扱については甲論乙駁の状態が続き，確たる結論には至らなかった。ブラハムによれば，このような中で，強制移送停止の方向に舵が切られたのは，アウシュヴィッツ・レポートを読んだ各国要人からの圧力であった[20]。政権内での論議を紹介した後で，

（16）Braham (2000), p. 55.

（17）“German Occupation of Hungary,” by the United States Holocaust Memorial Museum, in: https://encyclopedia.ushmm.org/content/en/article/hungary-after-the-german-occupation?msclkid=baef8723c68911ecae6975b2d2e21a16, accessed on April 28, 2022.

（18）ノルマンジー上陸は，ホルティの態度をかえさせる「決定打になったとは言えないまでも，変化をいっそう助長することになった。」（Braham (2000), p. 159.）

（19）*Ibid.*

（20）ただし，ヴルバ＝ヴェツラーによる報告文書がハンガリーとスイスのユダヤ人指導部やキリス

表３　第２次世界大戦中のハンガリーのユダヤ人死亡者数等

		トリアノン・ハンガリー（訳注１）			割譲地	1944 年ハンガリー計
		ブダペスト	郡部	計		
ユダヤ人の人口（1941 年）（訳注２）						
ユダヤ人（1）		184, 453	216, 528	400, 981	324, 026	725, 007
改宗者・ユダヤ系のキリスト教徒[a]（2）		62, 350	27, 290	89, 640	10, 360	100, 000
計　(1)＋(2)	[A]＋[B]	246, 803	243, 818	490, 621	334, 386	825, 007
ドイツ占領（1944 年３月 19 日）前						
勤労動員隊員（3）		12, 350	12, 500	24, 850	17, 150	42, 000
1941 年に強制移送された外国籍ユダヤ人[b]（4）		3, 000	2, 000	5, 000	15, 000	20, 000
バチカ虐殺（1942 年）（5）		–	–	–	1, 000	1, 000
計　(3)＋(4)＋(5)	[A]	15, 350	14, 500	29, 850	33, 150	63, 000
占領時代に殺害されユダヤ人						
計	[B]	231, 453	229, 318	460, 771	301, 236	762, 007
占領の影響						
国外脱出		2, 000	1, 000	3, 000	2, 000	5, 000
強制移送，殺害，死亡		105, 453	222, 318	327, 771	290, 236	618, 007
ユダヤ人生存者（1945 年 12 月 31 日）						
強制収容からの帰還者（6）		20, 000	40, 000	60, 000	56, 500	116, 500
勤労動員の解放者（7）		5, 000	6, 000	11, 000	9, 000	20, 000
ブダペストでの解放者（8）		119, 000	–	119, 000	–	119, 000
計　(6)＋(7)＋(8)	[C]	144, 000	46, 000	190, 000	65, 500	255, 500
ハンガリーのユダヤ人の死亡者						
占領前（9）		15, 350	14, 500	29, 850	33, 150	63, 000
占領中（10）		85, 453	182, 318	267, 771	233, 736	501, 507
計　(9)＋(10)		100, 803	196, 818	297, 621	266, 886	564, 507
海外脱出によって消滅したコミュニティの住民（11）		2, 000	1, 000	3, 000	2, 000	5, 000
計　(9)＋(10)＋(11)	[D]	102, 803	197, 818	300, 621	268, 886	569, 507

a）1941 年に施行された反ユダヤ法の定めにより「人種的ユダヤ人」とされた者。
b）市民権を証明できないために強制移送され，その後カメネツ＝ポドルスク付近で殺害されたユダヤ人。
（訳注）１．1920 年６月４日，第１次世界大戦後に連合国とハンガリーとの間で締結された講和条約（トリアノン条約）によって確定したハンガリーの領土。
２．[A]+[B]=[C]+[D]
（出所）Randolph L. Braham, *The Politics of Genocide: The Holocaust in Hungary*, Condensed Edition, Published in association with the United States Holocaust Memorial Museum, Detroit, Wayne State University Press, 2000, Chap. 12, Table 5, p. 252. ただし，この表は *Hungarian Jewry before and after the Persecution* (Budapest: Statistical Department of the Hungarian Section of the World Jewish Congress, n.d.), p. 2 にもとづく。なお，表側の(1)～(11)，[A]～[D] は引用者による。

ブラハムは次のように述べている[21]。

> その間にも，ホルティは国の内外からますます圧力をかけられるようになった。ユダヤ人評議会の幹部エルノ・ペトは，ホルティ家，とくにミクローシュ・ホルティ・ジュニア［国家元首ホルティの長子］とのコネを利用して，ヴルバ＝ヴェツラーによる報告文書を，摂政［ミクローシュ・ホルティ］に注目させることに成功した。また，モーリック・エス

ト教指導部に渡った正確な日付は不明とされている（Braham (2000), p. 92）。
（21）*Op. cit.*, p. 161.

ターハージ伯爵とイシュトバーン・ベトレン伯爵などのキリスト教会幹部からだけでなく，［ホルティの］親しい友人や腹心の部下からも，ホルティには圧力がかかった。スイスの新聞社がヴルバ＝ヴェツラーによる報告文書の抜粋を連載で報じ，ハンガリーにおける最終解決の実態を暴露した 6 月下旬になると，国外からの圧力が始まった。6 月 25 日，ローマ教皇ピウス 12 世は，ホルティに親書を送った。その翌日にはルーズベルト大統領が，また 6 月 30 日にはスウェーデン国王がそれに続いた。アメリカ合衆国大統領は，ユダヤ人強制移送の即時停止とあらゆるユダヤ人排斥措置の執行停止を要求し，それを拒否した場合にはこれまで以上の武力で報復すると脅した。ハンガリー側からの即時回答はなかったが，7 月 2 日のブダペストへの異例の大空襲は，同大統領のメッセージの本気度を示すものであった。（［　］内は引用者による。）

このような経緯を 7 月 7 日の強制移送停止と重ね合わせれば，アウシュヴィッツの内情を暴露したアウシュヴィッツ・レポートは，すでに 44 万人が移送された後ではあるが，ハンガリーのユダヤ人のさらなる強制移送を停止させる役割を担ったと考えられる。しかし，ユダヤ人の受難がそれで終わったわけではなかった。

1944 年 8 月 29 日，ストヤイを更迭したホルティは，ゲザ・ラカトシュを首班とする政権のもとで，ソ連との和平交渉を模索した。これを察知したドイツ軍の支援を受けて，1944 年 10 月 15 日に矢十字党（親独・反ユダヤ主義政党）を率いるフェレンツ・サラシがクーデターによって権力を掌握し，その翌日にはホルティの身柄が拘束された[22]。サラシ政権の下で強制移送が再開され，多数のユダヤ人が強制労働や収容所などで殺害された。ブダペストを流れるドナウ川の岸辺で射殺され，流された者も少なくない。前頁には，ドイツによるハンガリー占領の前と占領中におけるユダヤ人の死亡者数等にかんする表を掲げた（表 3）。

（22）*Op. cit.*, pp. 181ff.